慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	擬古物語系統の室町時代物語：「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」外
Sub Title	
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1965
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.4 (1965. 3) ,p.175- 308
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000004-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

擬古物語系統の室町時代物語

――「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」外――

松本隆信

はじめに

室町時代物語の全貌は、市古貞次博士の「中世小説の研究」における極めて行き届いた分類整理によってほぼ明らかにせられたが、この大著を一見すれば、この時代の物語が多種多様である反面、文辞、筋立、思想などの各面に亘って類型性の著しい作品がいかに多く存在したかが知れるであろう。しかも、そうした物語の型は、いろいろな点で入りくんでいて、一面から単純に類別することは甚だ困難である。その上に、類型作品の多い物語群ほど、一つ一つの作品内における異本の派生も顕著な傾向が見られ、そのことが更に複雑さを加えている。このように異本の多い作品、また類型作品の多い物語群は、それだけ当時の読者に迎えられた事実を反映しているのであって、今日から見た文学的価値とは別に、それらが室町物語の中核をなしていたものと考えられるのである。従って、そういう作品における異本の比較調査と、同類型の物語群中の作品相互の関係を検討することは、室町物語の成立と展開の跡を享受者

の側に即して辿るためには、欠くことの出来ない基礎作業であろう。そこで、このような特徴を最もよく備えている室町物語の作品を、グループ別に順次とりあげて、これ迄に調査し得た伝本の整理を行ない、更に作品間の異同の具体相を明らかにし、そこから問題点を見出してゆきたいと思うのである。

伝本の調査は公開の図書館・文庫等を主として行なったもので、個人の所蔵にかかる資料については調査の行き届かなかった所が多いかと思う。またこの種の物語は、今日でも未知の伝本が巷間にしばしば現れてくる状況である。だがこの点については同学の方々の御援助を俟つ外ない。大方の御教示を得ることが出来れば幸いである。

なお、貴重な原本の閲覧及び撮影を御許可下された方々の御厚意に対し深く感謝の辞を申し上げる次第である。

一

市古博士が「中世小説の研究」において、公家小説として分類された諸作品は、平安朝以来の貴族階級を基盤とする物語文学の伝統に連なるものである。市古氏は公家小説を更に、(1)恋愛談、(2)継子物、(3)歌物語と歌人伝説、(4)その他、という風に大別されたが、この中の(1)と(2)に属せしめられた諸作品（(1)忍音物語・兵部卿物語・しぐれ・若草物語・桜の中将・扇流し・くるま僧・狭衣・あめわかみこ・雨やどり　(2)ふせや・美人くらべ・秋月物語・岩屋草紙・一本菊・小落窪・花世の姫・鉢かづき・うばかは・中将姫本地・朝顔の露の宮・月日の御本地・伊豆箱根の本地・花みつ）の中には、鎌倉時代の擬古物語を直接承けているものが多く見出され、室町物語の成立の契機を探る上での資料的価値が大きい。

(2)の継子物が室町物語の中で大きな類型をなすことはよく知られる所であるが、それに対して(1)の中にも、中心を

なすプロットの極めて類似した作品群が見られる。「忍音」「しぐれ」「若草」「桜の中将」の四篇がそれで、外にその後紹介された「志賀物語」（堀川の中納言の姫君）がある。これらの諸篇は、素姓は賤しくないが父母に死別して恵まれない境遇にある姫君が貴公子に見出され、一度は幸福な結婚生活に入るものの、舅が夫に対して権門の息女との政略的結婚を強いたために、その犠牲となって家を逐われるというプロットが特徴となっている。継子苛め型の物語に対して、嫁苛め型ともいうべき物語である。

右五篇の中、「忍音物語」は、源氏一品経表白・月詣和歌集・和歌色葉集・八雲御抄・風葉和歌集等にその名が見え、既に平安末期から存在したと言われるが、風葉集所採の和歌三首は現存本にはすべて存しない。しかし人名は一致し、三首の詞書に記す如き場面も現存本の中に求めることが出来る所から、現存「忍音」は風葉集以前の「古忍音」を改作したもので、その成立は一般には南北朝乃至室町初期頃かと推測されている。この現存「忍音」は文体が室町物語のそれとは異なり、鎌倉期の擬古物語に近い。またその伝本に顕著な異本がなく、特に奈良絵本や江戸前期の板本の見られないことも、他の四篇とは、享受者層に相違のあったことを示している如くである。すなわち、「忍音」は成立は室町期にまで降るかもしれないとしても、なお前代の擬古物語の末流に位置するものであって、いわゆる室町物語の範疇には入ってこないものと考えられるのである。

これに対して、「しぐれ」「若草」「桜の中将」の三篇は異本が多く、江戸前期において奈良絵本、板本の類も多く製作せられていて、文辞内容と共に、典型的な室町物語の様相を呈している。次に、この三篇及び「志賀物語」について伝本を解題する。

以下の伝本解題に当っては、次のような表記法を用いた。

一、刊写の年代を括った〔　〕は推定を示す。写本の年代をあらわすのに、「江戸初」「江戸前期」の使い分けをしたが、「江戸初」はおよそ慶長後期より元和寛永の間、「江戸前期」はそれ以降元禄頃までを指す。このような区別をしたのは、寛永期までは未だ刊本が多く出なかったこと、元禄期までは室町物語に対する世の需要がなお多く、刊本・奈良絵本の製作が盛んであったことから、伝本の資料的価値をうかがう一つの目安となると考えたからである。

一、装幀、料紙については、袋綴、楮紙系の場合は記載を省略した。

一、寸法は×印の上が縦、下が横である。字面、匡郭の寸法は原則として初半葉による。「単辺」とあるのは、匡郭が四周単辺の意味である。

一、奥書、刊記等の間に挟んだ／印は、原本における改行の個所を示す。

一、本文の引用に当っては、通行の字体に改め、私に句点、改行を施した。但し刊本の。の句点はその儘残した。

しぐれ　一名あまやどり

本作品には室町後期の永正十七年写本をはじめとして、写本・刊本が数多く伝存する。書名も最古本には「しくれ」とあるが、その他「しくれのさうし」「しくれ物かたり」と題する写本もあり、また刊本には「あまやどり」「しぐれのえん」などと改題したものが存する。特に「あまやどり」と題する本には、もう一つ全く内容の異なるものがあって紛れ易い。萩野由之氏の「新編御伽草紙」に収められている「今宵の少将物語」がそれで、この方にも「あまやどり」と題する伝本が多い。すなわち、「あまやどり」という本には、この「しぐれ」と「今宵の少将物語」との二種類が見られるのである。平出鏗二郎氏の「近古小説解題」には、「雨やどり」の項目の下に本作品の解説がなされている

が、本作は原名が「しぐれ」であることが明らかであるから、その扱いは不適当である。一方「今宵の少将」の方は「あせち大納言」「中くほ物語」等の異名をもつ伝本もあるが、多くの伝本は「あまやどり」と題している。従って「あまやどり」という書名は、むしろこちらの方の通称として用いるのが妥当であろう。

「しぐれ」は伝本が多いにもかかわらず、明治以後長い間翻刻が一つもなされなかった。昭和三十年に至って、はじめて横山重氏が、最古本である永正本を古典文庫の「室町時代物語二」に収められた。現在も活版本として容易に手にし得るのはこの一本のみである。同書には、掲出本並びにそれと同系の写本二種、及び刊本八種の解題がなされているが、本文の関係については詳しく述べられていないので、左に管見に入った諸本を類別し、相互の関係についての調査の結果を報告する。

A類

(イ) 大東急記念文庫蔵永正十七年写本　一冊

改装奉書紙表紙（二七×二一・五糎）。表紙左肩に「先代御便覧十一」と記すが、これは他の書物の表紙を代用したものであろう。他に外題なく、後補の扉紙中央に「しくれ」と墨書した古色を帯びた短冊形の貼り紙がある。これは元表紙の外題を切り取ったものであろうか。内題なし。本文字面高さ約二四糎。五十二丁、毎半葉十三行、各行二十二字内外。巻末に「永正拾七年卯月十一日書之／悪筆候へとも如本うつし進申候」の奥書がある。古典文庫「室町時代物語二」所収原本。

(ロ) 学習院大学蔵〔室町末〕写本　一冊

鳥の子紙打曇表紙（二六・五×一九・五糎）。表紙左肩に金紙の題簽を貼り「しくれ」と墨書。内題なし。本文字面高さ約二三・五糎。九十一丁、毎半葉七乃至八行、各行二十二字内外。岡田真氏旧蔵本。

(ハ) 多和文庫蔵〔江戸初〕写本　一冊

本書は未見。「室町時代物語二」の横山氏の解題によれば、渋で横縞を書いた後補表紙（七・二×五寸）。外題、表紙左肩に後人の筆で「異本／しくれの物語」と墨書。内題なし。七十八丁半、十行、各行十五―二十字。

B類

第一種

天理図書館蔵寛永十四年写本　一冊

改装奉書紙表紙（二四×一七・五糎）。外題「しくれのさうし」。本文字面高さ約二一糎。四十八丁、巻首一丁欠。毎半葉十一行、各行二十四字内外。奥書「天正十四年三月吉日以御本　たゝいまこれは寛永拾四十一月吉日書之」。藤井乙男博士旧蔵本。

第二種

(イ) 龍門文庫蔵元和三年写本　一冊

新補淡褐色墨流し表紙（二八・四×一九・八糎）。料紙裏打補修。内題、「しくれ物かたり」。本文字面高さ約二五糎。四十五丁、毎半葉十行、各行約三十字。朱の句点、濁点、訂正書入あり。奥書、「元和三年卯月十七日／かきをくも袖こそぬるれ／もしほくさ／なからんあとのかたみ／とそなれ」

享保六年藤屋小左衛門刊絵入本五巻　（慶応義塾図書館・岩瀬文庫蔵）

嬖応本は五冊。濃縹色表紙（二二・五×一五・六糎）。題簽、子持罫付「絵入（圏で囲む）しくれの物語一（一五）」。内題、「しくれの物語巻一（二・五）、時雨の物語巻三、志倶礼濃物語巻四」。板心、白口「しくれ物語一（一五）（丁付）」。刊記、「享保六辛丑歳／寺町五条上ル町／藤屋小左衛門」。単辺（一七・八×一三糎）。㈠十四丁 ㈡十四丁 ㈢十五丁 ㈣十六丁 ㈤十五丁。毎半葉九行、各行二十三字内外。挿絵、㈠三頁 ㈡―㈤各二頁。

㈡〔正保慶安〕刊絵入本三巻（横山重氏赤木文庫・東大図書館（上中欠）蔵）

赤木文庫本は合一冊。黒行成表紙（二五・二×一七・七糎）。題簽、後補墨「しくれ」。内題、「しくれ上」（中下巻には無し）。本文字面高さ約二〇糎。板心、「しくれ上（中下）（丁付）」。（上）十九丁（中）二十九丁（下）二十二丁。毎半葉十行、各行二十―二十五字。挿絵、（上）三頁（中）四頁（下）三頁、丹緑彩色。戸川浜男氏旧蔵本。

本書は中巻の第十二丁が第十三丁と重複している。すなわち、第十二丁の本文は欠けているのであるが、丁付は十一・十二・十三と順序に通っているので、単に製本の際の誤りとも言い切れない。次の万治の改題後印本には第十二丁の本文が存する。

東大本は下巻のみの零本であるが、挿絵にはやはり丹緑の彩色が施してある。

同右〔万治〕改題後印本（京大図書館・赤木文庫蔵）

右の〔正保慶安〕板の書名を「雨やとり」と改題した本で、題簽は「あまやとり上（中下）」、内題も「雨やとり上」と入木し、板心は原板の「しくれ」を削って、「上中下」のみを残している。横山重氏は、寛文五、六年頃刊の和漢書籍目録に「三冊　雨やとり」と出ている所から、本書は万治年間、またはそれよりも以前に改題されたものと

推定されている。（古典文庫「室町時代物語二」解題参照）

大東急記念文庫蔵〔江戸前期〕写奈良絵巻　五軸

縹色亀甲地模様錦繡表紙。紙幅一七・二糎。見返し金紙、料紙鳥の子、紙背金切箔散し。外題なし。内題「時雨物語第一（一五）。本文字面高さ約一五糎。各行十四字内外。絵、㈠四図㈡三図㈢五図㈣五図㈤四図。本書は錯簡が著しい。

(ハ)　寛文十一年鱗形屋刊絵入本三巻　（大東急記念文庫・国会図書館（中欠）蔵）

大東急記念文庫本は三冊。縹色表紙（二七×一八・七糎）。題簽、子持罫付「絵入しぐれのえん　上（中下）」。内題、「しぐれのえん　上（中下）」。尾題、「上（中）巻終」（下巻無し）。単辺（二二・五×一六・九糎）。板心、白口「あま上（中下）　（丁付）」。刊記、「寛文十壱歳／孟春吉旦／江戸大伝馬町三丁目／うろこかたや板」。（上）十五丁、（中）十四丁、（下）十五丁。毎半葉十四行、各行二十五字内外。挿絵、（上）（中）各六頁、（下）七頁。

本書は、題簽と内題においては、古板の原書名「しぐれ」を生かして、「しぐれのえん」という新しい題名を考案しながら、板心のみは「あま」として、改題の「雨やどり」の書名をも残している。

天和四年鱗形屋刊絵入本三巻　（大東急記念文庫・東大図書館・教育大図書館・東北大図書館蔵）　同上無刊記後印本（国会図書館蔵（中欠））

教育大学蔵本は三冊。縹色行成表紙（二六・九×一八・六糎）。上巻に「絵入あまやとり　□」の子持罫題簽。（中下巻は欠。他本はいずれも題簽を欠く）。内題「しぐれのえん上（中下）」。尾題「上（中）巻終」（下巻無し）。単辺（二二×一六・六糎）。板心、白口「あま上（中下）　（丁付）」。刊記「天和四年子正月吉日／江戸大伝馬町三町

目／うろこかたや板」。（上）十二丁半、（中）（下）各十二丁。毎半葉十四行、各行三十五字内外。挿絵、各巻六頁。本書は、本文挿絵共に寛文十一年板に基づいて複刻している。但し、寛文板下巻の挿絵第二図を省略した。

(二) 享保十三年近江屋九兵衛刊絵入本二巻（東京国立博物館・東大図書館・大東急記念文庫（下欠）蔵）　同上鶴屋喜右衛門後印本

東京国立博物館本は一冊。縹色行成表紙（一八・六×一三・四糎）。題簽、子持罫付「絵入中将しくれのえん あまやとり　全」。内題「あまやとり上（下）」。単辺（一六×一一・九糎）。板心、黒口「あま上（下）（丁付）」（丁付は上下通し）。刊記、上下各巻末に「享保十三年申ノ正月吉日／横山町二丁目／近江屋九兵衛板元（開板）」。（上）十丁（下）九丁。十六行、各行三十五字内外。挿絵、（上）六頁（下）五頁。近藤清春画。

鶴屋喜右衛門後印本は未見。（古典文庫「室町時代物語二」解題参照）

第三種

蓬左文庫蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　五冊

紺地金泥草花模様表紙（一七×二四糎）。見返し金切箔金泥松模様、料紙間似合。表紙中央に紅色題簽「しくれ一（一五）」。本文字面高さ約一四糎。(一)二十四丁(二)二十三丁(三)二十三丁(四)二十二丁(五)二十一丁。毎半葉十三行、各行十三字内外。挿絵、(一)(二)(三)各五頁(四)四頁(五)六頁。

東洋文庫蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　二冊

紺地金泥草木模様表紙（三三×二五・四糎）。見返し卍字つなぎ模様金紙、料紙草花模様下画鳥の子。表紙左肩に紅色地金泥模様紙題簽「しくれ上（下）」。本文字面高さ約二七糎。（上）四十三丁（下）三十六丁、毎半葉十二行、

各行十九字内外。挿絵、（上）十七頁（下）十一頁。

右に掲げた諸本の本文について見ると、物語の筋の上ではさしたる相違は無い。しかし、A類本とB類本との間には、物語中の和歌の数に著しい違いがあり、A類本の三十五首に対して、B類本は十五首に達ぎない。A類の大東急記念文庫蔵永正十七年写本と、B類の天理図書館蔵寛永十四年写本とによって、和歌の個所を対照すると左の如くである。

A　大東急記念文庫本（傍注は学習院本多和本）

(1)
そのとき、中将との、よきひまかなとうれしくおほしめして、もみちかさねのうすやうのかみに、にほひふかきに、文をかきでやり給ふ、事はなくして

たまほこのみちゆきふりに見るよりも、ちきりはふかき物にしらすや

と、かやうにかきて、すいしんをめして、これ、ならひのつほねへまいらせよとて、たひにけり

(2)
中将との、心をきところなくうれしくて、いかなる人とりにきたるとも、いかてかとらるへき、これそほとけのりしやうとありかたくそなかめ給ひける

たのもしくかれたる（学）（多）たのもしや木にも花さくと、とけるちかひはいまそしらるゝ

とうちゑひして、いさゝせ給へ、人もしるましきところに

B　天理図書館本

そのとき、ちうしやう殿、よきひまとおほしめして、もみちかさねのうすやうに

たまほこのみちゆきふりを見つるより、ちきりはふかきものとしらすや

かやうにかきて、ひきむすひ、六ゐのしんをめし、これをならひのつほねへまいらせよとて、たひにけり

中将殿、御心おき所なくうれしくて、御ひさにかきのせたてまつり、いかなる人のとりにきたり候とも、いかてやり申へきとおほしめし、うれしくて、ほとけの御方へむかひて、ちうしやう殿、かくとゑいしたまひけり

たのもしやかれたる木にもはなさくと、とけるちかひはいまそしらるゝ

かやうにゑいしさせ給ひ、いさゝせ給へ、人もしらぬとこ

かくしまいらせんとて……

(3)

くるまのしたすたれのはつれより、中将殿のかりきぬの袖さし出て、露にしほれけれは、中将殿かくそなかめ給ふ

人しれずおもひかないてゆくみちに、なにゆふさりの袖ぬらすらん

(4)

はゝこせん、すゝりかみをむかへて、是かきてやり給へときひしけにありしかは、のかれかたくて、筆にまかせて

きゝそめし日より心のあくかれて、いつしかそまつあふさかの関

とかきて、うちおきてたち給ふ

(5)

中将殿、是をきゝたまひて、御みめこそよからめ、御心はへのやさしさよ、おしきかなく、いくほともなき此よに物を思ふかなしさよ、たちまちたゝしゆつけとせいをもせはやとそおほしめしける

中将かくなん

見つるよりたちはなるへきかたそなき、身にそふかけとなりやしなまし

との給ひけれは、ひめきみ、なくくかくそ

わかれても身にそふ影はとまりなむ、いかなる山のおくにいるとも

(6)

中将殿の心には、こんつめつのせめもかくやと、うとましくおほえて、なみたせきあへ給はす

ろにかくしまいらせんとて……

中将殿、くるまの下すたれより、きぬのそてあまりて、つゆにしほれたるを、中将殿うちつけ給ひて

人しれすおもひかなへてゆくみちに、なにあさきりのそてぬらすらん

はゝこせん、すゝりかみをとりむかひて、これかきてやりたまへと、きひしく仰ありしかは、のかれかたくおほしめして、ふてにまかせてかきなかし、うちおきてついたち給へは

中将は、ひめ君のことのはともをきこしめして、御かたちすくれ給ふにつけても、御心はせまても、ならふかたも候ましと、おほしめしけるにもいとゝせんかたなく、たちまちしゆつけをもせはやとそおほしめしける

中将とのは、これやめひとのみちにおもむき、ゑんまのつかいのこくそつもかくやとおもふに、御なみたもせきあへ

(7)

(学)(多)あられふり
あられふるしもさゆる夜にをきわかれ、身にたましいも
なく〳〵そ行
かやうにうちなかめ、道すからちうゝのへとおもひつゝ
なをしの袖をしほりそかねさせ給ひけり

(中将) 我御かたへたち入、かたらひふし給ふ、枕のした
にはたかひの涙のひまなさに、あたりに舟もよせぬへし、
ひめきみかくそ
おもへともなをそかなしきいかゝせん、身をかくすへき
やまなしの花
とうちなかめ給へは、ちうしやう、いとゝかなしくて
山なしとおもひなわひそもろともに、ふかき谷にも身は
かくしてん
かやうになかめ、もろともに涙にむせひおはしけるに、ち
ゝ大しん殿よりよひまいらせ給へは、又きぬ〳〵をおきわ
かれ、まいり給ふ
はゝこせん、すゝりかみをとり出し、いかにや、こうてう
のをそきわとの給へは、筆にまかせて
あわはやとそゝろにものをおもはせし、むくひにいまは
とはしとそ思ふ
とかきて、うちおき給へは……

(8)

たまわねは、なく〳〵、かくそなかめ給ひけり
あられふりしもさゆる夜もおきわかれ、身にたましひも
なく〳〵そゆく
かやうにうちなかめ、みちすからたゝめいとへおもむく心
ちして、なをしの御そてはしほるはかりなり

(中将) いつもきよしん(ママ)所へいらせ給ひ、かたらいふし給
ふ、御まくらの下、たかひの御なみたに、あまのつりする
はかりなり

(9)

御返事まいらせけれとも、中ちやう殿は取もあけたまはね
又大しん殿より、いらせ給へと御つかいありけれとも、と
みにもいてたまわねは、御つかいしきなみなりけれは、御
心ならす、おきわかれてまいり給ふ
はゝうへ、御すゝりめしよせ、いかに、てうのおそけれは
とのたまへは、中将殿は心ならすふてにまかせて、なみた
なからにかきたまふ
あわはやとそゝろに物をおもひせし、むくいにいまはと
わしとそおもふ
とかきて、うちおかれけれは……
御返事まいらせけれは、中将は御てにもとりたまわす、御

は、はゝこせん御らんしけるに
(学)(多)とはしとも
とわはともいふことの葉はことはりや、夜ふかくかへる
こゝろならひに

(10)

それをはしりたまはて、中将殿出給ふ
そのときひめきみ、御袖をかほにあて、涙のひまよりもか
くなむ
しきたへの袖には露のおきわかれ、鳥とともにやねをは
なくへき
あそはしけれは、中将
心をはきみかあたりにそゑおきて、うわのそらにやわか(学)
(多)われはゆくらん
れ行らむ
とて、もろともにはなれかたくをほしめしけれとも、さて
あるへきことならねは、御くるまにめして出給ふ

(11)

(姫君)　せめての事にかくなん
いつはりをきみかちきりしことの葉に、かゝる涙のつゆ
そかなしき
とうちなかめつゝ、ちからおよはぬ事なれは、思ひしのひ
てすき給ふに
はゝ北の御かた御らんしけれは、ふてのたてと、もしのな
かれ、なへてならすあそはしけり
とわしともいふことのはことはりや、夜ふかに帰る心
ならいに
それをは、ゆめにも中将しらせたまわすおはしける
かなしみのあまりに、ひめ君は御なみたなから、かくはか
り
偽りをきみかちきりしことの葉に、かゝるなみたのつゆ
そかなしき
かやうにうちなかめ、けふもむなしくくれぬれは、なくさ
む事もさらになし、まくらもとこもさひしくて、きぬひき
かつき打ふし給ひて、かくはかり
いさゝかもたちはなれしとちきりしに、いく夜になりぬ
そてそかなしき

中将殿のつほねに(学)(多)つねに御らんしけるかゝみを御らんしけれとも
そのをもかけも見えねは、ひめきみなく〳〵かくはかり
　ますかゝみみしおも影はしのふとも、またも此世にいつ
　かあふへき
ことに
　やゝもしもことふ人のありもせは、うきねをたてゝい
　てしともゆへ
ふゑに
　なれしこそくやしかりけりふゑ竹の、うきよのふしをき
　くにつけても
まくらに
　しきたえの枕よなく〳〵かさしけん(学)かはしても(多)かはしけん、はかなかりける中の
　ちきりを(学)ちきりは
はしらに
　なれにけんなこりそをしきまきはしら、またたちかゑり
　むつれしもせし(多)なれにける
よるの御ふすまに
　からころもかさねしつまをうらみつゝ、袖にあまるはな
　みたなりけり
と、かやうにいろ〳〵の物にあそはしおき、よりそふまき

一八八

かやうにゑひし、ちからおよはぬ事なれは、おもひしのひ
てすこし給ふ
中将の見給ひしきやうたいを御らんするに、そのおもかけ
もうつらねは、なく〳〵おもひつゝけ、かくはかり
　ますかゝみなれにしかけをしのびても、又もこの世にい
　つか見るへき

かやうにゑひし、きてはよりそふまきはしら、そもむつま

はしらさへ、むつましきゆかりを、けふよりほかに見ましきよとおほすに、心もきえまとひ……

御かと御らんして、あふきかさしやうはいかにとて、おしいらせ給ひぬ、とかくたわふれさせたまひて、御かと、かくそあそはしける

見てもまたなをそ恋しきけふよりは、おなしこゝろにきみをなさはや

とおほせられけれは、ひめきみ

あらためておなし心になりやせん、花にうつろふきみとおもへは（学）けふよりは

かやうに申させ給へは、なを御たはふれのみにてありけるほとに、くわうきよへの御出おそくならせ給へは、とくまいらむとて、きよしゆつなる

ことのかしはかたのもとにも、ひわのふくしゆの中にも、ふゑのあなにも、うすやうにかきたる物あり、とり出して御らんしけれは、ありし人の御てなり、なか〳〵涙もとゝまらす、中将殿せめての事にかくはかり（学）かたはかたの

こちくてふわれそかなしきふえ竹の、なとふし〳〵にねをはたつらん

いつはりをきみにちきりしこゝろゆへ、おつるなみたの露そかなしき

なとなかめ給ひて、しつかに文ともを御らんすれは、色〳〵しきゆかりをも、けふより外にいつかみんと、おもふ心もまとい……

御かと、此御ありさまを御らんして、あふきのかさしやうはいかにとて、をしのけ給ふ

さる程に、くわうしきよへの御いて、おそくわたらせたまへは（ママ）

ことのかしすのもと、ひわのふくしゆのもとにも、ふゑの中にも、うすやうにかきたる物有、とりいたしてみ給へはありし人の御てなり、よみつゝけて見給ふに、御なみたもさらにとゝまらす、あるかなきかのふてのあと、かすみ〳〵にすみくれして

こちくてう事そかなしきふゑ竹の、うきふし〳〵にねをのみそなく

つらからはわれも心のかわれかし、なとうき人のこひしかるらん

のうたのおくに、人の御心をうらむへきにあらす、たゝうき身のほとこそかなしきなとそ、かゝれたり

すてに出給ふとき、おとといをめして、いとま申ていつるそよ、みな人はつらけれとも、なんちはかりは、恋しき人のかたみとおもへは、なこりをしくこそおほゆれとて、ひめきみのあそはしける物を御らんして

（学）（多）みつくきにかきなかしけん
みつくきのかきなかしけるあと見れは、わか身そつらき返々〳〵も

ひとりこそおもひいりぬれ山の葉に、つきせす物をおもふ身なれは

たらちねのおやのこゝろのやみゆへに、くらき道にやなをまよはまし

かやうにあそはして、我しゆけせさらむさきに、ゆめ〳〵人にかたるなよ

すてに月影にしの山の葉にかゝりけれは、中将殿いとま申てとて、なこりを袖につゝみつゝ、涙のそこにかくはかり

（学）（多）より〳〵に
きよ水のたきのしらいとよる〳〵に、おもひはいてよいつの世までも

しゝう、なみたをおさへて

きよ水のたきのしらいとみたれつゝ、いつの世にかわとけて見るへき

かくてなみたとともに、中将殿はいて給ふ

人の心をうらむへきにあらす、たゝうき身のほとそかなしきなとゝ、かゝれたりけれは

すてに出給ふとき、おとといをめして、いとま申そよ、みな人はつらけれ共、なんちはかりは、人のかたみとおもえはなこりおしくそおほゆれ

われ、しゆつけをせぬさきに、ゆめ〳〵人にかたるへからす

すてに月かけにしの山のはにかゝりけれは、中将いとま申て、こしやうにてまいりあふへしとて、なこりのそてをひきはなれ、つゐに出給ふ

(17)

さてしゝうは、ゆふへのうすやうにつゝみたる物、けさひめきみに見せたてまつれは、みとりのたふさなり、夜のほとの事なれは、らんしやのにほひくんして、いまたうつりかもつきさるに、三しゆのうたあり

かすならぬうき身のとかをおもはすは、ちきりしまゝにともなひてまし

きみゆへに山のおくには入ぬとも、あわれとたにもおもひをこせし

もろともとさしもちきりし山の葉に、我ひとりのみおもひいるかな

(18)

かくて都には目出度さゝめきあひける事、よかわにつたへきゝ給ひて、中将入道とのよりおとひかもとへ、かくそかきておくられける

花めけるはなのたもともうらやます、こけのころもそ我身にはつく

かしこくそ花のたもとをかさしける、(学)(多)かわしけるきみかさかへをきくにつけても

みつせ川あふせときくをたのみにて、しての山ちのいそきをそする

しゝうは、□□中将のたまはりたりしうすやうにつゝみたる物を、ひめ君にまいらせけれは、みとりのたふさをきりてつゝみたり、夜の程の事なれは、らんしやのにほいくんして、いまたうつりかもつきさりける、二しゆのうたおそかゝれたり

かすならぬうき身のとかをおもわすは、ちきりし事をともないてまし

君ゆへに身はいたつらになりぬともあわれをたにもおもひおこせし

かやうにあそはし、こまやかなる事はしゝうにこそと、かゝれたり

みやこは、めてたき事かきりなく候事、よ川まできこえけれは、中将入道とのつたへきゝて、かくそよみておくられける

いろめける花のたもともなにかせん、けには身につくこけのころこそ(ママ)

かしこくも花のたもとをかたしける、君かさかへを見るにつけても

以上の如く、A類の大東急本の三十五首の中、二十一首がB類の天理本には欠けているが、逆に(11)において、天理

本の「いさゝかも……」の歌が大東急本には見えないので、差引二十首、天理本の方が少ない訳である。

ところで、この両本における和歌の多少の性質には、三種類が見られる。一は、一つの場面に、A類は数首の歌が併記されていたのを、B類はその中の何首かを欠く場合で、前掲の(12)(17)(18)がそれである。二は、B類に歌を詠んだという記事はありながら、歌そのものは記されていない場合で、(4)がそれである。三は、B類には歌を詠んだという記事そのものが欠けている場合で、(5)(7)(10)(13)(15)(16)の六例が見られる。

次に、ABの両類にありながら、対応する歌が全く異なっている例が一つだけ見える。(14)の第二首目、Aの「いつはりを……」とBの「つらからは……」とである。ところがAの「いつはりを……」の歌は、既に(11)の所に殆ど同じ形で出ている。Bは恐らくこの事に気がついて、別の歌に改めたものであろう。

さて、AB両類の最も著しい相違は、このように和歌においてであるが、なおこの外にも、叙述に繁簡のある個所が随所に見られる。主な所を掲げてみる。

(19) しゝうおもふやう、さもうつくしき御すかたを、そうに見せん事こそこゝろうけれ、あわれこの事ひめきみに申さはや、いかになけかせたまひけん、御心の内もいとをしくて、やすらひゐたるところに、うへわらは、さきの文のことを、ひそかにしゝうにかたりけり、しゝう心の内に思ふやう、あわれ、さらはさやうの人にしらせたてまつらはやとおもひけれとも、たつぬへきたよりもなし、おもひわつらふほとに

やう〳〵日も暮ゆけは、はゝとせうなこんとは、ひめきみ

しゝう心におもふやう、さしもうつくしくわたらせ給ふ御かたちを、はうすにみせん事こそ心うくおほゆれ、あわれの御事やな、ひめ君に申さはやとおもひて、御こゝろのうちも御いたわしや、いかにわひさせたまわすらんと、あんしつゝけける

日もやう〳〵くれけれは、はゝとせうなこんは、へつたう

ぬすませに、へんたうのもとゑ行にけり
とかくするほとに、その日にもなりにけり、中将殿をしきりに、ちゝ大しん殿よりよひまいらせたまひけり、中しやう殿は、ふししつみて、いてもやり給はす、御つかいしきなみにまいりけり
ひめきみおほせけるやうは、御心さしたにもかはらぬ物ならは、ちきりはさりともくちすまし、おそくいらせ給へはひとへに大しん殿も、わらはかしわさとおほしめして、いかなる御つかひも候はゝ、はつかしく候へし、いまはとくいてさせ給へと、なみたをおさへてのたまいけれは、心ならすそ出させ給ひける

御ふたまには、たき物たきしめて、御なをしきせたてまつりけれとも、たゝめいとへをもむく心して、はれもやりたまはす
八こゑの鳥もなきけれは、ゆふさりはとくまいらむとて出給ひぬ、ひめきみ、御めのとにいたるまて、こゝろへかたくあさましくそおほしめす、御くるまよせさせて、古郷へといそかれける
のもとへゆきけり
とかふする程に、そのひにもなりしかは、中将殿を、大将殿へしきりによひたてまつる、され共ふししつみて、いてもやりたまはす
おもひのあまりに、にしのたいへおはして、御いもうとねうこの御かたへおはしまして、申給ひけるやうは、わかかたに候人は九月十七日よりかたらいおきて候か、いまた夜かれし侍る事さむらはす、こよひはしめてわかれなは、此ほとのなしみ、さこそはおもひ候はんすらめ、なにかくるしく候へき、御けんさんにて御物かたり候へかし、さも候はゝ、なくさむ心もや侍らんとのたまへは、まことに、けにいたわしき御事かなとて、いれまいらせたまへは、ひめきみは御なみたにかきくれて、人に見へまいらすへきやうもなけれとも、中将殿の御ことはのすへをたがへしとて、御なみたをおしのこいたまひて、いらせ給ひぬ、中将殿はおくりまいらせて、帰らせたまへは
たき物たきしめしたる御なをし、きせまいらすれは、たゝめいとへおもむく御心ちして、御なみたはれやるかたもなし
八こゑのとりもなきけれは、夕さり又まいらむとて、出たまひぬ、いまたあけさるに、いてたまへは、ひめ君もめのとも、こゝろゑかたくあさましくそおほゆる、御くるまよせけれは、いまへんしもとくくいそけとそ、いそかれけ

おりさせたまへは、御めのとはしり出て……

(22)

さて御かと、御としこすよは、おやうちくし、やことなき御事なれは、れいけいてんにこそ御とまりあるへけれとも、しよきやうてんにのみ御こゝろひきけれは、しゝうもなからむことにとて、しきやうてんにそ御とまりありける

(23)

中将殿はすくにせきさんにおはして、くるまを都へかへさりけり、六ゐのしんとたゝ二人ひゑの山にのほり、とうたうひかしたに、よかはとゆふ所へおはしつゝ、年久しくしり給へるひしりのもとにて、しゆけせんとの給へは、ひしり大におとろきて、都へかくと申候はては、かなふましきと申せは、ひしりをしりうとゝいふ事は、かやうのときのためそかしとの給ふ

そのうへ、都より御たふさはきられたりけれは、ちからなる

さる程にひめきみは、にしのたいより御かへりあらんとて、ちうしやう殿もやう〳〵いらせたまひぬらんとて、かへらせ給ふ、御すかたをねうこ御らんして、あなうつくしの御すかたや、中将殿のふかくおほしめす事、まめやかに御ことわりとそおほしめしける

中将は御くるまよりおりさせたまひけれは、御めのとはしりいて……

さて御かと、御としこしの夜は、おやのおもふ心もありとて、れいけいてんゑそ御出ありける、され共御心は、しよきやうてんにのみひきけれは、しうしんもなからん事とて、しよきやうてんゑ御かへりありて、御とのこもりありける

さる程に、中将はせきさんに行、くるまをはみやこへかへされけり、六ゐのしん一人御ともにて、ひえいさんゑのほらせ給ひて、よ川という所に、とし比しりたるひしりをたつね給ひて、しゆつけせんと有しかは、ひしり大にさわき、みやこへかくと申せは、さら〳〵かなふましきよしの給ひて、ひしりをしるうとゝいふ事は、かやうの時のよふにてこそあれ、何のよふかあるへきとの給へは

その時ひしり、けにもとて、ちからなく御くしをそりおとす

そのうへ、御たふさをは、はやみやこにてきりてのほり給

くてそそりてけり　　ひけれは、ひしりもさのみはいなみ申さて、かいをさつけ、御ころもをそまいらせける

(19)は、この物語の女主人公であるみなしごの姫君と、男主人公の中将とが、清水の御堂で隣り合せの局に宿った時、姫君の乳母が清水の別当に姫を取らせようとするので、乳母の子の侍従が思いまどう場面であるが、大東急本の「うへわらは、さきの文のことを……」の記事のある方が、後に侍従が、姫君を隣の局の中将にかくまってもらうことの伏線として妥当である。(20)は、父の命令で心ならずも右大臣（B類本は左大将）の許へ聟入せねばならなくなった中将が、いよいよその出で立ちの日になって、姫との別れを悲しむ場面である。ここでは、大東急本の、中将を勧めて出で立たせる姫君の言葉が省略され、そこに、中将の妹の許に姫君を預けるという別の記事が挿入されている。ところで、この「時雨物語」では、姫君は後に入内して、この記事にある中将の妹の女御から、天子の寵を奪うという形をとっているので、B類の天理本のように、こゝで女御が姫君を慰めるという筋を設けるのは、適切でない感を与える。しかるに、後に掲げる「桜の中将」や「若草物語」などでは、男君の姉妹は女君に対してはじめから同情的な立場をとっている。天理本の如き筋立は、恐らくそうした他の同型作品との交渉によって生じたものと思われるのである。(20)において、そのような筋を設けたために、一夜明けて早々に中将が右大臣の許から戻った場面においても(21)の如く、天理本にはそれに対応する記事が増補されている。(22)は、舅に中将との仲を割かれ、家を追われた女君が、ふとした縁から宮中に入って、天子に見出され、承香殿の女御として、天子の寵を専らにするに至った場面である。ここに出てくる麗景殿の女御が中将の妹である。大東急本では、帝は麗景殿にとまるべきだとは思いながら、承香殿の方へ心を惹かれてそちらへとまったと叙べているのに対して、天理本では、一度麗景殿に行きながら、承香殿

へ帰ったとあり、これも大東急本の方が自然な叙述である。(23)は、女君と添い遂げられぬ事を知った中将が出家を遂げる条である。天理本には、「その時ひしり、けにもとて、ちからなく御くしをそりおとす」の一句が余計に入っているが、これは次の「そのうへ御たふさをは、はやみやこにてきりてのほり給ひけれは云々」の句と前後錯雑を来していて、天理本が不手際な増補であることを示していると考えられる。

以上、大東急本と天理本とによって対照したところは、そのまま、A類系伝本とB類系伝本との主要な相違を示しているものである。A類本は、大東急本が諸本中最も古い書写奥書を有する外、他の二本も室町末江戸初期の古本である所からして、恐らくB類本よりも古躰を伝えるものと考えられるが、右の本文比較の上にも、それを否定するような事実は認められない。和歌が次第に省略されるのは、この種の物語の一般的傾向であり、またB類本の方が叙述の詳しくなっている個所もあるが、それらにはかえって不自然、不合理が見られるのである。

A類の大東急本・学習院本・多和本の三本は、夫々語句の上の小異同はかなり多く、その関係は直線的ではない。また、夫々に誤脱もかなり見られ、三本が互に相補う如き現象を呈している。（それらの異同の主なるものは、古典文庫「室町時代物語二」に掲出せられているので、ここには省略する。）従って、いずれを善本とは決め難いが、学習院本は、やや大きな脱文が九個所程あり、多和本は脱字は少ないが、書写年代がやや降るので、やはり最古本である大東急本を以て一等資料とすべきであろう。

B類の諸本はまた三種に分類し得るが、第一種本と第二種本とはかなり近い関係にあり、第三種本のみは大分離れ

ている。まず、第一種の天理本と、第二種の中最も古い板本である(ロ)の〔正保慶安〕刊本との、主なる相違個所を若干摘出してみると左の如くである。

一、天理本

(1) 又とし四十はかりなるねうはうのきよけなるか、御そはにさしより、まきへのすゝりはこのふたに、いろ〳〵のくた物をとゝのへて、これ〳〵とてすゝめ申せとも、御いらゑもしたまわねは、此ねうはう申やう、れいの又御むつかしや、よろつの御心くるしくこそ候へ、あわれ、御おやのいきてわたらせたまはゝ、此御しやうしのついてに、かもゑもまいらはやとおもひたちてさふらふに、かやうにくたひれさせ給ひ候はゝ、いかにせんとそ申ける

(2) ちゝさ大しんとの、さしむかひてわかやくそくして侍るをわれいきたらん程は、けうくんにつきたまへ、のちのけふやうになり給ふへしと仰られけれは

(3) しゝう、ひめ君の御まへにまいり申けるは、あわれ、ふつみやう御ちやうもんまいらせ給へかし、ちやうもん申けれは、おやにあふと申と、ゆかしけにいひけれは、ひめ君、此よしきこしめしていと何心なくの給ふやう、われ〳〵こそつみふかくて、さやうの事ちやうもんせすとも、しゝうはまいれかしとの給ふ

(4) しゝう、なみたせきとゝめ申やう、なれちかつきまいらせ

二、〔正保慶安〕刊本

四十ばかりなる女ばうのきよげなるか。御そばにさしより て、すゝりのふたに、色々のくだ物ともとゝのへ。これ〳〵 とてすゝめけり。されとも御めもかけず、ゆゝしげなる御 けしきにて、うちふし給へは。めのと心くるしくて、あは れ、ちゝはゝのおはしまさは。かやうのかる〳〵しき御あ りきなどはよもわたらせ給はし。この御しやうじつゐでに かもへも参らせたてまつらはやと思ひ候に。かやうにくた びれさせ給へは、いかゝせんとぞ申ける。

ちゝ大じん殿、さしむかひてわれやすくして侍るそ。われ いきたらんほとは、けうくんにつき給へ。ふみかきてやり 給へとありけれは。

じゞう、ひめ君の御まへに参りて申けるは、ぶつみやうの 御ちやうもんに参らせ給へかし。ちやうもんしつれは、は ゝにあふと申と、ゆゝしけに申けれは。ひめ君は、いと心 なくてのちやうもんは、中〳〵つみのふかきなる。我は参 らずとも、じゞうは参れかしとの給へは。

じゞう、なみだをとゝめ申やう。なれちかづき参らせて、

て、はなれまいらすへし共おほえす候しに、おもわぬ外にかくとをさかりまいらせて候へは、よそなから見まいらせても、たゝそいまいらせたる心ちして候つるに、これをかきりとおほせられ候へは、心うくかなしくこそ候へ、いかなる御ちきりにて、かやうにうすく侍りつる、ひめ君もかくてわたらせ給へとも、御むねのけふりは、たえすたちまさらせ給ふは、いかはかりとかおほしめしさふらふそや、とかく申も、中〳〵つくしかたしとて、もたえこかれけれは、中将は今一しほのなけきかなしみたまへとも、かいそなき、さてあるへき事ならねは、すてに月かけ、にしの山のはにかゝりけれは、中将いとま申て、こしやうにてまいりあふへしとて、なこりのそてをひきはなれ、つゐに出給ふ

さても大将のひめ君は、われをはにくませ給ふとしりなから、さてあるへきならねは、御くしおろし給ひけり、さ大しん殿は、たへぬ思ひのかなしさに御しゆつけありて、さてもわか代をはたれにゆつらんとかなしみ給へは、くきやうてん上人きゝ給ひて、あわれ、いまくやしくそおほすらんと、さ大しんをそしらぬ人はなかりけり

さる程に、しよきやうてんには、御くわいにんの御すかたにさたまりたまへは、くきやうてん上人きゝ給ひ、めてたき事よろこひあへり、御かと四十に御あまりおわせしに、いまたみやもわうしも、いつれの御はらにもわたらせたま

はなれ参らすへし共おぼえす候しに。思はぬ外にとをさかり参らせて候へとも。よそにても見参らすれば。たゞそひ参らせたる心ちして候つるに。これをかぎりとおほせ候へは、心うくかなしくこそ候へとて。もだへこがれけれとも、さて有へき事ならねは。すでに月かげ、にしの山のはにかゝりけれは。中将いとま申とて、なこりをそでにつゝみて、つゐに出給ふ。

さ大将のひめ君は、われをばにくむよとしりなから。さて有べきにあらざれは、かみをおろし給ひける。大じんとのも、たえぬ思ひのかなしさに御しゆつけありて。さてしも世をはたれにゆつらんとかなしみ給ふ。

さる程に、しよきやうでんは、くわいにんのかたちにさだまり給ひけれは。みかどは四十にをよばせ給へ共、みやもわうじも。いつれの御はらにもわたらせ給はねは。なのめならすよろこばせ給ひけり。

わねは、なのめならす御よろこひ給ひけり

ところで、右の五例に当る個所のA類本の本文を対照してみると、（引用は大東急本）

(1) 四十はかりなるねうはうのきよけなるか、御そはにさしよりて、まきかひすりたるすゝりのふたに、いろ〳〵のくた物ともをととのへて、これ〳〵とすゝめけれとも、A ひめきみは御目をもかけられす、ゆゝしけなるけしきにて、いかに申せとも（学）いらへたまわす いひへたまはねは、B 此女申やう、れいのまたむつかしや、御らんし入させ給へかし、よろつ御心くるしくこそ候へ、あわれ、御おやにそひまいらせたまひて候はゝ、C いまかゝるはしちかき御ありきなと、よもあらし、このしやうしのつひてに、かもへもまいらはやとおもふに、かやうにくたひれさせ給ひては、いかゝせんとそ申ける

(2) その時ちゝ大しんとの、我かさしむかひてやくそくしつるに、いきたらむほとは、わかけうくんにつき給へ、D のちのけうやうし給ひそ、文かきてやりたまへとおほせけれは

(3) さるほとに、しゝう、ひめきみの御まへにまいりて申けるは、あわれ、ふつみやうのちやうもんに御まいり候へかし、ちやうもんしつれは、ちゝはゝにあふと申せと、ゆかしけに申せは、E いところなともなくては、いかてかまいるへき、我はまいらすとも、しゝうまいり給へとおほせけれは

(4) しゝう、なみたのそこに申やう、なれちかつきまいらせて、はなれたてまつるへしともおほえ候はさりしに、思いのほかに、かくとをさかりまいらせて候へとも、よそなから御見まいらせて候へは、たゝそひまいらせたるこゝちして候つる、これをかきりとうけ給候へは、F 心うくかなしくこそ候へとて、もたへこかれけれとも、さてあるへき事ならねは、すてに月影、にしの山の葉にかゝりけれは、中将殿いとま申てとて、なこりを袖につゝみつゝ

(5) う大しんとのひめきみは、おほえなき身とはしりなから、さてあるへき事ならねは、かみをろさせたまひけり、さ大しん

とのも、たへぬおもひのかなしさにしゆけし給ひて、我あとをはたれにゆつらんとなけき給ひけり

さるほとに、しよきやうてんは、御くわいにんの御かたちにさたまらせ給ひけり、御かとは卅にあまらせたもふまて、みやもわうしも、いつれの御はらにもわたらせたまはねは、なのめならす御よろこひありけり

となる。(1)のB・(2)のDの句は天理本が大東急本に近く、(1)のC・(3)のE・(4)のFG・(5)のHIの句は、逆に刊本の方が大東急本に近い。また、(1)のAの句は、一部は刊本の方が近く、一部は天理本の方が近い。天理本は、その奥書を信ずれば、その祖本は天正十四年にまで遡り、B類諸本中最も古い本文を有するということが出来る。しかし、前述のAB二類の本文の比較によって、A類本がB類本よりも古躰を存するとの前提に立つと、右に掲げた如き天理本と刊本との本文の異同関係は、必ずしも

A類本――B類第一種本――B類第二種本

の如き系譜を示していない。すなわち、B類第一種本と第二種本とは直線的な縦の関係ではなく、並列的な関係にあると言わねばならない。それも、和歌の省略を中心とする大きな相違においては、この両種はA類本に対して一致しているので、両種がA類本から直接岐れ出たのではなく、両種に先立つB類系統の古本が存在したことを想像せしめるのである。

第二種本は板本を中心とする諸本である。(イ)の龍門文庫本は元和三年の奥書を有し、その書写年代も正にその当時と推定される。現存する板本の最古板は、(ロ)の正保から慶安頃の刊行と目される本であるから、龍門文庫本は、板本よりも先行するとしなくてはならない。しかして、龍門文庫本と〔正保慶安〕刊本との本文を比較してみると、明ら

かに同系であるが、なお次のような相違が見られる。（括弧内が龍門文庫本、丁数は刊本による）

(1) 誰もこよひは、これにつやせんとて。ほとけの御まへにあくかれゐ給へり。たづねんかたもおほへす、せんかたなくて。たゝつく〳〵とながめがちにて、つぼねにいらせ給へとも、しづ心なかりけり。（我も今宵は、これにつやせんとて、せんかたなくて）（上2ウ）

(2) さて、くたびれなんとするに、参りをそしとて。十二三ばかりなる上わらは御とぎにをきて。女はうたち四五人うちつれて参りける。（くれなんとするに、まいりをしわけてはやとて）（上4オ）

(3) われ〳〵がめにも、めやすきさまならば。それにすぎたる事有まじ。いざや、さらば、このべつたうに、ゆふさりぬすませんとそ契りける。（めやすきさまならは、このへつたうに）（上6オ）

(4) さて中将殿のおきさせ給ふを、じゝう見たてまつれば。きのふにはかのしぐれに、御かさ参らせられし人なり。きのふみたてまつりしよりも。御かほのよそほひ、なのめならすうつくしくおはしける。（ねあかみたまへる御かほのよそおひ）（上11ウ）

(5) ひめ君によりそひて、出つる時はなにともなく候はぬむねのいたく候。をさへてたび候へとありけれは（何とも候はぬむねの）（上17オ）

(6) さて六ゐのしんは大将のもとへ参り。さま〳〵のもてなしにあひ、御返事給てかへり参る。ことのよしお申せは、人々ざゞめきよろこびあへり（人々はなめきよろこひあゑり）（中1オ）

(7) さるほどに、大将のもとへをはしけれは。さすがに人のめをつけてみる思ひゆく。かたはらいたくおぼえて、とかくまぎらかして。きちやうまぢかくたち入せ給へは。（こしゝう殿、中将、せうしやう出あひて、なのめならすもてなし給ふ、

中将殿は、道すからなき給へるなみたにかほをもはれておわしけれは、さすかに人のめをつけて見るおもはゆく）（中2オ）

(8) ゆふさりはとく参らんとおほせられて。いそぎ出させ給へは、ひめ君ゆふへよりふし給へる御すかたの。いまだねなをり給はで、なきふし給へるをみ給て。いとゞかなしくぞおほしけるに。とかくかたらいふして、なくよりほかの事ぞなき。（いそき出させ給ひぬ、御くるまはやめてかへらせ給へは）（中6オ）

(9) さる程に物しりにまつられて、心ほれくとして。身にたましゐもそはぬやうになり給ふ。さてもさとのかたこひしくてさすかになきくらしおはしける。（さすかにとひにくらしおわしける）（中9オ）

(10) おといをめしよせて、中将はこれへはきたるまじきものなり。御つれくにおはしまさは中将かめのとのかすがゞもとへわたらせ給へと、申へきよしを申せは。姫君しさいあるましきよし、御返事し給ふ。（申へきよし仰られけれは、おとい参り、此よしを申せは）（中10ウ）

(11) 十のとし、ふたりのおやたがいてのち。めのとのはごくみにて、三条にすませ給ひ候つるが。あまりの御つれくさに、このほと卅日あまり。わらはがかたにおき参らせて、此程は参りさふらはずと申せば。（わらわかもとへわたらせ給候、よき人にそ候へは、心ものとかにおほえて）（中13ウ）

(12) その日にもなりければ、だいりへ参り給ひぬ。御くるまよせて、じゞう、ないしあひそいて、つほねへ入参らせける。さて、ないしせいりやうでんへ参り、御かとへかくと申あくれは。（御かと仰（ママ）たへは、ちひきの石をうこかしてこそ申ける）（中16オ）

(13) さてみかど、御としこすよは、おやのおもふ所ありとて、れいけいてんへ入せ給けれとも、しよきやうでんにそ御とのこもり有ける。（しやうきやうてんへいらせ給はん御心ひきけれは、しゆしやうもなからん事に、なかくにとて、しよきやうてんにそ御とのこもり有ける）（中25ウ）

(14) ないしをめして、あまりに此ひめ君のむつけさせ給ひて、しほりもあへ給はす。人のためにあらず、申なぐさめ参らせて。けふあすはかりなく事を申なため参らせよと仰かうふり。じゞうにかくと申せは、しゝうもせうなごんも、ないしにけうくんせられて。いかにかくいまくしくむつからせ給ひさふらふぞ。（ないしもけうくんしたてまつる）（中26オ）

(15) さしぬきのうらにこはき物そあたりける。何やらむとて、六ゐのしんをめして、みせられけるに。取出してみれは、なかに五六すんはかりあるかたしろに。ひをふりあげて、くはしくこれをみれは。おとことをんなとうちわらひて、いだきあひたるかたちなり。（かたしろにてそ有ける、くるまを小路にたてゝに、たひまつの火をふりあけて）（下3ウ）

(16) 人の御心をうらむへきにあらす。たゝうき身のほとそかなしきなとかゝれたりけれは。ことはりせめてかなしさに、ふみをかほにをしあてゝ。なくよりほかの御ことわたらせ給はす。されともいづくへかゆくへき、はづかしけれとも、かくてこそいづらめと仰ありて、わたらせ給ひしを。（なくよりほかの事そなき、おといかひとりなけきしは、かゝりける有さまを見けるにやとそおほえける、あまりのかなしさに、おといをめして、さても此人はいつくへとて出給ひし、行かたやしりたると、とひ給へは、おといなみたにむせひ申けるは、君の御出の後は、ふししつみて、とかう申候ひしかは、御いらへもさふらはす、たゝなくよりほかの御事そわたらせ給わす）（下5ウ）

(17) さてをといは中将殿の御ゆかりなれば。なつかしくおほしけり、そのうゑわうじの御めのとにて。御はうしん有けれは、大なこんの事。かぎりなくして、みやこはめでたかりし事。よかはまでもきこえて、中将にうだう。をといかもとへかくそかきて送給ふ（大なこんの二ゐにそなされ参らせける、たのしみさかへける事かきりなくして）（下21ウ）

右の中、(2)(4)(5)(14)は龍門文庫本の方が意味が通り、また(7)(8)(10)(11)(13)(15)(16)(17)も龍門文庫本と対比すると、刊本には脱文のあることがわかる。それに対して、(1)(3)は逆に龍門文庫本の方が脱文であると考えられ、(9)(12)も刊本の方が文意

は通っている。残りの(6)は「ざゞめき」と「はなめき」の用語の違いであるが、これはどちらが良いとも決め難い。ところが、(9)と(12)は、A類の本文を参照してみると、

(9) 身にたましひもそはぬこゝちして、恋しながらにつひにくらして（大東急本）　こひしながらにとひにくして（学習院本）こひしながらにとはにくゝして（多和本）

(12) なひし、せいりやうてんゑまいり、御かと御らんして、いかゝとせんしありけれは、ちひきのゐしをうこかしてとそ申けり（大東急本）

とあって、いずれも龍門文庫本の本文に近い。また(6)も、A類本は龍門文庫本と同じく「はなめき」である。

このように、概して言えば刊本の方に誤脱が多い上に、その逆の個所も、龍門文庫本がA類本の本文を承けた時に誤脱を生じたために、刊本がこれを意味の通るように改訂したと見られる節がある。従って、本文としても龍門文庫本は、刊本に先立つもので、更にいえば、刊本の祖本の位置に位する本であるとすることが可能と考えられる。

ところが、ここで一つ問題となるのは、この龍門文庫本の本文に極めて近い本文を有するものに、享保六年藤屋小左衛門板が存在することである。前掲の、〔正保慶安〕板と龍門文庫本との本文の異なる個所十七例に相当する享保六年板の本文を調べてみると、(1)(3)は〔正保慶安〕板とほぼ同じであるが、他は

(2)くれなんとするに参りをしはてはやとて　(4)ねあかみたる御かほのよそほひ　(5)なにとも候はぬむねの　(6)人々はなめつらしく　(7)こ侍従との、中将殿、少しやうとの出あひて、なのめならすにもてなし給ふ、中将とのは、道すからなきたまへるなみた、かほおもはれておはしけれは　(8)いそき出させ給ぬ、御くるまをはやめてかへらせたまへは　(9)さすかにとひにくらして

おはします (10)申へきよしおほせられけれは、おとゐまいり、このよし申せは (11)あまりの御つれ〳〵人にそひ候へは、心もものとかにおほえて (12)御かとへ申けるは、ちひきのいしをうこかして申けり (13)しよきやうてんへのみ御心ひきけれは、侍従もなからん事になか〳〵にとて (14)しゝう、せうなこん、ないし、御めのともろともに、ひめきみの御まへにゐならひて、こゑ〳〵にきやうくんしたてまつる (15)かたしろにてそありける、車をこうちにたてゝ、たいまつのひをふりあけて (16)なくよりほかの事そなき、おとひかひとりなけきしは、かゝりけるありさまを見けるにやとそおほしける、あまりのかなしさに、をといをめして、さてもこの人いつくへとて出給ひし、行かたしりたると、とひ給へは、おとひなみたにむせひ申けるは、君の御いてのゝち、ふししつみ、とかう申しゝかとも、御いらへもさふらはす、たゝなくよりほかの御事わたらせ給はす (17)大なこんの二位になされまいらせける、たのしみさかえける事かきりなし

の如く、龍門文庫本とほとんど一致している。特に(9)(12)のように、文意の明確でない所まで一致しているのは、龍門文庫本と享保六年板との関係が極めて密接であることを想像せしめる。他の板本がすべて〔正保慶安〕板の系統を引いている中にあって、享保六年板のみは挿絵も全く異なり、書名も「時雨物語」とあって、龍門文庫本と一致しているのである。

するとこの享保六年板は、その刊行に当って先出の板本につかず、板本の祖本の位置にある写本にまで遡って新たに忠実な翻刻を試みたということになる。しかしながら、この種の物語にあっては、そういうことは極めて珍しいことである。そこで考えられるのは、龍門文庫本に近い古い板本が別に存在し、享保六年板はそれについたのではないかということである。龍門文庫本の本文には次のような個所がある。

大しやう殿、ちかきほとは十日こそよき日にて候へとの給へは、さも候はゝ、其日にてこそ候はめ、こまやかにちきりて、大

しやう殿、ちかきほとは十日こそよき日にて候へとの給ひ(ママ)は、さ候はゝ、其日にてこそ候はめと、こまやかにちきりて、大しん殿はかへり給ふ

これは書写の際の不注意で、同じ個所が重複したものと思われる。こういう個所の見えることは、龍門文庫本も、板本系の本文を作成した原本ではなくして、何らかの本からの写しであったのかもしれない。これは全く想像に亘ることであるが、あるいは元和頃の刊行にかかる古活字板本があって、龍門文庫本はその写しではないかというようなことも一応考えられるのである。それはともかくとして、享保六年板は板本としてはずっと後の刊行であるにかかわらず、その本文は、現存最古板の本よりも古躰を存しているということが出来るのである。

(ロ)の大東急記念文庫蔵奈良絵巻は〔正保慶安〕板と本文が全く同じである。恐らく板本の写しであろう。

(ハ)の寛文十一年鱗形屋板の本文は、(ロ)の〔正保慶安〕板に基づいて複刻しているが、語句を所々省略した外、誤脱を訂正している所がある。しかし一方では、複刻に際して誤りを犯した個所も見られる。天和四年板は寛文板と全く変らない。ただ脱文や重複を生じた部分が幾らかある。

(ニ)の享保十三年近江屋九兵衛板は、(ハ)を承けているが、極めて大幅に詞章を節略している。一例を挙げれば次の如くである。

寛文十一年板

さて中将殿は、ひめ君の御そばにさしより、御かほを見給へは、しぐれの時御かさをくりしひめ君也。中将殿は身のをき所なくうれしくて、いかなる人の取に来りたり共。いか

享保十三年板

扨中将殿、姫君の御そばへよりて、み給へは、しぐれに笠をくりし姫也。中将殿かぎりなくうれしくて、いかなる人の取に来りたり共、いかでやるへきと思ひて、仏の御かた

でかやるへきと思ひて、仏の御かたへむきて

頼もしやかれたる木にも花さくと、とけるちかひは今そしらるゝ

とながめ給ひて、いさゝせ給へ、人もしらぬ所へかくし参らせんとて。ひめ君じゝうくるまにのせ参らせて。わが身はさいもんのきだはしをゝくり。くるまやどりよりのりぐし、清水のさかをくたりにそやられけるに。ふもとのすゝきのむし、秋をしたふこゑさむし。しものこすゑ、ちくさの色、しもになれたる野はきのをと、ふけゆくまゝにきりこめて。物あはれなるに。中将殿車の下すたれより。かりきぬの袖あまりて、露にしほたれたるにかくなん

人しれす思ひかなへてゆく道になにあさ露の袖ぬらすらん

かやうにうちゑいし。くるまの物みをあけられたりけれは。月かけさし入て。雲のたえまのかりかねの、はかけもくもりなくわたり。あらしにかづちる木のはのをと。かものかはらのともちとりの、なくねを袖にくらへても。ひめ君はたもとをしほりあへ給はす。うきことをのかれんためにいつれ共。又たれ人のかた、いかなる所へ行やらん。いくほとなき世中に、たゞよひありくかなしさよと思召、御なみたもせきあへす。

全巻に亘ってこの程度の省略が行なわれていて、全体の分量は半分位に縮められている。その中にはかなり杜撰な

へむきて

頼もしやかれたる木にも花さくと、とけるちかひは今そしらるゝ

となかめ給ひ、いさゝせ給へ、人しらぬ所にかくし参らせんとて、車にのせ、清水坂を下りにやられける、中将殿、かりきぬの袖、下すだれよりあまりて、露にしほたれたるに、かくなん

人しれす思ひかなへて行道に、なにあさ霧のそてぬらすらん

ひめ君は、うき事をのがれんために出れ共、又いかなる所へ行やらんと思召、御泪もせきあへす

省略があり、たとえば、中将が左大将の方の咒詛によって愛する女君のことを忘れてしまうという記事を省いてしまいながら、それに対応する、袴の腰に縫いつけてあった形代に気がついて正気に返るという記事は残しているといった如き、首尾一貫しない所も生じている。

第三種として分類した蓬左文庫蔵及び東洋文庫蔵の奈良絵本は相互に詞章の細部には異同があるが同系の本文で、この二本の本文は、第一・二種の諸本とは非常に離れている。和歌の少ないことは第一・二種本と同様で（若干の出入異同があるが）、その意味でB類本に属するが、第一・二種本に較べ、所々増補されている記事が見える。その著しい例を挙げると次の如くである。

(1) 清水に詣でた姫君を別当が見て、乳母に請う条を、第一種の天理本は、

さる程にきよ水のへったう、此ひめを見たてまつり、御めのとにむかひ、やう〳〵に申けり

と叙べるだけであるが、蓬左文庫本は（傍註は東洋文庫本）

さるほとにへったうは、かくと見るよりそのおもかけわすれかたく、さらぬてひにて、つほねのあたりをやすらひて、人もいてよかしと、めをつけて見るところに、女はう四五人つれていてけれは、よろこひて、その中におとなしき女はうを、かたはらへよひよせて申けるは、いつくより御まいりそと、とひけれは、めのと申やう、これはすきにしころ、三条の中納言きんさねと申せし人の御むすめにておはしますか、いかなる御事にや、ちゝはゝ一とにかくれさせ給ひて給ひて、そのゝちわらはかはこくみはかりにて、いまゝてそたてまいらせ候と申けれは、へったう、あないたはしや、中納言殿にもおそれなからすこししたしくはんへる物を、さてはそれにておはしますか、さらはこなたへいらせ給へとて、かたはらなるさしきへよひいれて、

しゆ〳〵のさかなをとゝのへ、さけをすゝめて、からあやのこそて一かさねとりいたしてめのとにとらせて申やう、さても中なこん殿わたらせ給ふほとは、つねに三条へもまいりつるに、かくならせ給ひてのちは、御ゆくゑをもきかまほしくははんへれとも、いつもひまなき身にて、いままて過まいらせはんへり、うれしくもたゝいま・見あひ申ものかな、さてひめ君は御門へまいり給ふかと申けれは、めのと、ちゝはゝましまさはこそ、またけ〳〵しく、したしきかたもわたらせ給はす、誰もてはやし、御みやつかひなともはんへるへきと申けれは、へつとう、いたはしや、さてはいつとなくなかめかちにておはしますへき心くるしきよ、何かはくるしかるへき、わかしゆくしよへいれまいらせ給へかし、めのとをはしめて十人わたらせ給ふとも、ゆめ〳〵をろかにはなんとゝ、やゝこま〳〵と申けれは、めのと心におもふやう、中納言殿にもゆかり有人なれは何かくるしかるへき、さらはと思ひて、わか身はかくとおもひ申せとも、わかきものともに申あはせ、やかてあんなひ申さんと、こま〳〵とちきりていてにけり

という風に非常にくわしく叙述している。なお第三種本には、この別当に関する記事がこの外にも増補されている所がある。

(2)

清水から姫を連れ帰った中将が、乳母の春日を姫に会わせて、娘を侍女に参らせよと命ずる条の後に、

さてめのと、大臣殿へまいり、きたの御かたに申やう、中将殿まれ人をこそ見まいらせはんへり、御かたち世にすくれ、なのめならすにいつくしく、此世の人ともおほえす、あまりにたくひすくなくわたらせ給ふほとに、一ときはかりまほりまいらせて、御まへを立さりかねたるなんと申けれは、きたの御かたは、中将いつとなくこゝろあこかれて、なかめかちにてはんへりつると、いとよき事にやなんとそおほせける

の如く、乳母が中将の母北の方に、姫の様子を報告する記事が見える。これは他本には無い。

(3) 左大将方の咒詛によって、女君のことを忘れていた中将が、正気に返って我が館に戻り、女君の書き残した歌を見て悲しむ条を、天理本は、

中将殿はかせの御心ちとて、わかかたにさし入て、さしもいて給わす、ありし所のみすかうし、おろしたてまつるをあけ侍り、見給へは、さゝかにのいとひきみたし、くる人もあらされは、ちりのみつもり、さほにかけたる御ふすま、ならへし枕のひとつになり、とりひそめたるけしき、ことひわ、ふきつるふゑも一つ所にとりすへておかれたり、よく〳〵これを見給へは、ことのかしすのもと、ひわのふくしゆのもとにも、ふゑの中にも、うすやうにかきたる物有、とりいたしてみ給へは、ありし人の御てなり、よみつゝけて見給ふに、御なみたもさらにとゝまらす、あるかなきかのふてのあと、かすみくにすみくれして

こちくてう事そかなしきふゑ竹の、うきふし〳〵にねをのみそなく

つらからはわれも心のかわれかし、なとうき人のこひしかるらん

人の心をうらむへきにあらす、たゝうき身のほとそかなしきなとゝ、かゝれたりけれは、ことはりせめてかなしさに、御ふみをかほにあてゝ、なくより外の事そなき

とあるのを、蓬左文庫本は、

中将は、大将殿へ行給はす、わか御かたへゆきたまひ(ナシ)みすのとへもさし出(ナシ)たまはす、あけさせ(みまはし)、御らんしけれは、さゝかにのいとひきみたしたるよりほかに、くる(ナシ)人もなし、よるのふすま、なから(ママ)へしまくらに、しゝう、殿はかなしき、ふえ竹の、うきふしし〳〵(うきふししけき)に、ねをのみ(ナシ)なきて、われもこゝろの、かはれかし、なとうき人の、こひしさよ(に)

秋のもみちの　色はへて　みしおも影の　ほともなく　たちわかれぬる　かちむろの　きて見る人を　まつしまに　月の

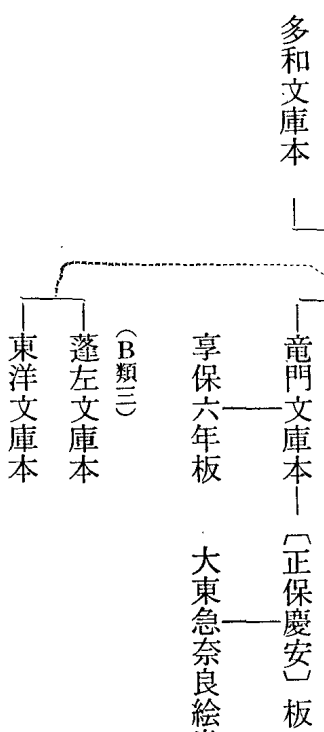
かけさへ　おほろにて　やくやもしほの　夕なきに　思ひはいつも　ふしのねの　くゆるけふりは　たれゆへに　おはしき所に　ひとりねて　おつるなみたは　ふちとなる　人のこゝろは　あさかほの　花よりうすき　ちきりかな　さよのね覚の　むつことも　みないつはりと　なりにけり　つれなき人を　おもひつゝ　心つくしの　あまをふね　なるとのおきに　こかれゆく（こかれつゝ）　なつむしの　ひに入おもひ　ふえによる　あしたの鹿も　わかことく　うた野（か）のきしの　ほろ〳〵と　なきわたれ共　とふ人（以下三句欠）の　なきさによする　しらなみの　おもひかへして　いまひとたひ　こひしき人を（の）　みちのくの　あふくま川を　わたらはや　よしそれとても　いかならん　人をはいかて　とゝむへき　わか身のほとそ　うらめしき　かやうにえひし給ひけり

とあって、ここに長歌が記されている。東洋文庫本は「殿はかなしき、ふえ竹の」から別行としているが、その方が正しく、ここから長歌になるのであろう。すると、この長歌のはじめには、天理本の二首の短歌の初句「こちくてう」と「つらからは」とを除いた残りの八句が、ほとんどそのまま使われていることに気がつく。すなわち、やはり第一種あるいは第二種の系統の本に基づいて、長歌を増補したものと考えてよいであろう。なお、「若草」「桜の中将」「志賀物語」の三篇には、いずれも同様の場面に長歌が記されている。「しぐれ」の第三種本がここに長歌を増補したのには、同類型のこれらの作品との交渉が考えられる。

記事の上の主な特徴は右の如くであるが、全体としても第三種本は叙述が長く、第一・二種本の中で最も長い天理本が、およそ三万三千字であるのに対して、蓬左文庫本は三万七千字に及んでいる。また詞章の上から見ても、A類及びB類第一種・第二種の諸本を通じて、和歌をはじめとする記事の出入異同はあっても、文章の大筋はかなり近似しており、共通した語句の使用されている所が多いのに対して、この第三種本は、対校することが全く出来ない程に

離れてしまっている。このように第三種本は極めて特徴のある異本であるが、その伝本の性質、数からいっても、さして古い本文とは思われない。恐らくB類第一・二種本のいずれかを拠り所として、全く新たに本文を作成したものであろう。

以上の結果を綜合し、諸本の関係を図示すれば左の如くである。



若草物語

本作も伝本は多く、刊本も五種を数えるが、写本には特に古いものを見ず、いずれも寛文期以降に降ると思われる本である。しかし本文の異同は後述の如くかなり著しい所からみて、作品としての成立は相当に遡るものと考えられ

る。書名も「わかくさ」あるいは「わかくさ物語」とあって、特に異名をもつ本は見当らない。諸本を分類すると次の如くである。

A類

第一種

天理図書館蔵奈良絵本　三冊

鳥の子紙打曇表紙（一七・五×二四・五糎）。料紙間似合紙。題簽、表紙中央紅色紙「わかくさ　上（中下）」。本文字面高さ約一三・五糎。（上）二十八丁（中）三十丁（下）三十二丁。毎半葉十三行、各行十三字内外。挿絵、（上）八頁（中）七頁（下）八頁。

第二種

寛文七年鱗形屋刊絵入本　（彰考館文庫旧蔵）

本書の彰考館文庫蔵本は先の戦災で焼亡し、未だ他に同板本を見ることを得ない。

〔寛文延宝〕刊絵入本三巻　（国会図書館・京大国文研究室・赤木文庫蔵）

国会図書館本は合一冊。黒表紙（二六・八×一九糎）。題簽、後補墨「わか草物語」。内題「わかくさ物かたり上（下）」「わか草ものかたり中」。単辺（二一×一六糎）。板心、白口「わか上（中下）　（丁付）」。刊記なし。上中下各巻十二丁半、毎半葉十四行、各行二十字内外。挿絵、各巻見開き一図、片面五図。

天和三年鱗形屋刊絵入本三巻　（赤木文庫・教育大学図書館、京大国文研究室・大東急記念文庫・国会図書館蔵）

同右後印本　（東洋文庫蔵）

赤木文庫本は三冊。縹色布目表紙（二五・二×一九・四糎）。題簽、表紙中央「若草物語上（中下）」。内題「わかくさ物かたり上（下）」「わか草ものかたり中」。単辺（二一・七×一六・二糎）。板心、白口「わか上（中下）（丁付）」。刊記「天和三癸亥二月吉日／江戸大伝馬町三丁目／うろこかたや開板」。各巻十二丁半、毎半葉十四行、各行二十字内外。挿絵、各巻見開き一図、片面五図。本書は横山重氏の御教示によれば、寛文七年板の覆刻である由である。前掲の〔寛文延宝〕無刊記板と本書は、本文の字詰まで同じで、ただ漢字と仮名の違いが少々あるに過ぎない。挿絵の構図も全く同じである。従って、無刊記板は寛文七年板に基づいて複刻したことが明らかである。東洋文庫本は刊記の刊年月のみを残し、書肆名を削る。

元禄六年刊絵入本三巻　（岩瀬文庫蔵）

黒行成表紙（二七・三×一八・六糎）。題簽、左肩子持罫付「絵入わかくさ物語上」若くさ物かたり中」わか草ものかたり下」。内題「わか草物かたり上（中下）」。単辺（二一・五×一八・六糎）。板心、黒口「わかくさ上（中下）（丁付）」。刊記「元禄六年癸酉九月末日／新板」。各巻十丁半、毎半葉十五行、各行二十三字内外。挿絵、各巻見開き一図、片面五図。挿絵の構図は天和三年板と全く同じ。

宝永四年鱗形屋刊絵入本二巻　（東京国立博物館蔵）　同上享保六年後印本　（国会図書館・東大図書館蔵）

東京博物館本は一冊。改装後補橙色表紙（一八・七×一三・三糎）。外題墨「わかくさ物かたり」。内題「わかくさ物がたり上」「わかくさものかたり下」。単辺（一六・四×一二糎）。板心、黒口「わかくさ上（下）（丁付）」。刊記「宝永四丁亥正月吉日／江戸大伝馬町三町目／うろこかたや孫兵衛開板」。上下各巻十一丁、毎半葉十六行、各

行三十字内外。挿絵、各巻六頁。
享保六年板は宝永四年板と同板で、刊記に「享保六年丑正月吉日」とあり、書肆名は無い。
静嘉堂文庫蔵〔江戸後期〕写本　一冊
改装後補茶色表紙（二一・七×一五・七糎）。題簽「わか草もの語　完」。内題「わか艸もの語」。本文字面高さ約一八・五糎。毎半葉九行、各行十六字内外。
静嘉堂文庫蔵〔江戸後期〕写本　一冊
改装後補茶色表紙（二三・四×一六糎）。題簽「わか草物語」。扉題（元外題）「倭謌草物語」。内題（扉見返し左肩）「若くさものかたり」。本文字面高さ約二一糎。二十四丁、毎半葉十二行、各行二十八字内外。松井簡治博士旧蔵本。
新編御伽草子所収本
萩野由之博士の解題には、底本は写本とあるのみで所在不明。
実践女子大学図書館蔵〔江戸後期〕写本　一冊
縹色表紙（二六・五×一八・六糎）。外題「若草物語　全」。内題「若草物かたり」。尾題「わか艸物かたり終」。本文字面高さ約二二・五糎。三十五丁、毎半葉八行、各行二十五字内外。黒川真道旧蔵本。
東北大学附属図書館狩野文庫蔵〔江戸後期〕写本　一冊
半紙本。題簽「若艸物語　完」。内題「若艸物語」。本文字面高さ約二一糎。二十七丁、毎半葉十行、各行二十二字内外。

B類

慶応義塾図書館蔵〔江戸前期〕写本　三冊

紺地金泥草木模様表紙（一六・六×二四・一糎）。見返し銀砂子散し。料紙鳥の子。題簽「わかくさ上（中下）」。本文字面高さ約一三糎。（上）三十四丁（中）三十三丁（下）二十四丁。毎半葉十四行、各行十四字内外。本書は奈良絵本の絵抜本で、半葉空白の頁が（上）六（中）六（下）七存する。

右のAB二類の間には、詞章の大異にとどまらず、登場人物の人名や筋の上にも相違が見られる。そこでまず両類の梗概を対比して掲げてみる。A類の方は第一種の天理図書館本に拠った。

A類	B類
(1) 按察大納言に二人の子あり。兄は少将といひ、妹は女御に参らせんとてかしづく。（第二種本、妹君の名を朝日の前とす）	源中納言みつもりに一人の姫君あり。
(2) 大納言の北の方の兄、前関白に一人の姫あり、若草といふ。	中納言の北の方重病の床に臥す。姉の藤中納言の北の方を招き、姫の事を頼み世を去る。北の方姫を引き取らんとするも、父源中納言の惜しみとどむるにより月日を経る中、中納言も思ひの数積りて空しくなる。
(3) 前関白とその北の方、相次いで世を去る。	
(4) 大納言の北の方若草を引き取り、乳母淡路を添へ、少将の妹君と一所に養育す。	藤中納言の北の方姫を引き取り、若草と名づけ、乳母を添へて懇に育む。

(5) 少将若草に想ひを懸く。

(6) 藤中納言の嫡子四位の少将、若草を垣間見て心あくがれ、常に若草の方へ行きて遊ぶ。

少将の妹君は右大臣の御子三位中将と婚約せり。大納言、妹君の中将へ嫁する節若草に供をさせんと言ふも、北の方の反対により思ひとゞまる

ある日、少将、手習をせる若草に

わかくさのおひゆくすゑをまつほとに、我かひとりゐに露そこほるゝ

と書きて示す。若草顔赤らめ物言はず。

(7) 翌年の春の一日、少将は思ひに耐へかね、妹君に若草に絵物語を持たせてよこすように頼む。心得し妹君の計ひにて訪れたる若草をとどめ、契りを交す。

翌年の春より若草例ならず悩み

あはれともたれかなかめんはるかすみ、たちへたてなはけふりとや見ん

と詠む。少将返し

もろともにわれもけふりにのほりなん、みねのかすみのたくひなりせは

若草懐妊と聞え、北の方の喜びは限りなし。

(8) 若草、少将が左大臣の姫君と許婚の仲であることを聞き悲しむ。少将心苦しく

わりなしやまたうらわかきわか草の、あさをもまたてむ

(9) 若草十五の年の秋の暮方、少将、妹君の方を訪れ、手習をせる若草に

わかくさのおひゆくすゑをまつほとに、わかひとりゐにつゆそをきそふ

と書きて見するも、若草は答へず。

妹君、少将の心を察し、翌日若草に草紙を託し、少将の許へ遣す。少将、若草を語らひ、遂に契りを結ぶ。淡路この由を見て喜び、北の方も二人の仲を許す。

(10) 翌年四月頃より若草懐妊と知れる。

七月の頃若草の苦しげなる様子を見て、少将手習ひのついでに

はかなしやまたうらわかきわかくさの、あさ日をまちて

むすふしらつゆ
と書く。若草
つゆむすふにはのわかくさ風ふかは、もとのしつくとなりやはてなん
と返す。

(11)
九月に前関白の邸に産所をしつらひ、若草少将共に移る。

すふつゆかな
若草返し
むすふ露なつのくさはにかせふかは、もとのしつくにきえやはてなん

若草は三条堀川に移ることとなり、北の方妹君は暫しの別れを惜しむ。少将、若草を三条へ送り、翌朝内裏へ参るとて
うきものにおもひならはぬとりのねに、つらさをかきるあけほのゝそら
若草返し
あけぬれはくるゝものとはたのむなり、まほろしのみそせんかたはなし
少将我が方へ帰り、硯を見るに、薄様に
をのつからおもひもいてはかきつくす、この水くきをかたみとも見よ
と若草の歌あり。少将
ひまもなくなにならひけんあしふきの、こやといふへきすまひならぬに
と書きて若草へ送る。若草また
こやといふ人もなけれはあしふきの、をとする風をたのむなりけり
と返す

(12) 若草美しき姫を生む。少将我が方へ帰り、七日に若草の許へ

あさ日さすみかさの山のひめこまつ、くもをわけてやおひのほるへき

と歌を送る。

(13) 三十日を過ぎ、忌明けて若草は少将の許へ帰る。

(14) 大納言は、少将が頼りなき女との間に子を儲けたる事を不満とす。

(15) 姫君二才になる。

(16) 三条西洞院の左近宰相、内裏にて大納言と物語の序に、少将を一人子の姫の聟に望む。大納言これを承知す。

(17) 姫三才になる。

(18) 宰相、先の約束を催促す。大納言、北の方にこの事を語るに、北の方は若草の事を思ひ、大納言の軽卒をなじる。重ねて宰相より催促され、大納言は北の方の反対を押し切りて、少将に宰相の姫への文を書けと命ず。

(19) 少将のがれ難く

あふ事をまつにいのちをかくるかな、なとよををくる心のみして

と書きて左近丞に渡す。

(20) 九月二十日頃、若草光るばかりの若君を生む。少将は夜な夜な若草の許へ通ひ若君を見る。

(21) 忌明けて、若草、少将の許へ帰る。

新年になり、妹君は若草を招きて遊ぶ。

その年の秋の司召に、父中納言は大納言に、少将は中将になる。

左大将、内裏にて大納言と物語の序に、我が姫と中将との間の約束を履行されよと乞ふ。大納言これを諒承す。

大納言、北の方にこれを語る。北の方反対するも大納言聞き入れず、中将に左大将の姫への文を書けと命ず。中将返事せず。

中将、若草にありの儘を明し、共に悲しむ。

大納言重ねて文を送る事を命ず。中将は拒むも若草に勧められ

あふさかのまつにいのちをかへるかな、ちとせをのふるこゝちのみして

(22) 少将我が方へ帰り、若草にこの事を語り、共に悲しむ。
(23) 宰相の方より姫の返事あり。
　あふことをまつにあらしの世の中に、いのちはかきりあるとこそきけ
(24) 大納言、少将の出で立ちの支度を急ぐ。北の方と妹君は若草の許へ使ひを送りさまざまに慰む。
(25) その日になり、少将は大納言にせきたてられ、宰相の方へ赴く。宰相の姫も容貌整ひ、由ある様なるも、若草の事を思ひ、涙をせきかぬ。鳥の音を待ちかね、少将立ち帰る。
(26) 少将、若草と語らひ臥す。
(27) 大納言、少将を呼び叱嗔す。少将、風邪の心地故と弁ず。
(28) 大納言、少将に後朝の文を書かす。
　かへるさはみちふみまよふ心ちして、たとりかねたるしのゝめのそら
(29) 宰相の姫より
　ことはりやけにいかはかりたとりけん、夜ふかにかへるしのゝめのそら
と返事あり。少将この文を若草に見す。

と書きて弁に渡す。
中将、我が方へ帰り、若草と語らひ臥す。
左大将の方より姫の返事あり。
　あふことをまつにはあらしよのなかに、いのちはかきりあるとこそきけ

同上

中将、若草と共に臥し
　しはしまてほそ谷河のむもれ木も、なみのはなさくはるにあふへし
と行末を契る。
中将、大納言に命ぜられ、後朝の文を書く。
　かへるさをみちふみまよふこゝちして、たとりかねたるしのゝめのそら
左大将の姫、中将の気色を察し見も入れぬが、女房に勧められ
　ことはりやけにいかはかりたとりけん、かへるにふかきしのゝめのそら
と返歌をす。中将この文を若草に見す。

(30) 大納言、少将をすかして出で立たせ、伴の者に少将を置きて帰れと命ず。夜明けて少将は帰り得ず、宰相の方に留まる。

(31) 大納言、若草を宇治に住む縁りの女の許に隠さんと企て、若草に大仏詣でを勧む。若草、大納言の意図を察し、心細く思ふ。

(32) 若草、妹君の方を訪れ、互に形見の硯をとり交し、別れを惜しむ。

(33) 若草我が方へ帰り、几帳の中の枕に少将との語らひを偲び

しきたへのまくらもかたれわきもこは、うきにたへせて
おもひいてぬと

と書きつく。

(34) 暁大納言より迎への車が来り、若草は幼き姫との別れを悲しみつゝ立ち出づ。涙の隙より

したひにしそのみとりこのおもかけは、のにも山にもはなれさりけり

と詠み、やがて宇治へ着く。

中将また大納言にせき立てられ出で立つ。大納言、伴の者に中将を置きて皆帰れと命ず。中将は帰り得ず、心ならず大将の方に留まる。

大納言、若草を取隠さんとする。北の方の反対を押し切り、宇治に住む縁りの尼に言ひ合せ、若草には宇治の御堂、大仏詣でを勧む。若草、大納言の意図を察し泣くより外の事なし。

妹君、これを聞きて若草をとむらひ、

いかならぬこのよのほかのすまひにも、たちはなれしとおもひやはせし

と詠み、また形見に水晶の珠数を贈る。

若草、あたりをしたゝむる中、中将の枕を見て

よな〳〵もこれをかたみにならへつる、まくらにさへやわかれはてなん

と詠む。

暁大納言よりの迎への車に乗り、若草は家を出づ。若君の慕ひ泣く声を聞き

みとりこのおもかけはかりたちそひて、のにも山にもはなれさりけり

また乳母も

つゆの身をよそのあらしのさそひきて、いつくの野へにをかんとはする

やがて宇治へ着く。

(35) 主の女房、淡路より事情を聞き、同情の涙を流す。

(36) 主、若草を伴ひ、宇治の御堂と大仏へ詣づ。若草、大仏にて上人に様を変へんと願ふも主にとどめられ、日頃手なれし琵琶と鏡を布施に置きて帰る。

(37) その夜、若草は人々の寝静まりし隙を窺ひ、宇治川へ投身す。

(38) 夜明けて淡路は驚き、主と共に辺を尋ぬるに宇治川の橋の上に、うらなしの脱ぎ揃へてあるを見出す。淡路後を追ひ投身せんとするを主とどむ。

(39) この知らせを受け、大納言は驚き、北の方は歎き悲しむ。

(40) 宰相の方に居りし少将は、若草の恋しさに耐へかね、宰相方の侍を語らひ我が方へ帰る。

(41) 若草の大納言に家を追はれし事を聞き、此所彼所を尋ぬる中、枕に書きつけし若草の歌を見出して悲しむ。

六十ばかりの尼君、若草を迎へていたはる。

若草、尼君と共に宇治の御堂と大仏へ詣づ。大仏にて、母より譲り受けし鏡と笙の琴、また妹君の形見の水晶の珠数を布施に奉る。聖に髪を下さんと願ふも尼君に制せられ、宇治へ帰る。

同上

夜明けて人々驚き尋ねる中、若草の残せし

いかにしてふるさと人につけやらん、みをうちかはにしつみはてぬと

の歌を見出す。乳母、若草の後を追ひ入水せんとするを尼がとどむ。

同上

左大将の方に居りし中将は思ひかねて、大将の許より車を乞ひ、我が方へ帰る。

若草の大納言に家を追はれし事を聞き、中将は大納言に恨みを述べ、今は家を出て行脚せんと言ふ。中将は清水へ詣でんと思ふも、若君に別れを告げん為に我が方へ立ち帰り、二つ並べし枕の合せ目より

いまはとてこれをかきりのみとりこに、はこくむそてのたちわかれぬる

おもひきやおなしやみちとちきりしに、いつかたとたにきみはしらしな

(44) 中将、ちやうらくしへ参り、若草の行方を祈らんと思ひ、支度を命ず。その夜の夢に若草現れ

君ゆへにそこのみくつとなりぬれは、あふもくやしきなか川のみつ

と詠みて消え失す。さては此世に亡き人と心細く思ひ、長谷に詣でて祈請するに、汝の尋ぬる者は既に此世に無しとて

しらつゆはもとのしつくとなりにけり、やとりしくさのはらををしへん

と示現を蒙る。

(以下両本の筋全く異なり対照出来ず)

少将大仏へ詣で、ある聖に様を変へんと願ふ。聖、一日も物思ふ様の女房が来りし由を語り、布施に置きし琵琶と鏡を少将に示す。見るに、琵琶の撥と鏡の裏に若草の手にて

あさゆふにてなれしひはをたてまつる、みちひきたまへ

(42) と書きし若草の歌を見出す。

(43) 中将、母への文を書きて若君の乳母に託し、家を出づ。大仏へ参る途中、宇治の辺にてやさしげなる家に立ち寄るに、尼出でて中将に身の上を尋ぬ。中将の躊躇するを見て尼、若草の乳母を呼びに内へ入りし際に、中将は清水へ詣でんとて其処を立ち出づ。

中将、清水にて祈念するに、夢に

うち河のなかれのすゑをたつね見よ、わかはにやとるつゆにあふへし

と示現あり。

中将宇治へ下り、先の尼の宿を尋ね、若草の乳母より始終を聞く。宇治川の辺を尋ぬる中、中島の藻の上に未だ息絶えざる若草を見出し、尼の宿へ伴ひ帰る。若草、投身せし時老僧に助けられ介抱されたる由を語る。老僧は観音の化

月のみやこへ
　この世にはかけもならへすますかゝみ、のちのうきよにくもりあらすな
と書きたり。
少将、悲しみに暮れ都へ戻るに、宇治にて淡路に尋ね逢ひ、一部始終を聞く。
少将都へ帰り、妹君に幼き姫を託し、左近丞一人を具して家を出ず。大仏にて出家を遂げ、再び宇治へ寄りて淡路に別れを告げ、高野へ上る。なほ人の口の煩はしきを厭ひ、吉野の奥に籠りて修行に努む。
淡路も尼となり、若草の菩提を弔ふ。大納言、吉野へ少将を尋ね、今一度都へ帰られよと勧むるも少将は聞き入れず、大納言のまどろみし隙に其処を遁れ出づ。その時大納言の夢に、少将
　こくらくのちきりはふかしこの世には、これをかきりのすみそめのそて
と詠むと見ゆ。
大納言、北の方と共に出家し、吉野に籠る。
少将の妹君は三位中将に嫁し、大納言より世を譲り受く。
少将、此処彼処を廻り
　あき風を身にしむものとおもひこし、むかしににたるくさのはらかな
とうち詠め、熊野へ詣づ。夢に若草が上人の姿となりて現身なり。
中将、都へ人を遣し、若君を呼び寄す。
若君、後に帝に召され太子となり、中将は大臣となる。若草晴れて大臣の北の方となり、若君姫君を儲く。
大臣は宇治に御所を立て、宇治の大臣と呼ばる。大納言宇治へ参り、若草に見参す。
宇治の尼君は伊勢の国を賜はり、中将の妹君は関白の御所へ迎へらる。太子の若君はやがて位に即き、めでたき帝として栄ふ。

れ、成仏せし事を語る。少将熊野にて修行を続け、三年にして往生を遂ぐ。

若草の娘は摂政殿の孫、侍従に嫁し、母の菩提を弔ふ。夢に母の声にて

かきなかすわかくろかみにうかひつゝ、いまそはちすのうへにむまるゝ

と聞ゆ。

大納言と北の方は吉野にて相つぎて往生を遂ぐ。

比較の一つの目安として、物語中の和歌は両類ともすべて掲げてみた。和歌はB類本の方が多く、記事も前半はB類本の方が概してくわしい。しかし最も大きな相違は物語の結びである。A類本は、若草が入水して果て、少将も肉親の絆を心強く断ち切って出家を遂げるという悲劇的な結末であるのに対して、B類本は、入水した若草は観音の功力で命ながらえ、少将と再会して末は栄えるという、目出度し〳〵で終っている。いずれがこの物語の古躰であるかは、伝本の上からは、両類ともに江戸前期より古く遡り得る古本が見られないので、何とも言い難いが、結末の相違に関していえば、幸福な結びを悲恋遁世に改めるということは自然ではない。従って、A類本の如き形が古躰を伝えるものと考える方が常識的であろうが、なおB類の慶応本の記事の上には、次のように前後矛盾や錯雑の個所が見出される。前掲の梗概に即して記せば

イ、(6)の所で、少将の父を大納言と記しているが、その前には藤中納言とあり、この中納言が大納言になるのは(16)においてである。

ロ、少将を聟取しようとする者を、(10)では左大臣とし、(17)以下では左大将としている。

ハ、(43)において、中将は大仏へ詣でんとして宇治まで行きながら、また清水へ戻っている。その前の(41)の所では、中将が清水へ参らんとする志のあることを述べているのであるから、この(43)の記事はなくもがなである。

特にイの場合は、A類本においては、はじめから大納言としている。そこで想像すれば、B類本はA類本の系統に基づいて、ことさら人名などを改めたのであるが、途中で直さなかった個所がたまたま露出したものと考えられぬこともない。ロもまた、同じように人名を改めた際の不徹底と見ることも出来よう。ハのB類本の筋の運びは如何にも拙劣である。この辺からAB両類の筋が反対の方向へ岐れてゆく所であるから、これも改作の意図が未熟の間に生じた錯雑であるのかもしれない。

次に両類の詞章を一瞥してみる。叙述内容の上ではほとんど変る所のない、前記梗概の(7)(37)の二個所を例にとって、天理本と慶応本の本文を対比してみると

	A 天理本	B 慶応本
(7)	すでに十五にならせ給ふとしの、かみな月廿日あまりの事なるに、そらかきくもりうちしくれ、よろつ心ほそきくれかたに、ひめ君の御かたへすいさんしておはしたり、あまりにつれ〳〵に侍るほとに、おもしろき御さうしなんと侍らは、見まいらせんとおほせけれは、御いもうとのひめ君おほしけるは、れいならす此君の御わたりあるこそあやしけれ、あはれ、わかくさの御事にやとおほして、やかて御	さて、御いもうとのひめきみの御かたへおはしましけれは、わかくさのひめきみてならひしたまふ、ふてをとりてうたをかきつけ、これ御らんして、御へんかしたまふへしとて、かくなん わかくさのおひゆくすゑをまつほとに、我かひとりゐに露そこほるゝ 御かへりことしたまへと、御てをとりてのたまふ、わかく

さうしとりにたゝせ給ひぬ、わかくさは御てならひしておはしけるか、たれなるらんと見あけ給ひて、やかてうちそはみ、はつかしけなるけしきにておはしけるありさま、おさなくてみしよりも、まことにことのほかにおひまさり給ひて、此世にはたくひなき人にそ見え給ふ、せうしやういとゝそらにあくかれて、いかにしておもふ心のうちをしらせんとおほしめしけれとも、さらになひき給ふへきけしきなかりけれは、むなしくかへらん事も物うくて

わかくさのおひゆくすゑをまつほとに、わかひとりねにつゆそをきそふ

とかき給ひて、くれ〳〵との給へとも、いとゝ心うき事とおほしめして、御返事までは思ひもよらす

人々みなしつまりて、わかくさやをらおきあかり給ひて、御すゝりとりよせ給ひて、おほしめしをく事ともかき給ひて、おもひ給ひけるは、ゆめのうちの世の中なれは、たれかのこりとゝまるへき、たゝ一すちにおもひきり、みつのそこにも入なんとおほしめし、あはちにしらせしとおほしめして、まよひいて給ふ、さて、うちのはしのうへまておはしけるに、たれ〳〵も、夜ふけ人しつまりて、さらに人にもあはす、はしのうへにたゝすみ給ふに、ことにみつのをとたかきところをきこしめして、いまをかきりとおほしめすにも、ゆゝしくおもひたちぬるわか身かな、さりとも、せうしやうかほとまて心かはるへしとはつゆおもはさかほうちあかめ、うつふしたまひて、ものものたまはすそのほとはをとする人もなく、わかくさはおもふほとなきたまふ、をさあひ人のゆくすゑのこと、すすりひきよせ、かき給ひ候はんとしたまへとも、なか〳〵なみたにふてのたてともおほえす、かたのことく、とりのあとはかりかきつけて、ねり一かさねうちかつきていてたまふ、あすはきこえても、たれかはあはれともおもふへきなれとも、をはうへさこそおほしめさむ、人となるまてそたてられまいらせて、まことのおやにつゆもをとらす、いかなるさきの世のむくひにか、このあしたによになきものとなりぬらんとおもへは、こゑもおしますなきたまふ、さしもおもひきりてゆくみちなれとも、たゝをさあひ人のことのみかなしく

りし、これほとなけくおもひはゆめにもみゆらん物を、むなしくなりたる風のたよりにももれきゝ給ひなは、おさあひものゝ事をおほさんにつけても、なとかあはれとおほささらん、又おさあひものゝ、たちまちにはゝなき身となりはてなん、いとおしや、いてしときはなれしととりつき、かなしみしおもかけ、うつりかも、いまのやうにおほえてかなしけれは、又ひめもさこそなけき給ふらめ、またあはちも、ひのなかみつのそこまてとこそなけきしに、のこりゐていかゝうらみなけかんすらんと、かれこれをおほしてとりむかへもなけれは、こゑもおしますなき給へり、これほとにくはほうなき身は、いますこしなからへは、いとゝつみのみつもらんとおもひきり給ひて、くもすきに川のおもてを御らんすれは、うち川のくせとしていはたかく、みつのをとたきりて、身のけもよたちておそろしけなりけれは、まことにおもひきりたる身なれとも、いっちへ身をなけんともおもひわきまへたまはす、こゝへゆきかしこへゆき、あなたこなたへやすらひ給へとも、又をしかへし、あなむさんの心や、いつくに身をなけんかうれしかるへき、一たひおもひきりていてぬるうへは、又とかくおもひわつらふへきやと、御心つよくおほしめして、にしにむかひ、ねんふつ百へんはかり申給ひて、なむさいはうこくらくけうしゆあみたふつ、ほんくはんあやまり給はすは、かならすちゝはゝと一はちすにみちひき給へ、又此よにてこそう

て、あかつきのみちたとりかね、御なみたもせきあへす、いかなるのへまてもをくれさきたたしとちきりし人にもすてられ、人のうへこそきゝつれ、いまみのうへにかゝるおもひのけふりくらへ、まよひのくもとなれは、心をひるかへし、さいはうにむかひて、ねんふつ思ふまゝに申たまひて、すさましくたきりてなかるゝふち、かたはらを見るに、いまたしつまぬさきに、めもくれ心もきえ、このありさまにてまうねむをおもふなりと、たけきこゝろをさきとして、たいほんそくわう、なんはうむくせかい、さいほうれんけ、しやうとうかくと、たからかにとなへたまひて、御とし十七と申に、うちかはに身をなけたまふ

すきちきりなりとも、せうしやうをは、ほとけのしやうと
にてまちまいらせ侍らん、又ふりすつるみとりこをは、十
はうのかみほとけもあはれにはくゝみ給へときねんして、
御めをふさきて、たきりておつるしらなみのなかへ、御身
をまかせてそとひいらせ給ひける

の如くである。叙述の進め方にも、語句の上にも、この二類の本文には直接の関係が認められない。またこの二例について言えば、A類の天理本の方が描写がこまやかであり、文章も整っている。B類の慶応本は、前掲の梗概から知れるように、記事は多いにかかわらず、描写はかえって粗く、詞章も文脈が論理的に続かない所がしば〳〵見出される。全篇すべてがこの二例の通りではないが、概して言えば、右の如き傾向を認めることが出来るのである。たとえば和歌についても、慶応本の方が表現が稚拙であるものが多いように思われる。

このように見てくると、B類本の後出性を示す材料が多いと思われるのであるが、ところが、ここにその反証となる如き一つの事実が見られる。それは、はじめに対照した梗概の(34)に見える、B類本の

つゆの身をよそのあらしのさそひきて、いつくの野へにをかんとはする

の歌である。この歌はA類本には無いが、この類歌が風葉和歌集に散佚物語「よをうち川」の歌として採られているのである。後述するように（二八三頁参照）「若草物語」は、この「よをうち川」の改作であることが、中野荘次氏によって指摘せられている。すると、風葉集所採の歌を存するB類本の方が、この物語の原型に近いと言わなくてはならない。また和歌の多いことも、「しぐれ」の場合に準じて言えば、B類本の古さを示すとすることが出来よう。こうして、客観的な傍証のあるという点からすれば、B類本を以て古躰とすべきように考えられる。しかし、この物

語が鎌倉時代の擬古物語を改作したものであるとすれば、入水した女君が神仏に助けられて命ながらえ、大団円を迎えるというB類本の結びは如何にも室町物語的であり、悲恋遁世を語るA類本の方が、原作の型を承けているという感も拭い去ることが出来ない。そこで、確実性のあることはより古い伝本の出現を俟つ外ないのであって、管見の資料のみからすれば、AB両類とも、それに先立つ古い形態から岐れ出たものであって、夫々に古躰の俤を部分的に宿しているという程度にしか両者の関係を考え得ないのである。

A類の第一種本と第二種本との本文は、叙述の大筋は一致しており、詞章も近似している所が多いが、第二種本の方がかなり簡略で、全体の分量は第一種本の三分の二足らずである。天理本と〔寛文延宝〕刊本とによって若干の個所を対比してみる。

まず、先にAB二類の本文の比較において掲げた、若草の宇治川入水の条の〔寛文延宝〕刊本の本文は次の如くである。

人々みなしづまりて、わか草はをきさせ給ひて。すゞりにむかひ、おほしめしをく事共をかき給ひて。おほしけるは、とかくゆめのうちの世の中なれは。たれかのこりとゝまるへきと、一すしに思ひきり。水のそこにも入なんと。たゝひとりまよひいで。うぢはしまでおはしけれ共。よふけたれはさらに人にもあひ給はす。はしの上にしはしたゝすみ給ふに。まことに水のをとたかきをきこし召、今をかきりとおぼしけるが。さても少将殿かやうに心かはり給ふへしとはつゆほとも思はさりし也。かくなけく思ひはゆめになり共みゆらんものを。むなしく成たりと風のたよりにきゝ給はゝ。などかおさなきものをあはれとおほさん。かへすくもおさなきものゝ、はゝなき人となりなん事のいとおしや。都を出し其時はなれじと取つきしおもかけ

の。今のやうにおもほゆれ、又あさひもさこそなけき給ふらん。さてあはぢも火の中水のそこまでもとなけかまじ(ママ)と、かれこれ思召て、こゑをあけてそなき給ふ。是ほとにくわほうなきみの今すこしもなからへは。なをつみこそはつもらんと思召きり給ひ。くもすきに川のおもてを御らんすれは。うぢ川のくせとして。いはたかく水のおもてたきりて。身のけもよたっておそろしけれは。かほとに思ひきりたる身なれ共。いつくへ身をしつめんとおもひさためす。こゝへゆきかしこへゆき。かなたこなたにたゝすみ給ひしか。さてもむさんなわか心かな。いつくに身をなけて心やすかるへきそと。御心つよく思召、にしにむかひねんふつ百へんはかりとなへ。なむさいはうこくらくけうしゆあみたふつ。ほんぐわんあやまりたまはすは。ちゝはゝのひとつはちすにみちひき給へ。此世にてこそうすきえんなり共。少将殿をはじやうとにてまち参らせん。又すてをきしみとり子を。十方のしよじんしよふつもあはれみ給へときねんして。御めをふさき、たきりておつるしらなみに、御とし十八と申に川のみくつとなり給ふ。

これを二二七頁の天理本の本文と比較してみると、刊本は所々短い句が略されているが、明らかに同系の本文と認め得る程に近い。これに対して、最も本文の離れている例として、大納言が左近宰相に、少将の聟入を契約する条を掲げてみる。

一、天　理　本

第一段

さるほとに、又三てうにしのとうゐんに、さこんのさいしやうと申人、ひめ一人かしつきもち給へり、此さいしやうはせうしやうを心にかけて、むこにとらはやとおもひ給ふ、おりふしうちまいりのついてに、大なこん殿と物かたりのとき、さいしやうさしよりて、かやうの事おやの身と

二、〔寛文延宝〕刊本

さるほとに、三でうにしのとうゐんに。さこんのさいしやうと申人、ひめを一人もち給ふか。少将をむこにとらんと。心かけ給ふおりふし。うぢ(ママ)参りのついてに。大なこんとのへさいしやう申さるゝは。かやうの事をおやの身として申いたすも。かたはらいたき御事なれとも。ひめを一人

持て候。御子に参らせん。又少将とのをわが子に給はらんと申されけれは。大なこんきこし召。ないく是より申へきに。のぞむ所を仰らるゝ物かなと。かたくけいやくしてぞかへられける。

さいしやうのかたにはまちかねたる事なれは。又つかひこそ参りけれ。うぢ参りの時あらまし申つるぎ。いかゝなされ候と申つかはさるゝ。大なこんきこしめし、其御事にて候。この程はよき吉日なく候へは。うちすき候ひぬ。是よりおつつけ申いるべしと。御へんじ有

さて、きたのかたへ申さるゝは、いぜんも申つることく、又さいしやうのかたよりつかひ参りて候へは。いなみかたくして、ことうけ申て有。けふは吉日なれは、少将にもかたらんと仰ける。きたのかたは、をろかならす思召。たがひにむつましき中を引はなし。其うへ、いたいけしたるおさなきものもいたはしさよ。おほくもなくひとりの子を、

第二段

そのとしもあけれはせうしやうのひめ君三つにもならせ給ひぬ、はやよろつさかしくかたことなとしておはしける

第三段

さるほとに、さいしやううちまいりのつゐてに、すきにしあらましの御事はいかに、ひめを一人もち侍れとも、おのこゝのさふらはねは、よろつ心くるしくこそ候へ、かゝるみやつかへもあとをつくへきこもなし、かへすくも心くるしくこそ侍れ、御身はせうしやうおはしませは、御うらやましくてかやうには申せとおほせけれは、大なこん殿、さきに申ことくさやうにおほしめしより候事、かへすくもよろこひ入て候へは、いかさまにもよき日をとりてとて、たかひにことうけしてかへらせ給ひける

第四段

大なこん殿御しよにかへらせ給ひて、きたのかたにこのよしきこえけれは、あさましや、いかてやくそくさせ給ふらん、せうしやうは、わかくさををろかならすおもひ侍れは、いまさらひきわけん事はいたはしき事かな、そのうへひめはことし三つになり候へは、人のいろをさかしく見しりたれは、ふさいの事はこのよならすはんへる、かへす

くもおもひよらぬ御事かなと、よにもほいなけにの給ひける、まことにその事をわすれてなとゝの給ひける

第五段

又さいしやうのかたよりは、まちかねたる事なれは、うちまいりのとき、さこそあらましの事もおこかましくおほしめすらんなと、たひくすゝめ申せし事かへすくもはち入てなんときこえけれは、大なこん殿又心よはくて、なにしにかへんかい申へき、此ほとはよき日侍らす、けふはきちにちにて侍れは、かへりて申さんとてかへり給ひぬ

第六段

さて、きたのかたにおほせけるやうは、一日申せし事、心えぬ事におほしたりしかとも、さいしやうなをくの給へは、いなみかたくてことうけして侍りぬ、けふはきちにちにて侍れは、せうしやうに此よしをいはゝやとの給ひけれは、きたのかた、これほとにをろかならすおもひたるなかをひきちかへん事のかなしさよ、そのうへ、さもいたいけしたるおさあひものいたはしさよ、たゝ一人あるこをともかくも心にまかせてこそあらせたきに、さいしやうのこにならすとも、すきわふる身ならすとかきくときの給ひぬ、そのとき大なこん殿、おのこゝはちゝのはからひなるへし、ひめか事はいろふへからす、せうしやうか事は御いろひあるへからすと、御けしきあしく見えさせ給ひけれは、ちからをよはせ給はす

ともかくも心しだいにあらせたきに。なんぞやさいしやうの子にならす共。すきわふる身ならしとかきくときの給へは。大なごんとのもまゆをひそめておはしけり。

又あるとき、さいしやうさんくわいのついてに。すぎにしあらましの事は。いかゝ思召候やらん。われら人かましくもなく候ゆへ。うちすてさせ給ふやらんと。ふくりうがほにての給へは、大なこん仰けるは。いつそやも申ことく、をろかにはぞんせぬなり。いかさま吉日をえらみ。たがひにゆくすゑまてもはんじやうなるやうにとそんし。をそなはり候と仰られて、我やにかへり。

きたのかたにこのよしをかたり給へは。うらめしや、何しにやくそくし給ふそや、少将はわか草ををろかならす思ひけれは。今更引わけんもいたはしや。又ひめも三つになれは、人のいろかほ見しり。かたことといひていたいけなれはあはれ也。さりなから、おのこゝは父のはからひ。又むすめははゝがいらふといへは。少将事はかまひ申さぬと。きしよくをかへての給ひける。

この条を見ると、第一段の両本の本文の関係は、前の若草入水の条とほぼ同じで、文章の大筋は変りなく、ただ刊本の方に語句の省略が所々見られる。しかるに第二段は刊本に全く無く、第三段は刊本にかなり大幅な省略があり、残りの部分も詞章の相違が著しい。また、第四・五段は、叙述の量はほぼ同じであるが、詞章はかなり異なり、特に第四段はそれが著しい。最後の第六段も前半が刊本は短く、詞章も非常に異なっている。ところが、なお子細に比較してみると、第四段と第六段の前半とは、両本の本文が入違っていることが見出される。すなわち、天理本の第四段と刊本の第六段前半とが、また天理本の第六段前半と刊本の第四段とが、夫々対応しているのである。そしてその順序は天理本の方が正しく、刊本は前後顚倒していることが認められる。そのために、刊本の第四段では、大納言が宰相との契約を北の方に物語るのは、ここがはじめてであるのにかかわらず、「いぜんも申つることく」といった理に合わない言葉が出てきている。このことは、刊本の本文が天理本の系統の本文を改修した際に誤りを犯したことを示すのではなかろうか。この外眼につく相違として、第六段の末に見える「男の子は父親が、女の子は母親がいろふというから云々」の言葉を、天理本は父大納言の言葉とし、刊本は母北の方の言葉としている所がある。これも天理本の方が妥当であろう。この物語では、母の北の方は最後まで大納言に対して批判的であり、少将と若草への同情を失なわなかったのであるから、ここで北の方に、そのような投げやりの言葉を吐かせるのは適切でない感じを与える。なおそういう面から見ると、大納言の、少将を左近宰相方へ聟入らせようとする気持が固まってゆく過程の心理描写も、天理本の方がなだらかであり、一方宰相の少将を希望する気持も、天理本の方がこまやかに叙べられている。刊本は、前述のように第四段と第六段の順序を顚倒したり、第三段において宰相の言葉を大幅に縮めたために、大納言も宰相も全く人間的な感情の附与されない人物になってしまっているのである。

右の二例は、第一種本と第二種本の本文の関係の両極端を示すものであるが、後者の場合程両本の詞章が異なっている個所はさして多くない。全体としてみれば、前者の若草入水の条におけるのに近い表現の類似性をもっている。ただ刊本における叙述の簡略化は著しく、二百字から五百字に及ぶような大きな省略がしばしば見られるのである。そして、それらのすべてを通じて、刊本の本文後出性に対して反証となるべき個所は見出されないが、ただ一つ、宰相の邸から戻った少将が若草の失踪を知り、その行方を神仏に祈請する条の天理本の叙述には不合理な所が見られる。その個所を刊本と対比してみると、

いかにもして此ゆくゑをたつぬへきに、いまはほとけならてはたのみまいらすることなしとて、ちやうらくしへまいるへきとて、御まいりありてわかくさのゆくゑをいのり申さんとて、御めのとさこんのせうにきこえけれは、あかつき、ちやうらくしへまいるへきなり、御むまようういすへしとおほせふくめて、夜もすから御いてたちありける

さて、せうしやうまとろみ給ふ御ゆめに、はるののゝすゑにつゆにしほれて人のみえけれは、たれなるらんとたちより見給へは、わかくさにておはしける、あさましや、いつの御ならひにかゝるおそろしきのなかにたち給へるそ、うしなひたてまつりて、いかはかりなけきぬると御そてをひかへて、うらめしけなる御けしきにて物をはおほせられすしてかくなん

君ゆへにそこのみくつとなりぬれは、あふもくやしきないかにもして行衛をたつぬへき。今はほとけをたのみ申よりほかはなし。明日はせへ参るへしと。左近のせうに仰つけられ、馬共よういしたれとの給ひ。

すこしまとろませ給ふに。春の野につゆにしほれてましますを見れは。わか草にておはしける。何しにかゝるおそろしきの中にたち給ふそとの給へは。うらめしけに御らんして。とかふの物ものたまはず、かくこそ

君ゆへにそこのみくつとなりはてゝ、あふそくやしき中の川みつ

とあそばし、其まゝきえうせ給ふと御らんじて。ゆめさめうちおとろかせ給ひ。さては此よになき人と思召。いよ

か川のみつ
とはかりの給ひて、うせ給ひぬと御らんして、うちおとろき給ひて、ゆめなりけるとおほすに、さらにせんかたなし、いかさまにも此世にはなき人とおほすに、いとゝ心ほそくそおほしける
さてさこんのせう御むままいらせけれは、おさあひ人をはめのとにあつけをき給ひて、はせにまいり給ひ、三せん三百卅三とのおかみをまいらせ、夜もすからきせいし給ひてたつねぬる人をしらせてたへといのり給ひて
左近を御供にて、はせに御まいり有て。三千三百三十三とのらいはいし。よすからきせいし給ふ。ねかはくはたつぬる人のゆくゑをしらせてたひ給へと。ねんくはんし。
〳〵御心ほそくそおはしける。

となる。天理本は長楽寺へ参らんとて出立の用意をしながら、翌朝詣でたのは長谷であって、夢見の記事を挾んだ前後の記述が矛盾している。刊本ははじめから長谷と記しているので、その矛盾が無い。天理本が此処に何故長楽寺という名を出してきたのかは、推測しかねる。長楽寺は京都東山のそれであろう。此処は中世には念仏道場として栄えた寺らしいが、室町の物語において祈請の場所として現れてくるのは専ら清水寺で、長楽寺は珍しい。この「若草物語」においても、B類の慶応本では、この場面に清水寺が使われている。しかし、あるいは天理本のそれは「ちやうこくし」の誤写であるのかも知れない。「ら」と「こ」の仮名は似ており、この天理本の「ちやうらくし」も強いていえば「こ」と読めぬこともないのである。それならば長谷寺を音読したのであろうから、前後の矛盾は解消する。従ってこの部分についても、天理本が余計な改修を行なったために、叙述の不合理を来したとは言い切れないであろう。

反対に第二種本が第一種本の省略であることをかなり有力に示していると思われる例をもう一つ挙げておく。若草

が父母に死別して、叔母である大納言の方に引き取られる条である。

第一段

ひめ君の御をちはさきのくはんはくとそ申ける、その御こにひめ君一人おはしける、御ありさまいつくしく、おひゆくすゑもたのもしく、いつきかしつき給ひけるに、はかなき世のならひといひなから、むしやうの風にさそはれて、ちゝかくれさせ給ひぬ、その御おもひにや、きたのかたもほとなくむなしくならせ給ひしとき、御をはにておはします大なこん殿のきたのかた、わかこにせんとて、あはちといふめのとをそへまいらせられて、きんたちにもをとらす、あはれなる事にそおほしける

第二段

日にそへて、ひかりさしそふ心ちして、いつくしく御らんすれは、あはれおやの御らんせは、いかはかりこのすかたをめてたくうれしとおほさんとて、なみたをなかさせ給ひけり、此ひめ君の御なをはわかくさと申ける、大なこん殿のきんたちをはせうしやうと申けり

第三段

わかくさの八九のころより、せうしやうつねに御らんして、このゆくすゑを御めをとめてゆかしくそおほしける、ひめとわかくさ一ところにすませきこえ給ひける、せうしやういかにもしてちかつきてとおほしけり

第四段

やうく十あまりにもならせたまひけれは、此御けしきを見しり給ひて、いつしかとおほしめして、かりにもみえ給ふ事なし、せめてのゆかしさに、その御かたの女はうたちさて又、大なごんどのゝみだい所の御あにごをさきのくはんはくどのと申ける。是にもひめ宮一人おはします、玉のやうなる御かたちにてましませは。御ゆくすゑもたのもしく。ちゝはゝの御てうあひはかぎりなし。けにはかなき世のならひにて。むじやうの風にさそはれて、くはんはくかくれさせ給ひける。其御思ひのあまりにや。はゝうへもほどなくはかなくなり給ひぬ。大なごんとのきたのかた、おばごにてましませば。わが子にせんとの給ひて。あはぢといふめのとをそへ。きんたちと同しやうにそだて給ふ。月日うつるにしたがひて、うつくしくましくけり。

八つ九つの比、少将つねに御らんじて。此ゆくすゑを御ゆかしくぞ思召ける、あさひのまへと。一しよにすませ給ふときこへける。

今ははや十あまりになり給ふ。少将殿御ゆかしく思召。おくがたの女はうたちをちかつけ。さてもわか草はいかばかりひ(ママ)となり給ふらんととひ給へは。

に、さてもわかくさはいかはかりおひたち給ひぬらんとと
ひ給へは

右の文では第二段が刊本の方にはほとんど無いが、その部分に、天理本には「此ひめ君の御なをはわかくさと申ける」の一句がある。刊本はこの句を欠くために、第四段になって、「さてもわか草はいかばかりひとなり給ふらん」という少将の言葉の中に、突然若草の名が出てくるのである。これは、第二段が刊本の不注意な省略であることを物語っている。天理本には、若草の名を出したのに続いて「大なこん殿のきんたちをはせうしやうと申けり」とあるが、この方は、刊本は巻頭の、大納言が公達二人をもつことを叙べた所に「一をはせうしやうどのと申ける」と既に名前を出してしまったので（天理本は巻頭では若君とだけ叙べて名を記していない）、これを省いたのに引かれて、若草の方をも落してしまったのではなかろうか。

以上見てきた所によって、第一種本と第二種本との本文の先後関係は、第一種本を以て古躰とするのが妥当である如くに考えられる。ただ、第一種本は天理本一本のみであるが、その書写年代は、第二種本の刊本の中最古板の寛文頃よりそれほど古いとは認め難い。従って、天理本そのものが、刊本の本文改修の基礎となったとは言えない。天理本の系統にはより古い伝本のあることが想像されるのである。

A類第二種本は刊本を中心とする諸本で、伝存するものが多い。刊本には五種の板があるが、本文は助詞などに一字か二字の違いがままある程度で、特にとりあげて問題にする程の異同は無い。ただ宝永四年板は、副詞や接続詞を補った個所が若干あり、助詞の異同も他の板より多く見られる。

一方写本の方も、いずれも書写が新しく、本文も刊本に基づいたと判断されるもので、重要な資料とはなり得ない。その中、新編御伽草子所収本は、刊本の

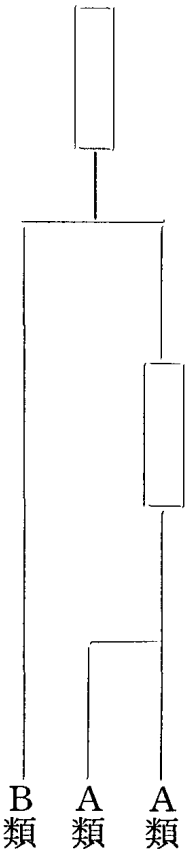
つゆむすふにはのわか草風ふけば、もとのしつくとなりやはてなん

の歌が

露結ふ雫となりや果なまし、庭のわかくさ風の吹なは

となっているのが特異な違いである。また、実践女子大本と東北大学本とは、少将遁世以後の巻末の叙述が著しく省略されている。

「若草物語」は、伝本がいずれも江戸前期以降の成立にかかるもののみなので、「しぐれ」の場合の如く信憑性をもった本文の系譜を作成することが困難であるが、以上見てきた所をまとめれば左の通りになる。



桜の中将　一名小伏見物語

本作は、前二作よりは伝本が少なく、刊本は二種を見るに過ぎず、写本も江戸初期以前に遡り得る程の古本を見な

い。しかし、「若草物語」と同様内容的には著しい相違をもつ異本を有している。書名も、「桜の中将」の外に「小伏見（物語）」と題する伝本があり、また「近古小説解題」「日本文学大辞典」には、「桜町中将殿物語」と題した一本が、震災前の東大図書館に蔵せられていた旨が記されている。（「近古小説解題」にはこれを「桜町中納言物語」としているが、島津久基博士は「中納言」は「中将殿」の誤読であろうとされている）島津博士はこの題名は後人の附したものらしいとされ、また前二者の中では、「桜の中将」の方がより古いように考えられる。（二六一頁参照）

本作の諸本は次の三類に分類し得る。

A類

国立国会図書館蔵〔江戸前期〕写本　二冊

帝国図書館覆表紙（二六・四×二〇・二糎）、縹色元表紙。下巻元表紙に「桜の中将物語　下」の題簽、覆表紙には各巻「桜の中将物語　上（下止）」の子持罫付題簽を附す。内題なし。本文字面高さ約二二・五糎。（上）四十七丁（下）三十七丁、毎半葉十行、各行二十字内外。本文に朱筆書入あり。故榊原芳埜納本。本書は市古氏が「未刊中世小説解題」において紹介解説された。

B類

赤木文庫蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三冊

打曇表紙（一七・二×二四・七糎）。料紙間似合紙。表紙中央に紅色題簽「こふしみ上（中下）」。本文字面高さ約一三・五糎。（上）二十八丁（中）二十九丁（下）二十九丁、毎半葉十三行、各行十三字内外。挿絵、上中下各八

頁。

天理図書館蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三冊

打曇表紙（一七×二五糎）。見返し金切箔散し、料紙間似合紙。題簽「小伏見物語上（中）こふしみ物かたり下」。上中下各二十六丁、毎半葉十四行、各行十二字内外。挿絵、上中下各九頁。

C類

寛文十年本問屋刊絵入本二巻　（内閣文庫・赤木文庫蔵）

内閣文庫本は合一冊。改装新補香色表紙（二六×一八・二糎）。表紙左肩に「さくらの中将」と墨書した子持罫題簽。内題「さくらの中将上（下）」。板心、白口「さくら上（下）（丁付）」。刊記「寛文十年／正月吉日／通油町／本問屋開板」。単辺（二二×一六・七糎）。（上）十丁（下）十二丁、毎半葉十四行、各行二十二字内外。挿絵、（上）五頁（下）六頁。本書は「未刊中世小説三」（古典文庫）に翻刻された。

寛文十年松会刊絵入本二巻　（天理図書館・龍門文庫蔵）

天理本は縹色表紙（二七・四×一八・八糎）。表紙左肩に「入絵さくらの中将上（下）」の子持罫題簽。内題「さくらの中将　上（下）」。尾題「上巻終」（下巻なし）。板心「さくら上（下）（丁付）」。刊記「寛文十庚戌暦弥生吉辰／松会開板」。単辺（二二・五×一六・六糎）。（上）八丁（下）九丁、毎半葉十六行、各行二十六字内外。挿絵、（上）五頁（下）六頁。「水谷文庫」「甘露堂蔵」「久弥蔵」の印記。

右のABCの三類の間には、詞章をはじめ、筋立の上でも著しい繁簡の差が見られる。長くなるが左に梗概をやや

詳しく対照してみる。

A　類

(1) 中比花山院の御子にたかみつの中将と聞えし人あり。桜の中将と呼ばる。才覚芸能殊に勝れ、両親は良き妻をと思ふもさるべき人なし。

(2) 霜月豊明の節会の折、中将見物人の中にらうたげなる女を見そむ。播磨守に帰りを見届けさするに、女二条大宮の宿に入る。翌日播磨守をしるべに尋ぬるに、荒れ果てて物哀れなる有様なり。人に聞けば故二条大納言の邸にて、今は父母に後れし姫君一人を乳母介の局が育む由を語る。中将それより深き物思ひとなる。大納言と北の方はいかなる事かと歎く。

(4)

B　類

中比伏見中納言に美しき姫君一人あり。程なく父母に後れ、かすかなる有様にて世を送る。内裏の十日の節会に、姫乳母の介の局を伴に参る。その比桂大納言の御子にたかみちの中将とて都に隠れなき美男あり。この姫を見そめ、播磨守に帰りを見届けさするに五条大宮の宿に入る。姫の面影忘れ難く、播磨守を案内にて尋ぬるに、荒れ果てて物さびたる様なり。随身に聞けば故大宮中納言の住居にて、今は姫君一人父母に後れて残れる由を語る。中将空しく帰り物思ひに沈む。中将の乳母阿波の局不審に思ひ尋ぬるに、中将事の由を語るも姫の素姓

C　類

中比二条中納言の御子にたかみつの中将とて世にかくれなき人あり。桜の中将とも申す。

正月十五日夜の御講の折、中将いづくとも知らざる姫を見そめ、播磨守に帰る方を見さするに、姫二条大宮の荒れたる宿に入る。播磨守行逢ひたる女に尋ぬるに、大宮大納言の姫君一人住む由を申す。中将姫を忘れられず。

(5)
年改まり、二月中旬に中将北野へ参り、
花見れとなくさむかたはなかりけり、恋しき人のそてのなみたに
と詠む。
阿波の局不審に思ひ中将より事の由を聞く。大宮大納言の内の介の局は従姉妹故語らはんとて文を遣る。阿波の局、介の局に逢ひ、中将の想ひを語る。中将

(6)
いかにせん見し面影のわすられて、しほりもあへぬしのひねのそて
と書きて介に取らす。
介姫君に中将の文を見せ細々と語るも、一言葉の答へもなし。

(7)
中将重ねて、
人しれぬなみたの川のはやきせを、せきこそかぬれそてのしからみ
と書き、介の許へ遣はす。介姫君を

(8)
を明かさず。父大臣も北の方も心苦しく思ふ。
年改まり、中将庭の梅に北野の梅を思ひやり、
さく花をみるに心はなくさまて、いとゝなみたのいろそふかかる
と詠む。
阿波の局介の局の方へ行き中将の想ひを語る。介さらば文を賜はれと言ふ。阿波かくと語るに中将喜びて
いかにせんみしおもかけのわすられて、しほりもあへぬそてのけしきを
と書きて遣はす。
介姫君にこの由を語るも、姫とりあげず。
中将重ねて、
人しれすなみたの川のはやきせに、せきこそかぬれ袖のしからみ
と書き、介の許へ遣はす。介姫君に様々に勧むるも聞き入れず。又中将
阿波の局不審に思ひ中将より事の由を聞く。大宮大納言の内には介の局とて従姉妹がゐる故に語らはんと言ふ。中将喜び
いかにせん見しおもかげのわすられで、しぼりぞあへぬしのびねのそで
と書く。阿波、介を呼び中将の想ひを語る。
介姫君にこの由を語り返事を勧むるも、姫聞き入れず。
中将重ねて、
あはれともいふことの葉にかゝらずは、さのみはそでをしぼりかぬべき
と文を遣はす。

様々にすかすも、物も宣はず。介中将の文を見るに

あはれともなとかは人のとはさらん、さのみつれなきこゝろなりとも

とあり。

(9) 中将文を千束と奉れど甲斐なし。弥生半ばに桜の枝につけて

あはれともいふことの葉のなかりせは、露のいのちのきえぬへきかな

と遣はす。

(10) 姫君この返事はかりはと責められ、心ならず、

いつはりのことの葉にのみしりぬれは、露のなさけもかけしとそ思ふ

と書きて置く。介中将に奉る。中将いよ〳〵心あこがれ、度々文を送るもその後は返事無し。

(11) 霜月になり、中将は介を呼び、いかにもたばかり給へと頼む。介さらば伏見の叔母よりの迎へと偽りて車をより文あり。介見るに、

あはれともなにかは人のとはさらん、かくなけきつゝおもふ心を

とあり。

中将暇もなく文を遣はす。

或時

あはれともいふことのはにかゝらすは、つゆのいのちのきえぬへきかな

と送る。

姫君これぱかりは返事させ給へと責められ、

いつはりのことのはのみとしりぬれは、つゆのなさけもかけしとそ思ふ

と書きて置く。介中将に参らす。中将いよ〳〵心あこがれ、隙なく文を参らすれどもその後返事無し。

秋の半ばに中将は介に思ひのやるせなさをくどく。介さらば小伏見の里よりの迎へと偽りて車を賜へと申

姫君介に返事を勧められ、

いつはりのことのはのみとしりぬれば、つゆのなさけもかけじとぞおもふ

と書きて置く。介中将に参らす。中将いよ〳〵思ひの数積る。

阿波、介に此よし申すと、さらば伏見の里よりの迎へとて車を賜へと申す。

賜へと申す。

(12) 翌日中将車を遣はし姫を迎へ取る。姫たばかられぬと知り伏し沈む。

(13) 中将様々に姫を語らひ、

うらみわひなみたにぬるゝ袖なれと、あひみるまゝにかはきぬるかな

きのふまてぬれしたもとのいつのまに、かはくやなにのしるしなるらん

と書きて姫に示す。

(14) 中将の母、阿波の局よりこれを聞き目出度き事と喜ぶ。

(15) 中将の姉は三位中将に、妹は二位中将に嫁せしが、大宮の姫を慰めんとて中将の許へ渡る。姫の美しきに驚き、帰りてその様を母に語る。その後は常に寄合ひ遊ぶ。

(16) 五月五日に姫君達あやめを引きて遊ぶ。大宮の姫君

をしなへて入江のあやめひきく

す。

翌日中将車を遣はし姫を迎へ取る。姫たばかられぬと知り伏し沈む。

中将とかく慰め、浅からぬ契りを結ぶ。

母北の方、阿波の局に姫の事を問ふ。大宮の大納言の姫君にておはすと答ふ。

中将の姉は三位中将に、妹は二条中将に嫁せしが、まれ人をもてなさんとて、中将の許へ渡り姫に対面す。帰りて母に姫の美しき様を語る。

翌日中将車を遣はし姫を迎へ取る。姫たばかられぬと知り車を下りず。介色々に申して姫の心を和ぐ。中将傍に寄り臥したはぶる。

中将の母この由を聞き、姉妹の姫君を連れ、大宮の姫に対面す。帰りて父中納言に姫の様を語る。中納言も嬉しく思ふ。

に
二位中将北の方
いつかさつきとしつはたちけん
又姫君
けふよりそ花たちはなはにほひける
介の局
山ほとゝきすいかてきかまし
などと戯る。

(17) 七月初より大宮の姫君例ならず悩み臥す。

(18) 八月八幡の放生会に中将帝の御供に参る。

(19) 十月の時雨の頃、姫君心地晴れやらぬ儘に、
神無月しくるゝそらをなかむれは、そこはかとなく物そかなしきと詠む。中将も楊貴妃の昔を思ひ、
かみな月しくれのそらはくもるとも、君を見るめはるゝ夜の月

(20) 霜月になり、湯浴の折に姫君懐妊と知れる。母上喜び、祝ひの事など騒がる

七月初より大宮の姫君心地例ならず。

十月の時雨の頃、姫君物あはれなる空を眺め、
かみな月しくるゝそらをなかむれは、そこはかとなく物そかなしきと詠ず。中将古への楊貴妃李夫人もかくやと思ふ。

或時湯浴の折に姫君懐妊と知れる。大宮の御所を産所にしつらひ渡る。

或時湯浴の折に姫君懐妊と知れる。様々の祈禱あり。

(21) 新年になり、姫君春の気色を見て
　けふよりは池のつららもうちとけて、こけの下水みちもとむなり
と詠ず。

(22) 弥生半ばに若君誕生す。大納言も北の方も限りなく喜ぶ。

(23) 年月重なるままに若君いとど美しさを増す。

(24) 八月十五夜の内裏の遊びの折、徳大寺殿中将に心惹かれ、次の日大納言に中将を我が姫の聟にと乞ふ。大納言安々と諒承す。

(25) 大納言、北の方にこの事を語る。北の方悲しむも、大納言苦しからずとて中将を呼び、文を遣はすべしと命ず。中将力及ばず、
　人しれす身をしる雨にそてぬれて、しほりもあへぬ秋の夕くれ
と書く。兵衛介使に参る。

(26) 徳大寺の姫も返事を疾くと勧めら

弥生半ばに若君誕生す。

若君三才になりいよ〳〵而影優に見ゆ。

八月十五夜の内裏の遊びの折、徳大寺殿桜の中将に心惹かれ、遊び果てて後、大納言に中将を我が子にと乞ふ。大納言承知し、吉日に参らせんと申す。

大納言、北の方にこの事を語る。北の方然るべき事にこそあれとて、中将に文を遣はすべしと命ず。中将力及ばず、
　人しれす身をしるあめにそてぬれて、しほりそかぬるあきのゆふくれ
と書く。兵衛介を使にて徳大寺へ送る。

徳大寺の姫も返事を疾くと勧めら

若君誕生す。

若君三才になる。

八月十五夜の内裏の遊びの折、徳大寺殿中将に心惹かれ、節会果てて後、二条殿に中将を我が娘の聟にと乞ふ。中納言のがれ難く諒承し、この二十六日にと約束す。

大納言、北の方にこの事を語る。

れ、

いつはりのことの葉にこそからころも、さのみや袖をしほりやはする

と書きて使に取らす。

(27) 此月の二十六日に聟入と定まる。中将、大宮の姫君にありの儘を語り共に悲しむ。

(28) 約束の日来り、中将心ならず出で立つ。姫、介の局と共に身の上をかこつ。

(29) 徳大寺にては中将を様々にもてなす。姫を見るに大宮の姫君とは較ぶべくもなし。中将鳥の音を待ち明かし立ち帰る。

(30) 中将、大宮の姫君と語らひ臥し行末を契る。

(31) 中将、大納言より後朝の文をせかされ、

かへるさのくさ葉に露をおきそへて、たとりそかぬるあけほのゝそら

と書く。姫より返しあり、見るに、

れ、

いつはりのことのはとてやからころも、さのみはいかてしほりはつへき

と書きて使に取らす

此月の二十六日に聟入と定まる。中将、大宮の姫君にありの儘を語り共に悲しむ。

その日になり、中将力なく出で立つ。姫、介の局と共に身の上をかこつ。

徳大寺にては中将を様々にもてなす。姫は世の常にはすぐれて見ゆるも、中将大宮の姫君の事のみ思ひ明かし、鳥の音を待ちうけて帰る。

中将、大宮の姫君に今宵の心苦しさを叙ぶ。

中将、大納言と北の方より後朝の文をせかされ、

かへるさのくさはにつゆをかきそへて、たとりそかねしあけほのゝそら

と書く。姫待ちかねて、

二十六日になり、中将は中納言に命ぜられ泣く〳〵出で立つ。

徳大寺にては中将を厚くもてなす。姫もたぐひなく見ゆるも大宮の姫君程はなし。中将いまだ夜の明けざるに帰る。

中将、中納言にせめて文なりともと言はれ、

かへさめやくさ葉に露をきそめて、たどりもかへるあけぼのゝ空

と詠みて参らす。姫文を待ち得て、

いつはりやさぞげに露をゝきつら

いつはりやさそけに露のをきつらん、またよひなからかへるくさ葉に

とあり、中将この文を大宮の姫君に見す。

(32) その日も暮れ、大納言より又使瀬りなり。中将、大宮の姫君に勧められ心ならず又出で立つ。

(33) 大納言、供の人々に中将を置きて皆帰れと命ず。

(34) 徳大寺の三人の公達、中将をもてなせど心に入らず。

(35) 中将夜深く帰らんとするに供一人も居らず、力なく二三日逗留す。

(36) 大宮の姫君、中将の心変りと思ひ乱る。

(37) 十月に宮中の遊びに、徳大寺殿、中将をはじめ公達を引具して参る。中将暁に退出し大宮の姫君の方へ帰る。折柄姫君大納言の方に呼ばれしが、これを聞き急ぎ戻る。中将、姫君の心の中をおしはかり、

なからへてすむかひもなきわかや

いつはりやさそけにつゆのをきつらん、またよひなからかへるくさはに

と返す。大宮の姫君もこの文を見る。

次の日の暮になり、大納言より度々使あり。中将、大宮の姫君に勧められ心ならず又出で立つ。

大納言、供の人々に中将の逗留するやうに計らへと命ず。

徳大寺殿待ちつけ様々にもてなせど心に入らず。

中将夜深く帰らんとするに供一人もなく、力なく二三日を過す。

大宮の姫君、中将の心変りと思ひ乱る。

十月初宮中に御遊ありて、中将もうち連れて参る。夜更方に中将退出し、大宮の姫君の方へ行く。折柄姫君は大納言の方へ呼ばれ人も無し。中将あたりの気色を見て、

なからへてすむかひもなきわかや

との、うきふししけきまきはしらん、まだ夜半ながらかへる草ばにと返す。中将この文を大宮の姫君の傍にて見る。

その後又中納言より度々使あり。中将、大宮の姫君に勧められ心ならず出で立つ。

徳大寺にて色々の慰みあれども、中将大宮の姫を忘れ得ず。

とに、うきふししけきまきはしらかな

と詠む。中将、姫君の琴を引くを聞き笛を合す。姫君、

ならはねは人のつらさもいさしらす、たゝいにしへそこひしかりける

とて涙にむせぶ。中将また、

よしや君すみうくは世にまてしはし、ふかき山にもともにいりなん

とてうち語らふ。若君を呼び、思ふ事なく育てばやと涙ぐむ。

(38) 夜明け、又大納言より使あり、中将は力なく徳大寺へ赴く。

(39) 大納言、中将の徳大寺殿姫君に思ひつかん程、大宮の姫君を余所に忍ばせんとて左衛門尉に計る。左衛門尉、難波なる姉の許に下し奉らんとて用意をす。北の方心苦しく思す。

かな

さなきたにつゆけき物をはつしくれ、なみたのあめにそてぬらすかな

と詠ず。姫君急ぎ戻り、内へ入りて琴を調ぶ。中将も笛を合す。中将姫を慰むれば、姫君

ならはねは人のつらさもいさしらす、たゝいにしへそこひしかりける

と詠む。中将

よしや君うへはこのよにすますとも、ふかき山にそともに入なん

と行末を契る。若君を呼び、思ふ事なく育つるならば嬉しかるべきにと歎く。

夜明け、又大納言より使あり、中将は力なく徳大寺へ赴く。

大納言、大宮の姫君を暫く余所へ遣らんとて兵衛助に計る。兵衛助難波の浦なる姉の許に下し奉らんとて用意をす。北の方心苦しく思す。

中納言、大宮の姫君をいづ方へも遣らんと言ふ。北の方悲しむも、中納言武士を召して用意を命ず。

(40)
大納言、阿波の局を使にて若君を呼び寄す。大宮の姫君この事を夢にも知らず、若君を渡す。

(41)
暁大宮の姫君の方へ車を参らせ、慰みに天王寺に参られよと勧む。姫君はじめて思ひ合せ泣き沈む。

(42)
大納言の姫君二人ながらこれを聞き、大宮の方へ文を送りて慰む。大宮の姫返事を認め、奥に

なに事もうき世の中のならひそと、おもひなせともぬるゝそてかな

と記す。これを見て親ながら情なく思す。

(43)
大宮の姫君、中将の見る事もあらんかと思して、障子に、

おもひ出はあはれとも見よみつくきの、あとははかなきすさみなりとも

ふるさとをなにとわかれてゆくみつの、あとのしらなみたれにとはまし

と書きつく。更に身の上を思ひ続け

大納言、阿波の局を使にて若君を呼び寄す。大宮の姫君、これを限りの別れとは夢にも知らず。

暁大宮の姫君の方へ車を参らせ、天王寺に参りて慰み給へと勧む。姫君はじめて思ひ合せ泣き沈む。

大納言の北の方、姫君を憐み泣き悲しむ。大宮の姫君、北の方へ

なにこともうき世の中のいつはりと、おもひなせともぬるゝそてかな

と書きて文を参らす。

大宮の姫君、なからん後の形見として、枕の先に

おもひいてはあはれともみよみつくきの、あとははかなきすみかなりとも

と書きつく。更に身の上を思ひ続けすみなるゝわかふるさとをいてゝより、いつくのくさのつゆときえなん

中納言、阿波の局を若君の迎へに参らす。局、姫の最後の別れと知らざるを憐みつつ若君を連れ来る。

程なく中納言より姫君の方へ、物詣でをして心を慰み給へと使あり。姫君はじめて事の由を悟り伏し沈む。

大宮の姫君、武士にせかれ、涙ながらに、

すみなれし我ふるさとをたちいでゝ、いづくの草のつゆときゆべきと障子に書きつく。また中将の見よかしとて、枕の障子に長歌を書きとめ、更に、

とにかくになさけのみちのかはらずは、かごとばかりもおもひしれ

すみなれしわかふる里をたちいて
ゝ、いつくのくさの露ときえなん
と詠ず。

(44) 介をはじめ、菅丞相の筑紫へ流され
し故事を今身の上に思ひ知らさる。

(45) 供の者に急がされ、姫君都を立ち出
づ。鳥羽より舟に乗り、淀の渡に着
く。男山を伏拝みて、一年放生会の
時上卿に立ちし中将の俤、また若君
の俤を思ひ続け、
身のうさをなけくなみたの露けさ
に、又うちよするわかのうらなみ
と詠む。

(46) 都には大納言の姫君達、大宮の姫の
御返事を母上に見せ涙を流す。

(47) 中将、この事を夢にも知らず、大宮
の姫君のみ恋しく思ふ。

(48) 大宮の姫君、介と夜もすがら語り明
かす。介、
何事も見はてぬ夢とおもふにも、
いとゝ露けき袖のうへかな
さそなけにうきもつらきもよしや
とうち詠む。

介をはじめ供の人々、菅丞相の筑紫
へ流されし故事を今身の上に思ひ知
らさる。

供の人々に急がされ、姫君都を下
る。鳥羽、淀を過ぎて、若君の俤を
偲びつつ、
よのうきをなけくたもとにうちそ
へて、ひとしほぬらすなみのしつ
くに
と口ずさむ。

都には大宮の姫君の文を、大納言の
北の方と姫君御覧じて袖を絞る。

中将、この事を夢にも知らず、大宮
の姫君の事のみ思す。

大宮の姫君、介と語り明かす。介思
ひ続けて、
なに事も見はてぬゆめとおもふに
も、いとゝつゆけきそてのうへか
な
かし
などと色々に遊ばしおく。

姫泣く〳〵都を立ち出づ。淀山崎よ
り舟に乗り、菅丞相の故事を身の上
に思ひ知らさる。姫涙ながらに、
ながれゆくうき身のほどはすつる
とも、人のなさけをいかでわすれ
ん
と詠ず。

たゝ、見はてぬ夢のこゝちこそすれ

と詠む。

(49)

夜更けて又舟にて行き難波の浦に着く。芦の屋へ姫を送り届け、供の人々は皆帰る。主の尼君姫を労り慰む。

(50)

姫君心をかきくらし、

なにこともはかなき夢と思ひなさは、さむるこゝろのせめてあれかし

また徒然の余りに長歌を詠む。

(51)

中将隙を窺ひ大宮へ帰るに人なし。阿波の局に問ふも局大納言に憚りて知らずと答ふ。中将姉妹の姫君の方へ行き、大宮の姫君の文を見て泣く。大宮へ渡り、枕の障子を見れば様々の事を書きて奥に、

あひ見すは人にうらみのともあらし、中〳〵なにゝちきりそめけん

とあり。

と詠む。姫涙の隙より、

さそやけにうきもつらきもよの中は、見はてぬゆめの心ちこそすれ

と口ずさむ。

又舟を下し、難波の里に着き、浅ましき住家に入る。難波の女房共常に参りて姫を慰む。

主の尼君、様々に姫をもてなし慰む。

中将大宮へ帰るに人なし。枕障子に

おもひいてはあはれとも見よみつくきの、あとははかなきすみかなりとも

と書かれたるを見て心惑ひ転び伏す。阿波の局に問ふに、局大納言に憚りて答へず。姉君の方へ渡り、大宮の姫君の文を見て泣く。大宮へ帰り見るに、手習の草紙に姫の書置あり。奥に

やう〳〵舟を漕ぐ程に津の国難波に着き、海士の苫屋に入る。主の尼君姫の美しきに驚く。

中将徳大寺より帰るに人もなし。枕の障子に歌など数多あるを見て胸うち騒ぎ、阿波の局に問ふも知らずと言ふ。父の計らひと思ひ心も消え果つ。

(52) 中将せめて夢になりとも姫を見んと、姫の小袖を返して被き臥すも夢を結ばず。悲しくて、

さ夜ころもかへしてぬれはまとろます、夢にも君を見ぬそかなしき

恋わふるなみたははやきみなせ川、なかれあふへきすゑをしらせよ

とにかくに物そかなしきさよころも、袖のみぬれて夢もむすはす

など詠じ、楊貴妃李夫人のためしを思ひつつ涙にむせぶ。

(53) 大納言より又使あるも中将聞き入れず。

(54) 中将若君を呼びて名残を惜しみ、姉君の方へ預く。

(55) 母上これを聞き、大納言にとりなすも聞き入れず。

(56) 中将、播磨守一人を具し都を迷ひ出あひ見すは人にうらみはよもあらし、なかくなとやちきりそめけん

とあり。

中将せめて夢に姫を見んと、姫の衣を被き臥すも夢を結ばず。

さ夜ころもかへしてきれとまとろます、ゆめにも人をみぬそかなしき

とにかくにおもふ心のくるしきに、袖のみぬれてゆめもむすはす

と詠み、思ひ沈む。

大納言より又使あるも中将聞き入れず。

中将若君を呼び名残を惜しみて後、姉君の方へ渡り、行末を頼む。

中将母上の方へ参る。母上大納言にとりなすも聞き入れず。

中将都を出でんとて、中将せめて夢になりとも姫を見んと、姫の小袖を返して臥すも夢を結ばず。悲しさに

からごろもかへしてきれどねられねば、ゆめにも人を見ぬぞかなしき

と詠む。

中将若君を呼び名残を惜しむ。

中将、西国方を尋ねんとて、住吉天

づ。

なけきわひ駒にまかせてすき行は、夢ちをたとるこゝちこそすれ

と打詠め、難波に着く。その夜あたり近く、

恋しさはおなし心にあらすとも、こよひの月を君見さらめや

と声するを聞き、いとど涙を催す。夜明けて天王寺へ参り祈請す。

(57) 難波にては姫君都のおとづれを待ち暮す。

(58) 中将住吉へ詣で、七日参籠して一心に祈念す。

(59) 年も暮れんとして姫君いとど心細く、亡き後の形見とて長歌を書き置く。

(60) 姫君十月末より悩み、命も危く見ゆ。姫君、介に中将への文を託す。介様々に慰む。姫夢に中将の姿を見、

露の身のいまをかきりとおもふにも、たゝ恋しきはみやこ成けり

うちなけきあしにまかせていてゆけは、ゆめちにたとる心ちこそすれ

と詠じ、天王寺の方へ志す。その夜はくらといふ所に宿り、

こひしさはおなし心にあらすとも、こよひの月は君もみるらん

と詠み、夜明けて天王寺へ参る。

それより住吉へ詣で、七日参籠して祈念す。

日数経るままに姫君思ひの数積りて命も危く見ゆ。姫君、介に中将への文を託す。介様々に慰む。姫夢に中将の姿を見て、

つゆの身のいまをかきりとおもへとも、たゝこひしきはみやこなり

王寺に参り三七日参籠す。

ある夜の夢に姫君中将を恨み、

身をすてゝいまはうき世もいかならん、われはなにはのなみにしづみぬ

と詠ずと見る。中将さては難波にありと思ひ、社を伏拝みて、

こひしきはおなじ心にあらずともこよひの月はきみ見さらめや

と詠み、此処彼処を尋ぬ。

難波にては姫君、中将の夢を見る。姫次第に弱り、中将への文を介に託し、

つらかりし人のこゝろぞかた見なる、なにはのなみにしづむわが身を

故郷をゆめに見はなとなくさまて
なにあやにくに恋しかるらん
と詠む。その後次第に弱り、介の励ましの甲斐もなく終に息を引取る。

(61)

住吉にて祈念をこらす中将の幻に老翁現れ、汝の恋する者は既に冥土に赴きしが、観音憐みて閻魔王に乞ひ今一度見せ奉らん、明日の午の刻迄に尋ね逢へとて
たつね見よなにわのあまのぬれころも、きてすみよしの松とたのめは
と示現あり。

(62)

中将、播磨守を伴ひ、難波の方を尋ねつつ賤が伏屋に宿を借る。夜もすがら住吉明神に祈請するに夢に姫君現れ、恨めしげにて、
思ひきや難波も夢としりながら、身をうきくもにたとふへしとは
と宣ふ。中将はや亡き人かと悲しく、
けり
ふるさとをゆめにみは又なくさまて、なとやみやこのこひしかるらん
と詠ず。その後次第に弱り、介の励ましも甲斐なく終に息を引取る。
後の事共懇にしたため空しき煙となす。介様を変へ、姫の後世を弔ふ。

住吉に参籠せし中将は、七日に満ずる夜夢に姫君を見る。姫君恨みたる気色にて、
おもひきやなにはのゆめとしりなから、身をうきくもにたとふへしとは
とうちすさむ。中将夢さめ、
なけきつゝうちふす夜はのゆめさ
と詠み、終に息を引取る。
あたりの僧を請じ、夕の煙となす。介様を変へ、姫の菩提を弔ふ。

なけきつゝうちぬるよはの夢さめて、あわぬうつゝにきえぬへきかな

宿の主これを聞き、川向うの尼君の許に京より流されし女の昨日の昼程に死にたる由を語り、思ふ人が薬を与へば生き返らんとて、中将に薬を参らす。中将嬉しく立ち出でんとすれば家もなく、松の木の下なり。中将さては明神の教へと頼もしく、尼君の方を尋ぬ。姫の亡骸にかの薬を与へ、様々に扱ふ中姫は蘇る。姫、いづくとも知らぬ道を迷ひ行く中、老翁現れてこの度は返り給へとて、我を高き所へ引上ぐると思へば心つきたりと語る。互に来し方行末の事を語り合ひ、涙に袖を絞る。

(以下A類本の筋立全く異なり対照出来ず)

(63)

翌年の春、中将、播磨守を都へ上せ、若君を賜はらんと乞ふ。中将の行方を探しゐたる大納言の喜びは限りなく、跡を中将に譲り、天王寺へめて、おくるうつゝはわれやきえまし

と詠み、告げにまかせて難波へ急ぐ。

中将、播磨守と共に難波の方を尋ね、介にめぐり逢ふ。介涙ながらに始終を語り、姫亡くなりて今日は七日になる由を語る。

(64)

中将難波の里を尋ね、介にめぐり逢ふ。介始終を物語る。

中将自害せんとするを播磨守抱きつきてとどむ。

(65)

介、姫の文を中将へ参らす。見ると長歌があり、奥に、

みとりこをたれかあはれとはくゝまん、われはなにはのなみにむも

中将身を投げばやと思ふも思ひ返す。

介、姫の文を中将へ参らす。

迎へを奉る。
中将正月に姫君と共に都へ上る。やがて姫君出生し後女御に参る。其後も若君姫君を数多儲く。中将の北の方、徳大寺の姫君をも時々は訪れ給へと勧むれど、中将行かず。
中将、若君を伴ひ喜びのために住吉へ詣づ。中将、尼君の方へ、

たのみこし神のいかきをきてみれは、ときはに見ゆる松のむらたち

と遣はす。尼君返し、

よそならぬ身にもあはれをしらするは、松のうははをわたる神かせ

其後中将一家は行末目出度く栄ゆ。

(66)
中将、僧を請じ髪を下す。硯を召寄せ、

一すちにおもひきりたるくろかみの、あかぬわかれもいまはうれしき

すてはてんたよりあるよのつらさこそ、これさへ君かなさけなりけれ

と記す。播磨守も共に様を変ふ。中将、姫君の仏事を営む。

(67)
都には中将の失踪に騒ぎとなりやがて尋ねて難波へ使を下す。中将此世にては父母にまみえじと使を返す。

(68)
中将、姉君の方へ文を送る。姉君、母上に文を見せ参らす。父母共に難れぬ
とあり。又硯の懸籠にも文あり。中に

をのつからおもひもいてはこれを見よ、いまをかきりのみつくきのあと

と書けり。
都には中将の見えぬに驚き、播磨守を難波へ下す。播磨守尋ね会ふも中将、大納言の文も手に取らず。播磨守泣く〳〵都へ帰る。

波へ下るも中将会ひ給はず。

(69) 父大納言叡山へ上り髪を下す。北の方もやがて様を変ふ。徳大寺の姫君も髪を切る。介の局は天王寺にて姫の菩提を弔ふ。

中納言、北の方共に様を変ふ。

(70) 中将、四十の頃より病を受け、日にそへて重る。桜の散るを見て、

いにしへは花をあはれとみしわれを、あはれといまははなのみるらん

と観じ、その後次第に弱りてやがて往生を遂ぐ。播磨守も続きて往生す。

中将、高野山に赴き姫の菩提を弔ひ、四十二と申すに、奥の院にて往生を遂ぐ。介の局も六十三にて往生す。

(71) 若君は成人の後大納言の跡を継ぎ、目出度く栄ゆ。

若君十六にて中将となり、都一番の栄花に栄ゆ。

右の如く記事の上から見れば、A類が最も詳しく、B類はさして変らないが和歌などがやや少く、C類になると、甚だしく簡略である。この差は本文の量によって見ると更に著しく、おおよその字数によって対比すると、B類はA類の四分の三弱、C類は実に四分の一強にしか過ぎない。次に筋の上では、A類とBC類とは結末が反対であること、「若草物語」の場合のAB両類の相違と全く同じである。然るに、その結末の部分を除いては、A類とB類とはかなり近く、C類のみが随所に場面の省略があり、和歌においても著しく数が少なくなっている。C類の伝本は板本

のみであり、「時雨物語」や「若草物語」においても、時代が降る程、和歌をはじめ省筆され筋書化されてくる傾向の見られることに照しても、このC類が最も後出の本文であることは、ほぼ間違いないであろう。たとえば、中将が大宮の姫君に求愛する条（前掲梗概の(6)(7)(8)）において、中将の姫君に贈れる歌がAB類では四首記されているのに対してC類では二首である。第一首目の歌は三類共に共通しているから問題ないが、C類の第二首目は、上句はAB類の第四首目とほぼ一致し、下句は第二首目のそれと発想に類似している所がある。そして、C類のこの歌は、上句と下句との意味の続きに無理があるように思われる。これは、AB二類の第二首目と第四種目の歌とが折衷されて、C類の第二首目の歌が作られたことを示しているのではないかと考えさせるのである。

そこで、AB二類の関係が問題となるのであるが、結末の違いについて言えば、「若草物語」の場合と同様に、大宮の姫君が住吉明神より与えられた霊薬によって蘇生し、末永く中将と結ばれたとするA類本の方が、新しい改作であると考えるのが自然であろう。ところが、B類本の叙述には、次のような錯雑が見られる。

A類は、男主人公である中将の紹介から書き出されているが、B類はまず女主人公の姫君のことから始められる。（これも「若草物語」におけるAB二類の場合と同じである）その女主人公をB類では、はじめ伏見中納言の姫君とするが、（梗概(2)）次の(3)においては大宮中納言の遺子であると述べられ、更に(14)になると大宮大納言の姫と阿波の局の口から語られていて、首尾一貫していない。A類本ではじめから大宮大納言の姫と記されていることに照すと、「若草物語」におけるB類本と同じく、これは改作の未熟に由るものではないかと思われる。

B類の(4)は、A類の(6)のはじめの部分を前に出してきた形であるが、そこでは、阿波の局から物思いの理由を訊ねられた中将は、相手の女性の素性を明かしていない。それだのに(6)になると、突然阿波の局は大宮の姫君の乳

母介の局の方へ行って、中将の想いを語っている。つまり、(5)を隔てて(4)と(6)とがつながるべきであるのが、飛躍が見られるのであって、これも改作の際の書き漏らしと考えざるを得ない。

B類本は、赤木文庫本・天理図書館本のいずれも、書名を「小伏見」と題している。これは「小敦盛」と同じく、女主人公が伏見中納言の子である所からかく名づけたのであろう。AC類本が男主人公の通称である「桜の中将」を以て書名としているのと対照的であって、巻頭における主人公の紹介の順序の相違とも正しく対応している。ところでA類では(1)において、男主人公であるたかみつの中将が世に桜の中将と呼ばれたとの記事があるが、B類においてはじめて中将が紹介される(3)の個所には、そのような記事が見られない。然るに(24)に至ってB類本には、「そのとしの八月十五夜、めい月なりとて、大りにてさま〳〵の御あそひともある中にもさくらの中しやうなくてはとてめされける」と、突然桜の中将の名が出てくる。このことは、B類本は先行の「桜の中将」という作品を、女主人公を中心に改作しようと意図して、書き出しの順序を改め、桜の中将の名を削るなどの試みをしたのであるが、書き進める中に不徹底となり、右のような桜の中将という名の唐突な出現に、改作の痕跡を残す結果になったのではないかと考えさせるのである。

右の如く、B類の方がA類よりも後出の形態であることを示す資料が見出され、物語の結末の相違から考えられる関係とは、逆の結果が出てくるのであって、「若草物語」のAB両類の関係と同様である。これはどのように解釈したらよいのか。考えられるのはやはり「若草」の場合と同じく、AB両類よりも更に古い形態があって、現存の両類本は、それから別途に岐れ出た改作本ではないかということである。すなわち、A類本は巻末に中心をおいて改作し、B類本は筋立はほぼ原作の儘としながら、巻頭にやや手を加えた結果が、上述の如き現象を呈したものとすれ

ば、最も無理なく両類の関係を説明し得るように思われる。そしてC類は前述のように最も後出のものであろうが、巻末はB類と一致するにかかわらず、巻頭の方はむしろA類に近く、これまた、AB両類に先立つ古い形態から、AB両類とは別の経路をとって成立したものと考えなければならない。

以上は主として叙述の大筋の上から三類の関係を想定したのであるが、更に本文の上から比較してみても、三類の詞章は夫々に離れていて、その間に直接的な本文の伝承関係を見出すことは困難である。実例として、前掲梗概の(6)から(10)までの、中将が姫君に求愛する条を対照してみる。

第一段

A　類（国会本）

御めのとあわのつほね、御まへにまいりて申けるは、なとやいつとなくうちふしかちに見えたまふは、心くるしく侍なり、なに事をなりとも、わらはに御こゝろおかすかたり給へかし、身にかへておもひたてまつり候になとゝ申けれは、中将つゝましなから、すきにしせちゑに見し面影あちきなくおほゆるなりとの給へは、あはのつほね、いかなる人とかきこしめしつらんと申せは、大宮の大なこんのむすめとかやきゝしとのたまへは

B　類（赤木文庫本）

あはのつほねと申御めのとまいりて、なに事をおほしめして、かやうにいつとなく心くるしくわたらせ給ふそと申けれは、いつそやの御せちゑに、なにとなくよそなから一め人をみしより、ありしおもかけのわするゝひまもなくて、いまは此よもあちきなしとて又うちふし給へは、めのとうちきゝて、いかなる人なるらんと申せとも、きぬひきかつき返事もなし、ちゝ大しん殿も、きたのかたもきこしめして、よにくるしけにそおほしめしける

C　類（本問屋板）

あはのつほね見参らせて、何事か思召給ひて、かやうになやみ給ふそと申けれは、中将仰けるは、なにとなく御せちゑのとき、大みやの大なこんのひめを、まひのたもとのしたよりひとめ見つるよりも、しづ心なくこひとなる、いかゝすへきとの給へは

第二段

あないみしの、その御事ならは、なとやとくよりうけたまはり候はぬや、すけのつほねと申て御めのとさふらう、わらはかいとこにて候か、この二とせ三とせ申とたえて候へは、いかになりてかさふらうらん、文をつかはして見はんへらんとて、やかてふみつかはしけれは

（中略）

あはのつほねうちきゝて、その御事ならはとくうけ給はり候とて、其うちにすけのつほねと申て、我らかいとこの侍候ほとに、ふみをつかはしよひよせ候て、ねんころに此よし申へしとそいひけれは

第三段

すけはよろこひ、やかてきこえぬ、あなゆかし、ひさしく見たてまつらねは、こひしさ思ひいてゝ、きこえぬ

さてもすきにしせちへに、御身のひめ君を中将ほのかに見たてまつり給ひてのち、御物思ひにしつませ給ひ候へは、心くるしきほとなり、いかにもよきさまにはからひ給へといひけれは、すけはうちわらひ、おもひかけぬおほせ事かな、御すかたはよのつねならすうつくしくましませとも、みなしこになりはてさせ給へは、さやうの御事なとはたれかは見さるほとにあはのつほね、すけのつほねのかたにゆきて申けるは

すきにし御せちゑに、ひめ君を中しやう殿いかにして御らんせられつらん、しつ心なき御事にてわたらせ給へは、わらはまても心くるしく候、すけのつほね申されけるは、御すかたはならひなくわたらせ給へとも、みなしこにてましませは、かしつき申人もなし、はや御とし十六にならせ給ひける

はこくみたてまつり給ふへき、中〳〵みくるしき御事なるへしと申けれは、あはのつほね、それにはよりたまふへからす、御心にかなふ人ならは、いかやうにおはしますとも、もちい給ふへし、御としはいくつにならせ給ふそととひけれは、十六に成給ふなり、よろつ世の中さためなく、うき事におほしめす御心にや、いかならんところにも世をいとひ、ちゝはゝの御あとをも、とふらひたてまつらはやとおほしめしけれとも、さやうにもなしたてまつるへきならねは、あけくれはかすかなる御ありさまおしはからせ給へといへは、あないとをしく、けにもさこそと思ひやりたてまつる

第四段

なにさまにもこの御ふみをたてまつり、よきさまに申て、御かへり事をたひ候へとて、ちうしやうに此よし申せは、なのめならすよろこひ給ひて、くれなゐのうすやうのことにに

ほひふかきに

さらは御ふみたまはれと申けれは、あはの御つほねよろこひて、中しやう殿にかくと申せは、なのめならすよろこはせ給ひて、したかさねのうすやうにかくなん

いかにせんみしおもかけのわすら

中将殿うれしさかきりなくして、みとりのうすやうにかくはかり

いかにせん見しおもかけのわすられて、しほりそあへぬしのひねのそて

かやうにあそはして、かすの御ひき

いかにせん見し面影のわすられて、しほりもあへぬしのひねのそて

とかきてひきむすひてたひけれは、やかてすけにとらせて、御返事かならすといへは、いさやかやうの御事はならはせ給はねは、いかゝといへはそれはさる事なから、よきやうにたのみたてまつるなり、これへ入申へきはからひをめくらし給へと、さま〳〵かたらひけれは、いかさまにも申て見候はんとてかへりけれは

第五段

ひめ君はまちゐさせ給ひて、いつくへゆきたまひたるそとの給へは、したしくさふらふものゝひさしく見候はぬとてよひ候つる程に、まかりてむかし物かたりし侍りぬとて

第六段

よしあるふみをとりいたし、これ御らん候へとて、かたはらにをきたてまつるは、心えぬ事かなとおほしめし、御かほうちあかめてみ給はす、すけ申けるは、これさくらの中将とのと申人の御ふみなり、すきにしせれて、しほりもあへぬそてのけしきを

すけのかたへ御ふみをつかはしけれは

ひめ君に此よしを申せは、たれかはおほえすとて、御かほをうちあかめて、たち給ひぬれは、御ためにあしかるへき事をは、いかてかはからひ申へきとて、はらたちけれとも、きぬひきかつきふし給ひぬ

て物を給はりて、あはのつほねはかへりつゝ、すけのつほねをよひいれ、ねんころにしか〳〵の事とかたりける、すけのつほねうちきゝ、申けるやうは、いとけなきよりも、ちゝはゝにをくれさせ給ひ、かすかなるていにすみ給ふほとに、人の御目にもいかゝとは思ひ参らせ侍れ共、いかさま申候へしといひ給ひけれは、あはのつほねうれしく思ひ、いろ〳〵御ひきて物をすけのつほねにつかはしける

さるほとに、すけのつほねひめ君へ参り、此よし申給ひけれは、とかくのいらへもし給はす、御かほにもみちをちらし立給ふ

ちゐに、ほのかに見たてまつり給ひてのち、しつ心なき御なけきにてわたらせ給ふとて、わらはかしたしき人あはのつほねと申は、かの御めのとにてさふらふか、心くるしき事におもひたてまつり、身つからをよひ、あなかちにわひ候よし、こまくとかたり申せとも、一こと葉の御返事もなし

第七段

ちからなく、あはのつほねのもとへ此よし申けれは、中将きゝ給ひ、いまたいとけなき人なれはことはり也とて、又かくなん

人しれぬなみたの川のはやきせを、せきこそかぬれそてのしからみ

ちいさくむすひてたふ、すけかもとへ此たひはいかにもして御返事かなへ給へとて、しろききぬ一かさねそへてつかはしけり

第八段

ひめ君いまたふし給ふ、御まくらにまいりて、又ちうしやうとのゝ御ふみとて、ひろけて御かたはらにをきちからなくて、あはのつほねのかたへゆきて、このよしを申せは、中しやう殿よりしろきこそて一かさねに、かすの御ひきて物をすけにたまはりて、又一しゆかくなん

人しれすなみたの川のはやきせに、せきこそかぬれ袖のしからみ

とあそはして、ひきむすひていたさせ給ひて、此たひはかへり事かまへてくとありしかは、すけ御ふみをとりてかへりぬ

ひめ君、ひるのまゝにてふし給ふ、御そはにまいりて、又ちうしやう殿の御ふみとりてまいらせ候、此たひすけのつほね申給へるやう、さりとてはあしき事はよも申候はし、是は御ゐんつきとてめてたき御事也、御

けれとも、見たにやり給はす、すけかさねて申やう、御身の御ありさまたれかは見はこくみまいらせ候へき、これはをやたちましませは、めてたかるへき御事なり、ともかくも申さんまゝにておはしませと、さまさまこしらへたてまつれ共、つやつや物をもの給はす

第九段

申かねて、御文を見れは

あはれともなとかは人のとはさらん、さのみつれなきこゝろなりとも

すけ、あなうつくしく、てさへいみしくかき給へるかな、かほとになに事も人にすくれさせ給へる事よ、これ御らんせよと申けれとも、さらにきゝ入給はす

第十段

ちからなく此よしを申つかはしけり、中将はか程になさけなく、心つよくおはせるかとて、日にそへておほしめす事かきりなし、御ふみはちつかといふはかりたてまつり給へとは御返事たひ候へと申けれは、ともかくも物ものたまはす、うちふし給ひけれは、此御ありさまにて、ましませは、たれかはあはれともとひまいらせ候へき、これはめてたき御事にてわたらせ給ひ候と、かきくとき申せとも、きゝ入たまはす

その夜もあけぬ、又中しやう殿より御文とりてまいりたり、ひらきてみれは、かくなん

あはれともなにかは人のとはさらん、かくなけきつゝおもふ心を

すけのつほねこれを見て、御てさへかやうにうつくしく、人にすくれまします、これ御らん候へと申て、御まへにさしをきけれとも、きゝ入たまはす

このよし中しやう殿に申せは、いとゝ御心くるしくおほしめし、くらしかね給ひつゝ、御ふみひまもなく、日々にそつかはし給ひける

返事させ給へと申けれ共、きぬひきかつきふし給ふ

もかひなし

第十一段 やよひなかはの事なるに、さくらのさきけるを一えたとりて、御ふみをむすひ付、つかはしけれは、すけこれをとりてひめ君に申けるは、さのみ御こゝろつよきも、なさけをしらせ給はぬ御事なれは、人の御心もはつかしく候なり、これはかり御返事あれと申て、あけてみせたてまつれは

あはれともいふことの葉のなかりせは、露のいのちのきえぬへきかな

と、まことに心ほそきことをかきつゝけ給ひけり

第十二段 あはれなる御事や、此御返事はかりさせ給へとて、御すゝりかみをとり、つくろいけれと申せは、ひめ君こゝろならすせめられて

いつはりのことの葉にのみしりぬれは、露のなさけもかけしとそ思ふ

とかきてをき給へは、すけとりてひすけ、これはかりは御かへり事せさせ給へ、あまりに〳〵御心つよきも、なか〳〵心なきにおなしく候、それ〳〵と申けれは、あらむつかしやとてかくなん

いつはりのことのはのみとしりぬれは、つゆのなさけもかけしとそ思ふ

又あるとき、かくなん

あはれともいふことのはにかゝらすは、つゆのいのちのきえぬへきかな

とあそはしてあるを

中将殿より重て御ふみつかはし給ふすけのつほね申やう、あまりにつらき御心かなと人申候はん所もいかゝ也、御返事させ給へと申けれは、あらむつかしやとて

あはれともいふことの葉にかゝらすは、さのみはそてをしほりかぬへき

いつはりのことのはのみとしりぬれは、つゆのなさけもかけしとそおもふ

かやうにあそはしてうちをき給ふ、

きむすひ、御つかひにとらせぬ、中将殿にたてまつれは、うれしさかきりなくてみたてまつれは、何となくかきみたしたるふてのなかれ、すみつき、うつくしく、たとえんかたなし、いよ〳〵御こゝろあこかれて、たひ〳〵御ふみつかはし給へとも、そのゝちは御返事もなかりけり

とかきて、なにとなくうちをかせ給ふ、うれしや、まちたる文なれはとて、いそきもちてまいりぬれは、中しやう殿御よろこひありて、ひらいて見たまへは、いつくしき事かきりなく、いよ〳〵心そらにあこかれて、おもひのかすそまさりける、御文はひまなくまいれとも、そののち御返事もなし。

すけのつほねうれしく思ひて、中将殿へそ参りける、まちえたる返事なれはうれしく思ひ給ひて、とりあけ見給へは一しゆのうたあり、御手のうつくしさ、いよ〳〵御心そらにあこかれて、やるかたもなきをくるまの、思ひのかすはつもれ共、露のまもわするゝひまなく、なみたにむせふはかりなりとくとき給へは……

B類は第一段と第二段との間に、前述の如く梗概(5)の記事が挿入されているが、ここにはその本文は省略した。こうしてみると、A類とB類とは、各段落がほぼ対応するが、C類は第四段の叙述の中に、AB類の第三段の一部も含まれていて、単なる部分的な省筆でなく、本文を大幅に縮めるために総体的な変改を行なったことが窺われる。しかし一方、C類の本文にもA類あるいはB類と類似した語句も散見し、C類の本文もその源流に遡れば、AB類の本文と源を一にするのではないかと想像せしめる。一つの例として、第二段のはじめの阿波の局の言葉の中に、「その御事ならはなとやとくよりうけたまはり候はぬや」(A類)、「その御事ならばとくうけ給はり候」(C類)という類似した句が見える。用語は同じであるが、表現は前者は否定、後者は肯定と全く逆になっている。C類の如く「その事なら既に聞いておりました」でも意味は通るが、A類の「その事ならばどうして早く聞かせて下さらなかったのですか」の方が、中将から事情を打ち明けられた時の阿波の局の言葉として遙かに適切であることは明らかであろう。恐

らく、C類のような適切でない言い方は、A類の如き句から出て来たものと思われ、この両類の本文が決して無関係ではないことを示すと共に、A類の方が古い本文を伝えていることをも推測せしめるのである。

次にA類とB類との間は、C類に対するよりも更に近い関係にあることが明らかである。第三・四・五・六・十一の各段はB類の方が著しく簡略であるが、七・八・九・十・十二の各段では、両類の叙述の運び方はかなり類似している。しかし後者の部分においても、文章を細かに対比してゆくと語句の相違が非常に多く、両類の間に直接的な承接関係を認めることは困難である。ただ第八段の、介の局が姫君を説得する言葉の中に、「これはをやたちましませはめてたかるへき御事なり」（A類）「これはめてたき御事にてわたらせ給ひ候」（B類）という対応する句がある。A類の「をやたちましませは」は既定条件の表現になっているが、多分「をやたちましまさは」の積りであろう。もし両親が揃っていたならば、このように貴公子から求愛されることは目出度いことでありましょうの意味と解釈される。ところがB類では、この「をやたちましませは」の句を欠いているために、「めてたき御事」が具体性を稀薄にしている。恐らくA類の如き形が元であったと想像され、こういう所にかすかながらAB両類を繋ぐ糸が見出されるように思われる。

次に両類の叙述に著しい繁簡の差のある、阿波の局が中将の恋をとりもつ条を見ると、A類では阿波の局と介の局との言葉のやりとりが克明に書かれ、躊躇する介の局を阿波の局が説き伏せて事を運ぶ過程が、室町物語には珍しい程生き生きと写されているのに対して、B類は僅か一回の対話で事を済ませていて、その叙述は甚だ素気ない。特にB類の第三段末と第四段初とをつなぐと、「はや御とし十六にならせ給ひける、さらは御ふみたまはれ」となるが、この辺などはいかにも叙述をはしょったという感を与える。恐らくA類に見える、阿波の局が姫の年を訊ねたのに対

して介の局が「十六に成給ふなり」と答えているその言葉をとり入れたのであろうが、無暗に筆を先へ進めたために、このような文を作る結果となったのではないかと想像されるのである。

右に掲げた程度の相違は、全篇を通じて随所に見られ、中にはA類の本文には冗長さを感じさせる個所もあるが、概してB類本より描写がこまやかである。B類の本文は、物語の筋を運ぶ上での記事の省略はそれ程でないが、描写をはしょりすぎて、作品としてはふくよかさを失なっている。それに対してC類の板本は記事も相当に省略して再編成したために構成が簡潔になり、全体としてのまとまりからいえば、B類よりもかえって優っていると言うことが出来よう。

ABC三類の本文の関係については、より古い伝本の現れない限り、確実なことは言い得ないが、管見資料の範囲内では、この三類は、成立の時代的順序は別として、性質の上からは並列的な関係にあって、相互の間に縦の関係を認めることは困難である。ただ、その中では、A類本が巻末の改作部分を除いては、最も原作の俤を濃く宿しているのではないかということが、如上の検討によって推定されるのである。

B類の赤木文庫本と天理図書館本とは、本文挿絵共に全く同系の奈良絵本で、特に掲げる程の異同は無いが、天理本の本文には誤脱が多い。

C類の二種の板本は、どちらも寛文十年の開板であるが、本問屋板が正月、松会板が三月で、恐らく松会板は本問屋板を複刻したのであろう。両板の本文には語句の小異はやや多く見られ、また松会板は所々語句の節略を行なっている。異同の例を若干示しておく。頁数は市古氏が本問屋板を翻刻された「未刊中世小説三」（古典文庫）のそれで、

括弧内が松会板である。

(1) さもかの人のゆくゑを聞て有けれは、うれしく思ひ給ひてきくよりもいよ〳〵うれしさのかすはつもれ共露ほともわすれ給ふ事なし（うれしく思ひ給ひけれ共いよ〳〵つゆのまもわすれ給ふ事もなく）、かくていかゝ有（す）へきとてうちふし給ふを

（一一六頁）

(2) 此ひめ君（此ひめ君のおは御せん）ふしみのさとゝ申所（三字ナシ）に世をいとひてわたらせ給ふ

（一一九頁）

(3) くれ竹の　そのよはかりを　かきりそと　身のうきことを　（しらなみの）　いかにと君に　みちなれて　君を忍ふの　くさのつゆ　をき所なき　身となりて　都のわかれ　このなけき　君をまつ風　こゑたてゝ　なく共君に　しらせはや　おのへの松よ（おのへの松の）　いかゝせん（ちよかけし）　君かなさけの　あらすして　思ひ知ても　しるへきに　人の心も（とにもかくにも）　さきのよの　むくひのつみの　なかりせは　いかなるかは（人のこゝろを）　うらみちの　よしや草はの　あらいその　浪ときへなん（つゆの身と　きへなんものを）　身そつらき（五字ナシ）

（一三一頁）

(4) 是ほとに心をつくしたつね参らせ候て（候へ共）、いつくにおはしませは心ともに（おはしますやらん）身にものをおもはせ給ふそと、よにうらめしく有けると夢にみへ給ふしきさよとおほせ有けれは（うらめしけにの給ふとみへさせ給ふはふしきさよとかたり給へは）

（一四〇頁）

(5) 御なみたと共にねんふつ十へんはかりとなへ給ひて、そのまゝあしたのつゆときへ給ふ、をしまぬものはなかりけり（十二字ナシ）、すけのつほね（は）、こはいかなる事そや、我をは何となれとてうちすて、いつくへ君ははやり給ふそや、われをもつれてゆき給へと、こゑもをしますなけゝ共かひそなし、あるしも、あらなさけなの御事や（な）、けふかゝるうきめを見参らせ候は（二字ナシ）んとは思はさりしに、こはいかなる御事そや（十字ナシ）とかなしみもたへけり、かくて有へき事ならねは、

その（二字ナシ）あたりの御そうをしやうし、何となくとりおこなひ参らせて（十四字ナシ）、むなしきのへにをくりせんたんのたきゝつみこめて、ゆふへ（の）けふりとなしたてまつり、そのまゝ御そうをくやうし（十二字ナシ）とふらひける

（一四二頁）

(1)は表現を変えただけであるが、この類の異同が最も多い。(2)(3)(4)は松会板の方が意味がよく通る。本問屋板の本文の不備な所を訂正したものと思われ、この三例はその特に顕著な個所であるが、この外にもなお散見する。逆に松会板が複刻に際して誤りを犯した個所はごく少ない。(5)は松会板の語句の省略が最も目立つ個所である。

志賀物語（堀川の中納言の姫君）

本作品は、横山重氏が「室町時代物語二」（古典文庫）に「堀川の中納言の姫君」と仮題して翻刻された、久原氏住吉別邸旧蔵の奈良絵本一本のみが知られていたが、近年書肆において「しか物語」の原題簽を有する一本を見ることを得た。これを原書名と認め、本稿では「志賀物語」の名称を用いることとした。

久原氏住吉別邸旧蔵奈良絵本　一冊

茶地唐草模様金襴表紙（三〇×二一・八糎）。見返し白地金箔散し、料紙金泥下絵鳥の子。題簽、内題共になし。二十丁、毎半葉十行、各行十七―二十字。挿絵、片面六図。（「室町時代物語二」の解題による）

某氏旧蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　二冊

梨地金銀切箔散し草花模様表紙（一七・五×二四・五糎）。見返し銀砂子散し、料紙間似合紙。表紙中央に紅色題簽「しか物語上（下）」。本文字面高さ約一三・五糎。（上）十一丁（下）十三丁、毎半葉十五行、各行十四字内

外。挿絵、片面（上）六図（下）五図。

右二本の本文は同系で、さしたる違いはないが、参考までに相違個所を全部掲げておく。頁数は「室町時代物語二」所収「堀川の中納言の姫君」のそれ、括弧内が「しか物語」の本文である。

(1) なみたかはなとかあふせのかたからむさめて思ひのあさからぬ身に（には）　（一七五頁）

(2) いくほどもましまさぬおやのおほせをそむきかたき（さ）にこそとの給ひけれは　（一七九頁）

(3) なれそめしことそくやしきからころも、たちはなれなんことをおもはて（ことのなけれは）　（一七九頁）

(4) さてしもあるべきことならねは、いてさせたまへは（いてさせたまひやかていまのきたのかたへいらせ給へは）、なれにし人にはるかおとり侍りぬ　（一八〇頁）

(5) あからさまにもいてさせ給はす、たゝほりかはの事のみて（にて）すぎさせ給ふ　（一八三頁）

(6) あふみのしかと申所にこそ候へ、それへおはしまし候へき（一字ナシ）と申けれは　（一八四頁）

(7) 一八八頁第四行「なけきけり、すてにわかきみ二さいになりたまふそのはる」から、一九〇頁第一行「これこそいまはのおりふし」まで脱文

(7)の如く「しか物語」には大きな脱文があり、また(3)も久原氏旧蔵本の方が意味が通るが、逆に(4)のように「しか物語」によって、久原本の本文の誤脱を正し得る所もある。

二

右に諸本を解題した四篇が、極めて類似した構想をもつことは初めに述べた。「若草」「桜の中将」の二篇は既に

筋を詳細に紹介したが、なお物語構成上の主要な部分について、右の四篇の異同を対照してみると次の如くである。

	しぐれ	若草	桜の中将	志賀物語
男主人公	左大臣の御子中将。	大納言の御子少将。	大納言の御子中将。	大納言の御子少将。
女主人公	中納言の姫。幼き時父母に後る。	男主人公の母の兄に当る前関白の姫若草。幼少にして父母に後る。	二条大宮の大納言の姫。幼少にして父母に後る。	堀川の中納言の姫。少将と結婚後、十九の年に父を失ふ。（母について記述なし）
初段 男女主人公の邂逅と結婚	中将清水参籠の砌、折からの時雨に濡るる姫に傘を貸す。その夜、姫清水の別当に奪はれんとして中将の局に身を寄す。姫の俤を忘れかねし中将は喜びて姫を我が家に伴なひ、浅からぬ契りを結ぶ。	少将の母、孤児となりし若草を引き取り、少将の妹と共に養育す。少将幼くより若草に想ひを懸けしが、遂に妹の仲立にて結ばれ、女子（一本男子）を儲く。	宮中の節会に参りし姫を中将見染む。中将と姫の乳母同士の計ひにて姫を迎へ取る。中将の姉妹これを喜び、常に姫と往来す。中将と姫の間に男子誕生す。	少将、姫の噂を聞き、文を送る。姫の乳母の計ひにて想ひを遂ぐ。
中段 結婚生活の破綻と女主人公の失踪	中将の父、右大臣の姫の聟に中将を所望され承知す。中将心ならず右大臣家に通ふ中、咒詛にあひて姫の事を忘る。姫、中将を恨み恥見ぬ先にと家を出で、縁を辿りて丹後典侍の許に身を寄す。	少将の父、左近宰相の姫の聟に少将を所望され承知す。少将宰相家に通ふも気の進まぬを見て、少将を宰相方に留めさせ、その隙に若草を宇治へ逐ふ。	中将の父、徳大寺殿の姫の聟に中将を所望され承知す。中将徳大寺家に通ふも、大宮の姫に惹かれてかれ〴〵なる見て、父、大宮の姫を難波へ逐ふ。	少将の父、少将にひこの大臣殿の姫との結婚を強要す。少将心ならず大臣家に通ふ中、とりこめられて帰ることを得ず。堀川の姫、少将の心変りと思ひ、志賀に身を隠す。

末段 男女主人公の末路	姫は典侍の計ひにより、帝の見出す所となる。中将を忘れやらぬものの、帝の寵愛を一身に受くるに至り、心ならずも承香殿の女御として、中将の妹麗景殿の女御を超えて栄華を極む。それを知れる中将は、再び同棲の叶はざるを知り、横川にて出家を遂ぐ。	若草、世をはかなみ、宇治川に投身す。若草の行方を尋ね廻りし少将はそれを知り、出家を遂げて菩提を弔ふ。父大納言は吉野の奥に籠りし少将を尋ね翻意を訴ふるも、少将聞き入れずして吉野を去り、諸国修行の後熊野にて往生を遂ぐ。（一本、若草は観音に助けられ、中将との再会を遂げて末永く栄ゆ。）	大宮の姫、難波にて思ひ死にをす。中将は姫の死後に尋ね至り、出家して菩提を弔ふ。中将、難波に尋ね来りし父母にも会はず修行に努め、やがて往生を遂ぐ。（一本、中将は住吉明神より授りし霊薬にて姫を蘇らせ、共に末永く栄ゆ。）	堀川の姫、志賀にて若君を生みて後空しくなる。翌年少将は志賀を尋ねて姫の死を知り、様を変へて菩提を弔ふ。

まず男女主人公の身分境遇はほとんど同じである。次に物語の筋立に入ると、初段の男女主人公の邂逅の仕方は夫々に異なっている。これは最も趣向を変え易い部分であり、改作をする場合、まず手がつけられる所であろう。この部分では、「しぐれ」の趣向が目立っているが、時雨が縁となって男女が結ばれるという話は、鎌倉期の擬古物語「木幡の時雨」や、先に「しぐれ」と紛れ易い作品として挙げた「雨やどり」（今宵の少将物語）などに類例を見出すことが出来る。ただ「しぐれ」では、中将の局に身を寄せてきた姫が尽間傘を貸した女であることを知った時、「たのもしくかれたる木にも花さくと、とけるちかひはいまそしらるる」と中将が歌を詠んでいる所から、表立ってではないが、清水の利生譚としての意識があったことが感じられる。初段において外に目につく異同は、「しぐれ」のみが、男女主人公の間に子供の出生を語っていない点である。（「志賀」は女主人公が家出の後に子を生んだとあ

り、順序が異なるが）これは子のある方が、次の中段において女が家を逐われる際の悲劇性を増す。「若草」「桜の中将」においては、子との別離の場面が愁嘆場として綿々と語られているのを見ても明らかである。

中段の趣向はほとんど相似ているが、ただ男主人公の母や姉妹の女主人公に対する関係に違いが見られる。これは初・末段にも亘ることであるが、「しぐれ」では母と妹が登場するけれども、さしたる役割を演じていない。母は、父の左大臣が中将を右大臣家に聟入させようとした時も、やすやすと同心し、妹はその名が時折出る程度である。ただB類本には、中将が右大臣の方へ赴く時、姫を妹の方に託すという記事があり、これは「若草」「桜の中将」にやや近くなっている（一九五頁参照）「若草」「桜の中将」においては、母も姉妹もみなし子の姫に対して極めて同情的で、父の計らひを度々諫めたり、また仲を割かれた姫を慰めるという働きをしている。特に「若草」では、母と姫とは叔母姪の関係が設定され、養い親ともなっている。「志賀物語」は母姉妹共に全く登場しない。このように、母や姉妹を姫に対する同情者として振舞わせるのは、敵役である父親の非道ぶりを強調する意味があると考えられ、その点では「若草」「桜の中将」は進んだ型であると言えよう。

末段においては、男女が再びあい添うことが出来ず、男が遁世する点は四篇に共通している。ただ「しぐれ」では、女のみは女御として栄華を極めるという、男女主人公をして別々の道に赴かしめていることが特徴的である。これはこの類の物語としては特殊な結び方であるが、中将の父左大臣が栄達を計るために中将に政略結婚を強い、また中将の妹君を入内させたところが、政略の犠牲にした女のために、妹君は帝の寵を奪われてみじめな立場になり、その上、中将までも失なう結果になったという、因果の応報を示すところに、このような筋立の意味があったのであろう。なお「若草」「桜の中将」には、男の出家遁世の所に、父が非を悔いて、行方を探した末翻意を乞うが、男はそ

れを聞き入れないという記事がある。特に「若草」では、高野山から更に吉野の奥に籠った少将を、父の大納言が尋ねてきて母の歎きを訴え、今一度都へ帰るように乞うた時に、少将は

なにしにこれまてたつねいらせ給へるそ、おもひきりてかやうに侍るうへは、いまさらにかへりまいるへきにあらす、はゝこせんの御いたはりなれはとてまいりたりとも、かきりましまし御いのちのとゝまり給ふへき御事侍らす、かやうに見すてゝ、をこなひて、ほとけにたにもなり侍らは、こくらくにてこそまいりあひ候へけれ、この世のけんさんはおほしめしきり給へとおほせ候へ、はやとく〳〵御かへりあれ、これほとにたのもしき事をいまゝておもひより侍らさりし事のくやしさよ、わかくさをうしなひ給はすは、なにのかなしみにかゝるみちには入候へき、つらき心のおこす事なれは、さむるうつゝにも候はし、いまはわか身をはよになきものとおほしめし、ひとへにほとけをねんして、しやうとにむまれ給ひてまたせ給へ、それへまいりて見まいらせんと、はゝうへには御物かたり候へ　（A類第一種天理本）

と、その願いを斥け、その夜大納言のまどろんだ隙を窺って、其処から姿を晦ましてしまう。ここに描かれている少将は、前半の優柔不断な貴公子とは全く対照的に、強い意力をもった人間に仕立てられているのであるが、これは「しぐれ」の中将が横川に遁世の後も、女御として世にもてなされている昔の女君の許へ歌を贈ったりしているのとは大分隔たりがある。それと同時に、よこしまな仕打の報いを身に知らされた大納言の哀れな様が強調されていて、これも「しぐれ」においては、中将の出家後の父左大臣について、

さ大しんとのも、たへぬおもひのかなしさにしゆけし給ひて、我あとをはたれにゆつらんとなけき給ひけり

とだけしか叙べられていないのに較べると、父親の非道な行為が自らの不幸を招いたという教訓的な意図が濃厚にな

っていることが認められるのである。

一方、「しぐれ」が巻頭に清水の利生譚としての意図を感じさせることは前述の如くであるが、その結語を見ると、

ひめきみのくわほうも、中将殿のまことの道に入給ふも、みなこれ、くわんおんの御りしやうなり

とあって、それがはっきりと出ている。この傾向を承けているのが、巻末を改作した「若草」B類本、「桜の中将」A類本であって、この二本になると、神仏の利生によって主人公の運命が逆転するという、全くの宗教的霊験譚となっているのである。

以上を綜合すると、「若草」と「桜の中将」とは、すべてに亘って非常に近い。そしてこの二篇と「しぐれ」との関係は、「しぐれ」の教訓的要素が単純化され、一層強調されたのが「若草」A類本・「桜の中将」BC類本であり、一方、その宗教的利生譚の性格を表面に押し出してきたのが、「若草」B類本・「桜の中将」A類本であるという風に言うことが出来よう。「志賀物語」は、大筋は「若草」「桜の中将」の二篇にほぼ準じているが、男女主人公のめぐり逢いに特別の趣向が構えられていないこと、男主人公の母や姉妹が登場しないこと、男の遁世に際して父親に関する記事がほとんど無いことなど、極めてあっさりとしていて、教訓的あるいは宗教的色彩も稀薄である。そこで、「若草」「桜の中将」よりも素朴のように見えるのであるが、この作品の全体の叙述ぶりは非常に簡略で、こまかな描写を端折った如くにも感じられ、一概に形として古いものとも言い切れない。

ところで、この類型の物語は、はじめに述べたように、鎌倉時代の擬古物語と直接的関係をもつことが、先学によって指摘せられている。次にその点を検討してみたい。

三

室町時代物語と鎌倉時代の散佚物語との関係については、山岸徳平氏（岩波講座日本文学「日文文学書目解説㈢鎌倉時代）や中野荘次氏（国語国文第三巻二・三号「風葉和歌集考」）の研究がある。

「しぐれ」については、山岸氏は風葉集所出の「しぐれ」を、中野氏は同じく「恋に身かふる」を、その源流として指摘せられた。風葉集に採られた「しぐれ」の歌は次の七首である。

たいしらす　　しくれの源大納言家宰相

A きみか為春のおほのをしめたれは千世のかたみにつめる若なそ　（春上）

たいしらす　　しくれの源大納言のむすめ

B 人しれぬ袖のしくれもひまなきにおなし心に鹿もなく也　（秋下）

女のゆくへしらてなけきけるころ千鳥のなくを聞て　　しくれの中将これすけ

C さよちとり友まとはせるこゑす也おなし心に物やかなしき　（冬）

はやう見侍ける女のこと人につきてのちものまうての所にまゐりあひて侍けるに

しのひてつかはしける　　時雨の中将これすけ

D みしや夢これやうつゝとたとるまにみたれてあかす春のよなよな　（恋五）

心ちれいならす侍けるによめる　　時雨源大納言のむすめ

E きえぬれは又うちいつる水のあわやあるかなきかの我身なるらん　（雑三）

しのひて物へまかりけるみちにかれくに成にけるをとこのもとにはへりけるものにあひてことつけゝる　　時雨源大納言の女

尋[F]ぬへきみわの山へはとほくともわれすきかてにことやってまし　（雑三）

小野にすみはへりけるころ別にけるをとこの夢にみえけれは　時雨の源大納言女

山[G]さとのふかきね覚にいとゝしくみしよのことをみつるゆめかな　（雑三）

この物語の構想については、小木喬氏が右の歌に基づいて復原を試みられている（鎌倉時代物語の研究）。右の歌の詞書によってはっきり分かることは、中将これすけと源大納言の女とを男女の主人公とする物語で、一度は契りを結んだ二人の仲が何らかの事情で引きさかれ、男は女の行方を失なったが（歌C）、後に別の男のものになった女と、物詣での場所ではからずも再会する（D）、という内容である。そして女主人公の源大納言の女は、運命のままに押し流された薄幸な女性で（BE）、中将と離別した後もなおその俤を忘れやらずにいた（G）ことが想像される。小木氏は、風葉集における作者の官位称呼が、その物語の最後にその作者の達した官位を示すものであることから、中将これすけ・源大納言女は、全篇を通じて身分上の変化がなかったものと思われ、男女共に富貴栄達することなく、若くして出家あるいは死亡ということで終ったのではないかと想像され、EFGの歌とあわせて、

中将から我と身を隠した姫は、やがて周囲の計らいあるいは何かの縁で、ある人と結婚する。しかし中将への思慕は止まない。ある日物詣した姫は、図らずもそこで恋しい人と再会し、その人もまた昔と変らぬ心でいることを知る。しかしこの世の掟のきびしさ、再び「見しよの夢」の返らぬことを観じた姫は、出家して小野に住み、やがて亡くなる。これを聞いた中将も、その後を追って出家する。（あるいは亡くなる）

と、後半の筋の組立を試みられている。また「しぐれ」の題名についても、氏はBの歌「人しれぬ袖のしくれも」から出ているのかもしれないが、この歌におけるしぐれという語の使い方が、一篇の題名となるには中心をはずれているようなので、もっと主人公の気持を時雨で表現したような歌があって、それから題名が出たものか、あるいはまた、時雨の雨宿りが恋の初めという場面があって、それから出たものかとも考えられる、という風に推測をされている。ところでこの風葉集の「しぐれ」の、上述の如き内容には、現存「しぐれ」と相通ずる雰囲気のあることは認められ、もしまたその題名が、時雨を縁とする男女の邂逅に由来するものであれば一層近くなる訳であるが、現存「しぐれ」には、風葉集の七首の歌と類似する歌は一つも見られないので、両者を直接結びつけるに足る程の積極的な材料とはなし得ない。

一方、風葉集の研究家として知られる中野荘次氏は、風葉集の「しぐれ」は現存「木幡の時雨」（京大研究室蔵、玉上琢弥氏が国語国文第七巻十号に紹介翻刻された）にその俤を伝えているのではないかと言われ、「恋に身かふる」こそが、室町物語の「しぐれ」と関係のある作品であろうと推定された。「恋に身かふる」は、風葉集には、

おなしてらにこもりて思ふ事かなふさまに侍りけれは　　恋に身かふる頭中将

あなたふとかれたる木にも花さくととける誓は今そしらるゝ

の一首しか採られていないが、これが前掲「しぐれ」の巻頭の場面にある

たのもしやかれたる木にも花さくととけるちかひはいまそしらるゝ

の歌と、初句を除いて全く一致し、その場面もまた風葉集の詞書にぴったり合うのである（詞書の「おなしてら」は前歌に清水とあるのを指している）。中野氏はこの事を指摘された後更に、

「恋に身かふる」の題名は、恋故に姿を変へるの意であり、これは後に帝が承香殿女御の寵愛厚く、而もその女御が先の姫君なるを知り、中将が髻を切って女御に贈り、横川に出家する事件を指すものである。以上、風葉所載の事項は悉くこの小説に符合する。だから私は、「雨やどり」（筆者注、室町物語「しぐれ」を指す）は「恋に身かふる」より出たものらしく、少くともその冒頭は確に「恋に身かふる」そのまゝだらうと確信するのである。清水参籠と祈願成就は、どの物語にあっても差支はない。「あなたふと」の歌は「たのもしや」となって居り、千載の

たのもしき誓ひは春にあらねども枯れにし枝も花ぞ咲きける　（釈教）

はこの類歌であり、清水に関した事に此の歌が常に用ひられてゐたのかも知れぬ。がそれにしても尚題名と中将の名とは、確にこの二つの物語を関係付け得られるであらう。

と述べられている。氏の言われるように、この歌が余りに類型性を感じさせる所に不安があるが、散佚物語「しぐれ」と結びつけるのに較べれば、この方が具体性をもっていると言うことが出来よう。

「若草物語」については、山岸氏は色葉集にその名の見える「わかくさ」に注目し、「古伏屋に対する今伏屋などの如きものと同じく、もとの若草物語を改修したものではないか」と考えられたが、中野氏は風葉集所出の「世をうぢ川」との比較考証によって、それを実証されようとした。風葉集に見えるのは、

たのみたりける人をゆくへなきさまに人のもてなしはへりけるにともなひてよめる　よをうち川のあはち

露の身をよもの嵐のさそひきていつれのゝへにおかむとすらん

の一首のみであるが、中野氏は、

これによって知り得る事は、あはちなる者が、主人にお供をして行った。主人は他人によってゆくへなきさま、即ち追放されたのであった。あはぢの歌は行衛しらぬ身の上を嘆いたのである。この三項である。そして、あはぢは淡路と呼ぶ女房の名であらうとの推測は極めて穏当な事と思はれる。題名から宇治川を聯想するのも亦自然の事であらう。若草物語には、この歌を見出し得ない。私は僅にその詞書の女主人公若草は、養家大納言の息少将と契り、一女を設けたが父之を喜ばず、少将を宰相の女に通はしめ若草を大仏詣に托して宇治のしるべに逐ふ。若草は宇治より更に大仏に至り戒を受け、宇治橋より入水した。この時姫に従って宇治に行ったのは、乳母のあはぢであった。この事実は全く風葉の物語の詞と符合する。あはぢの人名は偶合とは思へない。あはぢの「たのみたりける人」は若草であり、「ゆくへなきさまに」もてなした人は大納言夫婦である。「世をうぢ川」は勿論宇治（川）に憂しを含めたのである。若草の入水はこの物語切っての大事件であり、少将は長谷の観音に姫の行衛を尋ね、帰途宇治にてその入水の次第を聞くのだから、物語の題名としても当を得てゐる。

と誠に理路整然と推論され、色葉集所出の「わかくさ」も、この「世をうぢ川」の別名かもしれぬと考えられている。しかも氏は、現存の「若草物語」にはこの歌を見出し得ないと言われたが、先に伝本解題の項で述べた如く、氏が見ることを得なかった、私がB類本として分類した慶応義塾図書館所蔵の写本には、若草が夫の家を出る時の乳母の歌として、

つゆの身をよそのあらしのさそひきていつくの野へにをかんとはする

という類歌が見出されるのである。これによって、右の中野氏の推論は、いよいよ確実性を増してくるであろう。

本稿でとりあげた四篇の室町物語の中、前代の物語との関係が指摘せられているのは右の二篇である。ところが、中野氏が前掲書において取り上げられた室町物語の中に、今一つ「扇流し」がある。この作品は、女主人公の家出の原因が異なっているが、全体の構想は、「しぐれ」以下の四篇とかなり類似しているので、是非ここに取り上げておかなければならない。

「扇流し」の伝本として従来知られているのは、

延宝七年松会刊絵入本三巻　（国会図書館蔵）

上中下合一冊。改装後補帝国図書館表紙（二六・八×一八・八糎）。表紙左肩に「あふきなかし物語上中下合本全」と墨書した子持罫の題簽。元表紙欠。内題「あふぎなかし　上（中下）」。板心、白口「あふき　（丁付）」。刊記「延宝七未歳／孟春吉日／松会開板。単辺（二二・五×一六・三糎）。（上）十三丁（中）十丁半（下）十二丁（丁付は上中下通し）。毎半葉十四乃至十五行、各行二十二字内外。挿絵、（上）七頁（中）（下）各五頁。本書は笹野堅氏が「室町時代短篇集」に翻刻された。

の一本のみである。この延宝板も頗る稀本で、他に同板本のあることを聞かない。しかし、山崎美成旧蔵赤木文庫現蔵の室町末期頃写本「しやうるり御せん物語」の第五「さうしのたん」における草子尽しの中に「あふきなかし」の名が見えるので、室町期に成立していたものと考えられる。（なお本稿執筆中に、天理図書館所蔵の国籍類書の内に「あふきなかし」と題する写本のあることに気づいた。後日調査の上補遺をする積りである）

この「扇流し」は風葉集に同名の物語が見え、次の四首が採られている。

をとこのさくらを一えたおこせて侍けるに　　あふきなかしの源中納言

A あたにのみちりぬへけれは桜花風につけても物をこそ思へ　（春下）

返し　宰相中将

B あたなりとなにかはなけく色深くのとけき春のかたみとをみよ　（同）

あふきなかしの源中納言

C いとゝしくあれたる宿は秋のよに物思ふ袖そ露けかりける　（秋上）

をとこのかれくにみえけれはたふのみねのふもとにわたるとてふるさとにかき

つけゝる　扇なかしの源中納言女

D 思ひあまり深き山へに入ぬともありやなしやと誰かとふへき　（雑三）

これらの歌は延宝板の「扇流し」には全く見えず、ABの二首は、その詞書の如き記事もない。またDも、これに該当する記事は見当らないが、ただ延宝板における、少将が大納言の邸に逗留したことを恨んで、白川の姫が家を出て山里に身を隠したという話と、漠然とは符合する。従って、「若草物語」と「世をうぢ川」との関係の如く、明確な証拠は認め得ないのであるが、題名の一致という事実が、この場合はかなり重い意味をもってくる。延宝板の題名は少将が失踪した白川の姫の行方を尋ねて都のまわりを廻り歩く中、川上から扇の流れてきたのを拾う。見ると自分の昔手馴れた扇で、それには姫の手で歌が書きつけてあった。それがよすがとなって、姫を尋ね出すという、この物語の最も特徴的な趣向に由来している。この点を中野氏は、

風葉の記事のみでは、吾々は「あふぎながし」の題名の解釈すら困難である。そしてこれは、実に近古小説によって明快に説明されるのだ。風葉の歌が今本に一致せぬからと言って、今本が風葉のそれと無関係だと断定する

事は、取るに足らぬ説である。歌は物語全体から見れば、ほんの一少部分に過ぎない。まして、物語の筋のみを喜ぶ近古小説作者が、忠実な改竄をする筈はない。その読者が徳川初期の婦女子であるに於てをやである。

と考えられたのである。つまり延宝板の内容を以て、風葉集の「扇ながし」の題名の由来が解けるという逆の論理によって、両者を関係づけられているのであるが、題名の特殊性がこの推定に多分の可能性を与えていると言うことが出来よう。

この「扇流し」は、「しぐれ」以下の四篇と男女の主人公の境遇をはじめ、大筋はよく似ているが、（男は大臣の御子四位の少将、女は白川の中納言の姫で幼少にして父母を失なう）部分的な趣向には、(1)少将が中秋の月にあこがれ歩く中、白川の辺で荒れ果てた家の内に琴を引く姫をかいまみ、乳母を説き伏せて迎えとる。(2)少将は姫を熱愛の余り出仕を怠る。帝は物忌の相伴に度々少将を召し、終には少将の里は内裏に遠ければとて、命じて大納言の家に宿らせる。少将はその姫君と一夜の契りを交し、大納言はこれを喜んで少将をもてなす。白川の姫は少将を恨み山里に籠る。(3)前述の如く、少将と白川の姫とは、扇流しの趣向によって再会を遂げる、(4)少将に一夜の契りにて捨てられた大納言の姫は世をはかなみ、聖の説法も甲斐なく思い死にをする、の如き特徴が挙げられる。

(1)は源氏物語の影響を受ける擬古物語にしばしば見られる趣向である。(2)は、愛し合う男女の仲を割いたのが、男の父でなくして、大納言の家に一時の宿りを命じた帝と、大納言の姫に自ら言い寄った少将自身とが原因となった如くに書かれていて、他の四篇と最も異なる所である。この部分の叙述には納得のゆかない所があり、自然さを欠く感じが残るが、このように愛する女がありながら、ふとしたことから他の女と過ちを犯すのは、王朝物語の系統の作品には度々見られる所であるから、これは改作者の力量が劣っていたために、少将の心理描写が不充分となったことに

よって生じた不自然さかとも考えられ、かえって原作の筋は残されているのかもしれない。(3)において、男女主人公が再会をなし幸福な生活に入る点は、「若草」B類本や「桜の中将」A類本と似ている。しかしこの「扇流し」の場合は、そこに神仏の利生という契機が全く無い。「扇流し」が同名の散佚物語の改作であるという前提に立っても、扇流しという趣向から見て、「若草」や「桜の中将」の異本の如き正反対の改作ではなかったと思われ、この二篇の異本と形式的には似ていても、質的には異なるものと思われる。(4)は四篇には見られない記事であるが、大納言の姫に対して聖が長々と説法をするくだりには、仮名草子風の教訓臭が感じられる。恐らく改作の際の増補ではなかろうか。以上を綜合すると、延宝板「扇流し」は、筋立の上では、この類の作品群の中にあっては、鎌倉期擬古物語の俤を最もよく伝えているのではないかと想像されるのである。

かくの如く、「しぐれ」以下の類型を同じくする室町物語が、前代の物語を承けついでいることは明らかなのであるが、それでは、これらが前代の物語をどのように改作したのかという点になると、片方がいずれも散佚しているために、直接にまた具体的に比較することが出来ない。ところがここに、現存物語の中に両者を結ぶ資料となし得るものが見出される。それは初めにその名を挙げた「忍音物語」である。既述の如く現存「忍音」もまた、風葉集以前の同名の物語の改作であろうとされ、その成立時期も、黒川春村のように文明頃にまで引き下げる説もあるので（古物語類字鈔）、その意味では「しぐれ」などと余り変らないのであるが、文体の相違、伝本の性質等から、これを鎌倉期の物語の側において、室町物語との比較の資料とすることが許されはしないかと考えるのである。

四

「忍音」と、成立時期、内容、文体、伝本の性質等において類似した作品に「兵部卿物語」もあるが、ここで特に「忍音」を取り上げたのは、この物語の構想が「しぐれ」と甚だよく似ているからである。「しぐれ」の、同類型の他の諸篇に比しての最大の特徴が、夫の家を逐われた後の女主人公の辿る運命であることは既に述べた。「忍音」もまた、舅に夫少将を奪われ、典侍の許に身を寄せた故中務宮の姫は、入内させられて忍音内侍と呼ばれ、少将の妹桐壺の女御を超えて帝の寵を一身にあつめる。やがて東宮を生み奉り承香殿女御と呼ばれて栄華を極める。一方これを知った少将は絶望して横川に赴き出家するという筋で、「しぐれ」と全く同じである。このことは、両者が直接の関係、すなわち「しぐれ」は「忍音」の改作ではないかとも考えさせる。両者の歌の中で、ただ一首だけではあるが、男主人公が父親同士で約束を交した権家の姫の許へ心ならず出で立つ場面に、作者に男女の違いはあるけれども、

あられふりさゆるしも夜におきわかれこよひはかりやかきりなるらん　（忍音の姫君）

あられふりしもさゆる夜にをきわかれ身にたましいもなく〳〵そ行　（しぐれの中将）

の如く類歌の見出されることも、右の推測を助ける。両者の筋立の上の最も大きな違いは、発端の男女主人公の邂逅の仕方である。「忍音」は、少将が嵯峨の紅葉狩の帰途、由ある小柴垣の内に母の尼君と暮す姫君を見出すのであって、「扇流し」と同じく源氏物語などの影響が顕著に認められる。それに対して「しぐれ」は、清水を舞台としてめぐり逢いがなされ、発端から清水の利生譚として語ろうとする意図を見せている。しかし、この二篇において男女主人公の辿った道は、利生譚の目的には必ずしもふさわしいものとは言えない。そこで「しぐれ」の

ひめきみのくわほうも、中将殿のまことの道に入給ふも、みなこれ、くわんおんの御りしやうなり

という結語が、無理なこじつけと感じられるのである。これは「忍音物語」をその儘清水の利生譚に仕立てた所から生じた不合理であるのかもしれない。これも一つの証拠となり得るであろう。

しかし一方では、このように現存「忍音」と「時雨」とを直接結びつけることには疑問も存する。一つは、中野氏が指摘された風葉集の「恋に身かふる」との関係である。もしこの物語が「しぐれ」の原作であるならば、「しぐれ」の発端は、既に現存「忍音」の成立以前にこの形をとっていたことになる。今一つは、現存「忍音」と「しぐれ」との歌を較べると、前者が十九首、後者が三十五首（「しぐれ」の原型と推定されるA類本による）であって、「忍音」の方が大分少ない。また現存「忍音」が風葉集以前の「古忍音」を改作するに当って、歌をかなり省略したことは、風葉集所採の三首の歌が現存本に悉く無いことから明らかであるが、その風葉集の三首の中、

ほいとけてのちおなし人のもとにさしおかせける　　しのひねの中将

哀とも思ひおこせよしら雲のたなひく山に跡たえぬ共

の歌は、「しぐれ」の該当場面に

きみゆへに山のおくには入ぬともあわれとたにもおもひをこせし

という、かなり似通った歌が見出される。「しぐれ」が現存「忍音」の改作であるとすれば、この時代の改作作品においては物語中の和歌が省略されるという一般的傾向に反するし、また「しぐれ」に、現存「忍音」に無く「古忍音」に存する歌の類歌が見られるということは、「しぐれ」は「古忍音」から出て、現存「忍音」とは別途の道を辿って成立したものかもしれないという想像を成り立たしめる。この二点を綜合すると、

古忍音――→現存忍音――→しぐれ

という承接関係を無条件に認めることは出来ず、あるいは

古忍音――――→現存忍音

恋に身かふる――→しぐれ

といった関係であったかもしれないのである。

こうして、現存「忍音」と「しぐれ」とは、親子関係にあるのか、あるいはいわば従兄弟関係にあるのか、明確な断定はなし得ないのであるが、とにかく、ここで問題としている同類型の物語群中にあって、鎌倉期擬古物語と室町物語とを比較するのに、この二篇以上に適切で具体性をもった資料は見出し得ないのである。

「忍音」に見られる「しぐれ」との筋立の上の主な相違は、(1)女主人公中務宮の姫には母は在世し、尼となって共に暮していること、(2)前述した男女主人公の邂逅の仕方、(3)少将が中務宮の姫を自邸へ迎えず、乳母子の左中弁の家に置いて通うこと、(4)少将と姫の間に若君が生れること、(5)父の命に背き難く左大将家に赴いた少将が、宮中で七日の物忌に籠っている間を利用して、父の内大臣は少将の心変りと偽り、姫に家を出るように仕向けること、等である。

(1)(2)には、市古氏が指摘された如く、源氏物語の若紫の巻などの影響が明らかに認められ、(3)も、直接自邸へ迎え取る「しぐれ」などよりも、王朝の公家の生活様式が反映している。すなわち、この辺の叙述には、「しぐれ」に較べて、王朝の恋愛物語風の色彩が濃厚に見られる。(4)は、「しぐれ」では子の出生のことが記されないが、「若草」

「桜の中将」「志賀物語」にはそれがあり、その子が後に立身出世したことが叙べられているのも「忍音」と同じである。前述の如く、この型の物語にあっては、男女の間に子のあった方が、別離の悲哀感が深まるし、その子の成長後の栄達を語ることによって、主人公の遁世や死亡という結末に一種の救いが与えられるという点もあるので、恐らくこちらの方が通例の型で、「しぐれ」は省略したものなのであろう。また(5)は、「しぐれ」では左大将方の呪詛によって、中将が里の姫君のことを忘れてしまうという趣向を構え、中将が姫の許へ音信も出来なくなったことの理由を、超自然の力を借りて説明しているが、そこには室町的な特徴がはっきりと現れている。

次に趣向は全く同じであるが、入内した姫が帝の寵愛を一身に集め、その結果もとの夫の妹の女御が立場を失なったことについて、「しぐれ」は中将に、

なさけなく思ひ出されすは(学)(多)おひいたされすは、りいけんてん(学)(多)れいけいてんも中そらにはよもならし、我も物はおもはし、あはれうたてかりける

ふたりの親かなと、こともはみなやみにまよふ、我御身もよきこゝろは(学)(多)よきこゝろにしたまはし　（永正本）

と語らせていて、父左大臣の姫に対する仕打の報いとする意識がはっきり出ているのに対して、「忍音」には、

中なこんの御いもうと、きりつほの御かたこそ、御身のいきをいといひ、うへのおほえならひなかりしかは、わか宮もいてきたまはゝ、うたかいなきささきにこそたちたまはんするに、よ人もおもひ、われもおほえつるに、おほへぬ人にはかにいてきて、かくをされぬることゝ、くちをしくおほしわひたる　（桂宮本叢書本）

とあるだけで、そういう教訓的言辞はあらわれていない。

右の如き種々の相違は、市古氏の、

さて以上あげたやうな「忍音物語」系の作品は後のものになるに従ひ、勧善懲悪の意図が強く押し出され、綿綿

たる思慕の情を語るといったていの冗長な感傷性が、もしくは心理描写が稀薄になってゆくやうに思はれる

という言葉がそのまま当てはまるのであるが、それと共に、この二つの作品は、先に触れた如く、文体の面においてかなり顕著な差別を見せている。

その頃時のいうそくとのゝしられ給ひしは、うちのおほいとのゝ四位の小将とかや、まことにひかりかゝやきたまふ御さまは、かつみるくとあかぬ心ちするに、ましてほのかにもみたてまつる人の、あちきなき思ひのたねとなるはことはりそかし、殿上のかなしとおほしたる御けしき、いつれのきんたちよりもすくれてかしつききこえ給ふ、御いもうとは、春宮の女御きりつほにてをはします、とりくにいとはなやかなる御おほゑ、やむことなき御さまともなり

（忍音物語）

さ大しん殿ときこゑし人、きんたち二人おはしけり、一人はひめきみ、よにすくれ給ひけれは、うちへまいらせんとてかしつき給ふところに、にわかにかせのこゝちいてきたまひけれは、さとにていのらむよりもとて、きよ水に御こもりありけり

（しぐれ）

右は両者の巻頭の一節であるが、これだけを見ても文体の相違を明らかに感ずることが出来よう。「忍音」が王朝物語風の擬古文体であるのに対して（部分的に新しい語法が混入していることは黒川春村も指摘しているが）、「しぐれ」は文脈が遙かに平易で、軍記物や説話集の、いわゆる和漢混淆文の流れを引いている。

更に語彙の上から両者を較べてみると、まず敬語の動詞あるいは補助動詞としての「おはす」「おはします」「きこゆ」「たてまつる」「たまふ」（下二段活用形）「はべり」の使用度に著しい違いがある。すなわち、

忍音	しぐれ	忍音	しぐれ
おはす（動詞） 一〇二例	二二例	おはす（助動） 一三例	一例
おはします（動詞） 二七例	一例	おはします（助動） 一〇例	四例
きこゆ（動詞） 三八例	七例	きこゆ（助動） 一四例	なし
たてまつる（助動） 七四例	一一例	たまふ（下二助動） 五例	なし
はべり（動詞） 七〇例	なし	はべり（助動） 三五例	なし

の如くである。これは「忍音」の総字数が約四万二千字、「しぐれ」が約三万五千字（「忍音」は桂宮本叢書本「しぐれ」は永正本によったが、両本とも漢字を交えることが少ないので、概略の長さを計るには差支えないと思う）という違いを考慮に入れても、なお甚だしい相違といわねばならない。そして、こうした敬語の動詞、補助動詞が王朝物語文の大きな特徴の一つであることを思えば、右の数字は両者の文体の性格の違いを明らかに示していることが分かるであろう。右の場合とは逆に、同じく敬語の補助動詞として使われている「まゐらす」は、「しぐれ」に四七例見られるのに対し、「忍音」には一例もない。補助動詞「まゐらす」は平安時代から用例は見られるが、源氏物語には一例しかなく（吉沢義則氏「対校源氏物語用語索引」）、鎌倉期の軍記物や説話集において一般化してきたことに照すと、これも同じ事実を示す証拠となろう。その外、「忍音」には助動詞「まほし」が九例、間投助詞「を」が一一例あるに対して、「しぐれ」にはどちらも一例も見られない。次に形容詞においても、

忍音	しぐれ	忍音	しぐれ
あぢきなし 六例	なし	いふせし 四例	なし
しるし 八例	なし		

びんなし　一一例　一例　めづらし　一一例　一例　わりなし　七例　なし

のように、顕著な違いのある語が見出される。これらの形容詞も王朝物語にあっては、使用頻度の多い語である。

「忍音」と「しぐれ」とが、ほとんど内容を同じくしながら、右の如くに文体や用語が著しく異なるのは何故であろうか。作者の素姓や教養の違いということがまず考えられるが、それと共に享受者層の変化がその大きな原因ではなかったか。すなわち、「しぐれ」の読者は、「忍音」のような王朝物語風の擬古文にはついてゆけなかった階層の人々であったのであろう。室町期に入って諸国の豪族などが上洛し、都会の文化に触れる機会が多くなったことは常識であるが、そうした新興階級の人々、なかでも婦女子の、伝統的な文化に対するあこがれの一つに、公家階級の間で長い歴史をもっていた擬古物語があったであろうことは想像せられる。しかし、擬古物語をそのままの形では読みこなし得なかったことが、「しぐれ」の如き作品を生み出した契機ではなかったかと推測されるのである。右の形容詞の例のように、我々が擬古文の解釈に際して、常に惑いを感ずる如き語が、「しぐれ」において使われなくなっているという事実は、その間の事情を明瞭に物語っていると言えよう。

五

擬古物語と、それを改作した室町物語との違いは、前項における「忍音」と「しぐれ」との比較によって、ほぼ察せられるであろう。それらの室町物語の中、「しぐれ」「若草」「扇流し」の三篇は、夫々に別の源流が擬古物語の中に求められる所から、これに「桜の中将」「志賀物語」を加えた一類の作品に、成立の先後関係を求めることは困難である。ただ室町物語に著しい教訓性、宗教性という点から見れば、「扇流し」「志賀物語」に最もそれが薄く、

「しぐれ」「桜の中将」「若草」の順に濃厚となっていることが認められよう。

ところで、これら擬古物語の改作として成立した諸篇は、「しぐれ」や「若草」の板本が示す如く、江戸時代に入っても、享保の頃までその命脈を保っていたのであるが、一方これらの物語は、更に室町的な特色を顕著にした作品を成立せしめた。その一つは「くるま僧」（松姫物語）で、左の諸本が伝存する。

第一種

東洋大学図書館蔵大永六年写絵巻　一軸

梨色地織文表紙、紙幅一六糎。表紙左肩に金紙の題簽を貼るが書名なし。内題なし。見返し香色地に金切箔散し。本文字面高さ約一三・五糎。各行十五字内外。絵十五図。奥書「大永六年丙戌八月廿五日／尋貞」。絵は初期の奈良絵風で古朴の趣がある。正しく大永頃の写しであろう。本書は「松姫物語」と題され、岩波文庫「続お伽草子」に収められている。

第二種

京都大学国文学研究室蔵〔江戸前期〕写本　一冊

本書は昭和十六年に藤井乙男博士が翻刻された。（京都大学刊「影印車僧草子」解説篇所収）その解題によれば、牡丹鳳凰模様に渋霞引表紙（五・五×八・一寸）。表紙中央に「くるま僧」と墨書す。内題なし。二十七丁、毎半葉十五行、各行十五字内外。

御巫清男氏旧蔵〔江戸前期〕写本　二冊

同じく藤井博士の解題によれば、紺地金泥草花模様表紙（五・四×七・六寸）。表紙中央に「くるまそう 上（下）」と墨書した紅色題簽。（上）二十一丁（下）二十三丁、毎半葉十二行、各行十五字内外。奈良絵本の絵抜本で十四図の挿絵の跡がある。京大本と本書との本文は全く同系で、語句の末に小異がある。藤井博士が前掲書において本書により校異を注された。

この「くるま僧」は、同名の謡曲で知られる車僧の前半生を描いた作品である。息子が寄るべない女を娶ったことに不賛成な両親が、男の清水参籠の留守に女を誘い出して人手にかけさせる。男は探しあぐねた挙句、女の亡霊に逢って両親の奸策を聞かされ、それを機縁に出家するという内容で、これと擬古物語系統の室町物語との関係は、市古氏が、

このやうに女を惨殺するといふやうな事件は、公家小説にあっては未だ考へられなかった処であって、ここに至れば同じく悲恋遁世談ではあっても、擬古物語とは全く基調を異にする。かつ男女相思の生活の破局を招く第一歩も、等しく親の反対ではありながら、男（主人公）が他の女といやいやながら結婚させられるといふ件は描かれないのである。さらには愛人の非業の死に遭って発心するのは、「若草物語」等も同様であるが、本作にあっては、「三人法師」の第一話と同じく、これを善知識とし、畢竟、神仏の衆生済度の方便だと考へ、未練執著を残さない。つまり公家小説で物語の末に形式的に附加せられたところが、物語の主眼に据ゑられてゐる。発心遁世の由来を語るところに焦点がおかれてゐるのであって、同じく悲恋遁世といふものの、作者の心構へ、執筆態度の根本に差異が存する事に著目しなければならない。

（中世小説の研究八三頁）

と要約せられているが、なお右の二種の伝本に即して考察した所をつけ加えてみたい。

第一種本と第二種本とは、詞章のほとんど同じ部分がかなり多いにもかかわらず、一方に次のようなプロットの相違が見られる。

(1)第一種本は、男主人公を中納言しけたゝの息中将、女主人公を山科の里の左衛門尉の女、松姫とするが、第二種本は、男は「九えの中にかくれなきありさまにてすみける人」、女はただ女房と記すのみで、共に素姓を具体的に語らない。

(2)第二種本は、花見の折に美女を見て想いを懸け、後に女の召使に逢って文を託し、契りを結ぶに至る。第一種本は、花見のことがなく、直ちに中将と松姫が玉章を交すことから始まる。

(3)女の行方を失なった時、第二種本では、男が清水へ詣でて祈念すると、「御みのたづね給ふ女はうの事ならは、たゝよくこゝろのをよはんほとたつね給へ、あひみる事もあるへきなり」との示現を蒙る記事があるが、第一種本はこれを欠き、直ちに廻国の旅に出る。

(4)男が女の行方を尋ね得ずして京へ戻ってから、第一種本は、黄昏時に門に立っていると、かの女の亡霊が通りかゝって、男を人気のない野原へ導き、一部始終を語るというのが、第二種本では、北野天神に参籠して祈請すると、夢幻の中に女が現れて親の奸策を語り、なおくわしくは清水の老僧に問えとて消え失せる。老僧に女の殺された場所へ導かれて最後の様を聞くという趣向になっている。

第二種本の方が総じて趣向上の潤色が多く、特に(3)(4)の如く、清水霊験譚として仕立てられているのが特徴である。さらに右の(2)(3)(4)の各場面においては、詞章も第二種本の方が文飾が著しい。巻頭の花見の場面の一節を掲げて

みる。

むかしなかころのことにやありけむ、みやこにくるまそうと申ほつしんしやのありけるゆらひをくわしくたつぬれは、九えの中にかくれなきありさまにてすみける人なり、さうねんのころをひより、ひくわらくようをくわんして、さためなき世のいとはしかりけれとも、ひたそらにすていつるまてはなかりき、廿あまりのころ、はつ花さくらやう〳〵かつさきて、人のこゝろもそのこすへとなく、いそかれけれは、やうめいの花のあたりにたちすみて、ゆふはゑのけしきをなかむるに、えたたをやかにみたれて、まことにたをやかなる、なにおふ花のいとさくらかなと、こゝろことはもおよはれす、きせんなんによくんしゆし、にはにもおをくしうまんせり、日も入あひのかねのねも、ゆふへをつけて、しきりにおとつれ給ふは、見はてぬ花なれはわれもわかれとなけかれて、をの〳〵かへりける、そのなかにやさしき女はう、花のなこりをこひつゝ、いへちをわすれて、かへりかねて候けるを、はした物の申けるは、けふの日もくれはとり、あやなく花におもひつゝ、木のえたふしのかりまくら、あたなるなをもたちぬへし、はや〳〵とく〳〵といさめけれは、そらには人もなかき日の、かけさへ見えぬさかひなれは、うちかけきたるねりぬきをおしのけて、花を見やりたるかほはせの、にほひようたへに、かみのかゝりなひやかに、まことの花かとおほゆるほとのすかたなり　（京大本）

この文には仮名草子風の表現の所が見られる。たとえば傍線を附した句の如きで、こうした言い方は室町物語的ではない。また、この場面全体の雰囲気も、たとえば「恨の介」の巻頭の場面などに似通った所があるように感じられる。この部分の後の、男の求愛に対して女が返歌をし、遂に二人が結ばれる所の叙述を第一種本と対比してみよう。

第一種本

思ひきやなかめし花の比すきて、雲のまよひののこるへしとは

第二種本

おもひきやなかめし花のころすきて、くものまよひののこるへしとは

とかきてとらせけれは、うれしくてもちて行けり、をとこひらき見てこそ、すこしむねの思ひのひまともなりにける、かくてもわするへき恋ちならねは、つゐにかのをんなにかたらひより、文なとつかはしける、はやちつかとも成ぬへし、されはをんなも、よろつ打時雨たる躰にてあかしくらしけり、是も今は隙をもとむる心なりけれは、ある時さとへなといひて、をさゝの枕の一ふしをならへけれは、あはぬむかしの思ひは数にもあらさりけり、かくて、たかひの心うちとけて、逢よのかすもかさなり、ひよくれんりのちきりあさからすして、我やとへそむかへをきける

とかきてむすひ、なけいてさせ給ひ、とるてもうれしくて、いそきもちてゆきたるを、ひらきてみて、ことさらにたへぬおもひはふかくさの、つゆともきえはなきあとの、あわれとたれかゆふけふり、たちゐもさらにおほえす、おもひこかれてかへりけり、さてもわすれぬこゝろを、みちのしるへとして、つゐにかのはしたものにかたりより、文なんとかよわしけり、女はうもはやさそふみつあらはとおもひなして、たまたれのひまをとむるさまになりけれは、あるときさとへなんといゝなしていてけるに、くさまくらのかりむしろ、心をまよはすほともなく、あふ人からのみしかよは、ときしもあきといひかたし、をの〳〵かきぬ〳〵ぬきわかれけるなみたのそて、やるかたそおほえけり、あはさりしさきのおもひはことのかすならす、たかひの心まよひつゝ、あふよのかすもかさなれは、ひよくれんりのちきりとなり、わかやとへむかへてそをきたりけり

第二種本の方が、引歌・懸詞などの修辞上の技巧がこらされていることが認められるであろう。これは仮名草子に多い知識的文飾に通ずるものである。こうしてみると、第一種本の方が素朴な原態ではないかと思われる。ただこの巻頭の場面において、第二種本は女の返歌の前に、男の贈った歌が二首記されているのに対して、第一種本は、

中将との御しのひにて、御玉つさをたひ〳〵をくり給ふといへとも、さらに御返事もなきにより、又あるたより

もとめたまひ、御たまつさををくりたまふ

とだけあって、歌を載せていない。さらに、その女の返した前掲例文の「思ひきや」の歌は、第二種本の如く、男女が花見の折にめぐり逢ったという前提のあった方が適切である。すなわち第一種本は花見の場面を省略したのではないかという疑問が生じるのであって、一概には言い切れないのであるが、やはり全体としては、第二種本を以て第一種本の改作と考える方が自然であるし、第一種本の伝本の方が書写が遙かに古いことも、その推定を助けるであろう。

ところでこの作品は、擬古物語の中の嫁苛め型の話が「しぐれ」等の室町物語に承けつがれて広く流布していたのを利用して、車僧の発心遁世の由来を語る物語に仕立てたのであろう。しかし、第一種本は男主人公を中納言の御子中将と言いながら、公家らしい生活は全く描かれていないし、第二種本になると、前掲の逢瀬の場面に見られるように、男女ともに初期仮名草子の世界に登場してくる人間像に近くなっている。また第二種本が宗教的霊験譚を加えている点は、「若草」「桜の中将」の異本と似ているが、それが物語をハッピーエンドに導く契機としてでなく、主人公の出家発心の機縁として語られている所に相違がある。ここに、室町期から江戸前期に亘って長く享受されていた「しぐれ」一類の作品に対して、別の方向へ歩み出した姿を見ることが出来よう。

六

「くるま僧」と相似た所もありながら、また別の特徴をもつものに「千じゆ女」あるいは「せったい」と題する物語が左の如く伝存する。

(イ) 慶応義塾図書館蔵〔室町末〕写本　一冊

本文共紙打曇表紙（二五×一八・八糎）。表紙中央に「千しゆ女」の外題、但し後筆と思われる。内題なし。本文字面高さ約二二糎。二十八丁、毎半葉十行、各行十八字内外。「青谿書屋」「探花文庫」の印記。本書は筆者が「文学語学」第二八号に翻刻した。

(ロ) 慶応義塾図書館蔵〔江戸初〕写本　一帖

後補濃紺地錦繡裂表紙（二四・三×一七・五糎）。見返し金切箔散し。料紙鳥の子、綴葉装両面書。外題内題共になし。本文字面高さ約一九・五糎。四十一丁、毎半葉八行、各行十七字内外。本書には烏丸光広筆とする極め札が二枚附してある。これは信じ難いが筆蹟は流麗で、書写の時代も光広の頃をさして隔たらないと思われる。

(ハ) 群馬大学図書館蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　二冊

本書は有川美亀男氏が「群馬大学紀要人文科学篇」第十巻九号に翻刻紹介された。その解題によれば、横本、（上）二十丁（下）二十丁。題簽、表紙中央に「せつたい上（下）」とあり。内題なし。挿絵、上下各五図。

右三本は物語の筋には相違する所なく、本文も叙述の運びはほとんど同じであるが、語句の出入異同は夫々に多い。巻頭の一節を対比すると、

イ　本

そも〳〵かゝのくにいまつと申ところにうとくの人あり、御なをはいま

ロ　本

むかしかゝの国いまつと申所にうとくの人おはしける、御なをはいまつ

ハ　本

そも〳〵かゝの国にいまつのさへもん家次と申て、世に聞えたるうとく

つのしんさへもんいゑつくと申けるしちんまんほうをいへにみち、きん〳〵をやのうちにつみけり、しかりといへとも、なんしにてもおんなにても、子といふもの一人もなし、あるときいへつく、きたのかたにおほせけるは、かやうに□いくわにほこり候へとも、つら〳〵物をあん□るに、このよはわつかのかりのやと、らいせ□□ついのすみかなり、らうせうふちやうの□□ひ、あすをもしらぬみのこせを、とふへき□の一人もなき事のかなしさとて、なけかせ給ふ

のしんさへもんのせういゑつくとそ申たてまつりけり、しつちんまんほうきん〳〵をいゑのうちにつめり、しかりとは申せとも、せんしやうのしゆくしうにて、なんしにても、女しにても、子といふ物一人ももち給はす、きたのかたにむかひての給ひけるは、よく〳〵物をあんするに、いまのゑいくわ何ならすわれこの世をひきかへて、ひんの身とは成ぬとも、一人の子ありとおもはゝ、いかにうれしく候はんと、の給へは

の人おはしける、四方に四万のくらを立、なにゝつけてもとほしき事なし、しかりといへ共、いかなるせんせのむくひにや、子と云もの一人もなし、あるときさへもん殿、きたのかたに仰せけるは、かやうに栄花にほこるといへ共、この世はわつかゆめまほろしのあひたなり、来世はつゐのすみかなり、いうしやうふちやうのならひ、あすをもしらぬ露の身に、後をとふへき子もなし、あちきなの事やとて、なけかせ給ふ

の如くで、全篇に亘ってこの程度の異同が見られる。また物語中の歌は(イ)が十首、(ロ)六首、(ハ)八首である。これらの語句の異同をこまかに調べると、(ロ)本が(イ)本に近い所と、(ハ)本が(イ)本に近い所とが見られるが、(ロ)(ハ)の二本が一致して、(イ)本のみが異なるという所は少ない。従って本文としても、(イ)本が最も古く、(ロ)(ハ)は共に(イ)本から岐れ出たものということが出来そうである。なお、(ロ)本の本文は他の二本に較べてやや文飾の多い特徴が見られる。たとえば、清水に祈請の験があって女子が生れた時の、

それ、むかしのやうきひ、りふしん、そとおりひめとやらんも、このひめきみにはよもまさしとそおほえける、けいてんのみ

にあまり、しんしよくこゝにしうまんして、こかねのいさこみちみてり、はくしをのつからたえて、はんりよこゝろにつちをふむ事、さらになし、しうあんのうちにあいせられ、はうもんのゆくゑさらになし、かのにうはうたちをそへさせ給ひて、いつきかしつきたまふ事、かきりなし

の如きで、傍線を附した部分は(イ)(ハ)には欠けている。誤写があるらしく、意味を判じかねる所があるが、初の「けいてんのみにあまり」は、「玉造小町壮衰書」から採った謡曲「卒都婆小町」の「羅綾の衣多うして、桂殿の間に余りしぞかし」と同類の句であろう。そうした知識的な文句を増補したものと思われる。また、脱文か故意に省いたのか明らかでないが、(ロ)には、巻末の千手女が蘇生した後に冥土での出来事を物語る条が欠けている。

さて、この物語の筋のあらましは次のようである。

加賀国今津の新左衛門家次は、清水観音に申子をして女子を授かり、千手御前と名づける。千手は幼少にして母を失ない、その後継母に憎まれて故郷を出奔し京へ上る。時に都に伏見の中将とて、父に後れ、母のみにて過す人があった。妻を得んために清水に祈請した所、示現あって千手に引き合わされる。伴ない帰って契りを結び、二人の若君を儲ける。中将の母は寄るべない妻を迎えたことを疎み、中将の清水参籠中に千手を逐う。千手は再び故郷へと志し、西近江路を辿って敦賀に着き、物語接待の宿に泊る。中将も千手の跡を追って敦賀に至り、同じ宿をとった所、そこにて千手の死を聞く。宿の主は、これも千手の行方を尋ねていた父新左衛門で、共に悲しんでいると、千手は清水観音の功力で蘇り、中将共々都へ上って末永く栄えた。

「しぐれ」などの諸篇と相似た構想をもち、男主人公も公家でありながら、公家らしい生活が全く描かれていないこと、政略結婚の如きプロットが設けられていないことは「くるま僧」と同じであるが、徹頭徹尾清水観音の利生譚

に終始し、しかも女主人公の蘇生という結末に導かれている点は、「若草」「桜の中将」の異本に通ずる。しかし一方では、この物語特有の著しい特徴も見られる。最も大きな点は、物語の舞台の中心が都を離れた地方になっていることである。女主人公を加賀国の長者の娘とし、継子苛めの趣向を設けて、その女を一度都へ上せながら、すぐにまた場面を敦賀へと移している。何故このような筋を構えたのか。私は前掲慶応本の紹介論稿において、以下のような推測を立ててみた。

「しぐれ」系統の諸篇は宗教的な色彩を次第に強めはしながらも、なお都の上層階級（旧来の公家階級ばかりでなく、この時代の新興階級をも含めて）の読者を対象とした娯楽的な読物として行なわれていたものであるが、そのような物語が清水寺関係の布教者の手にかかって、観音信仰の唱導の材料として利用され、地方へ流伝していった過程において成立したのがこの「千手女」ではないか。そして、主人公を加賀国の人間に仕立てたのは、この物語が北国の人々を対象として語られた故で、聴手に親近感を与えるための趣向ではないか。この物語の中に、千手の父新左衛門が娘の行方を尋ねる手がかりを得るために物語接待の宿なるものを設けて、宿泊の旅人に物語を語らせたということが出てくるが、この物語接待は単なる作り事ではなく、民間における物語享受の場として実際にあったことが考えられ、更に言えば、この「千手女」という物語の成立の背景をも暗示するのではなかろうか。（くわしくは前掲拙稿参照）

以上は作品の内部徴証からする全くの想像で、確たる傍証は何もない。そこで、この物語の地理的記述について見てみよう。まず女主人公の出身地を加賀国の今津とするが、加賀には今津という地名は見当らない。ところが大島建彦氏から、これは近江国の今津と関係があるのではないかという御教示を頂いた。この今津は琵琶湖の西北岸にあり、

越前路と若狭路とが交会する西近江路の要所である。そして、吉田東吾氏の「大日本地名辞書」を見ると、「三州志云」として、「文禄二年、今津をば豊臣氏より前田家へ賜る」とあり、以後加州金沢藩の領邑であったことが記されている。ここにはからずも、加賀と今津との繋がりが見出される。すなわち前田家の所領であった故に、加賀国の今津という言い方をしたのかもしれないと想像出来なくもないのである。次に、千手が伏見の中将の許を逐われて旅に出た所に、左の道行文がある。

さても、うらみていてゝふるさとの、ちゝのゆくゑのこいしさに、かゝのくにとこゝろさし、かいたうは人めもしけかりなんとおほしめし、にしあふみにかゝり、七のやしろをふしをかみ、いつしかならはせたまわぬたひなれは、御あしよりなかるゝちはくれないのことく、そてにあまるゝなみたは、たたしらたまにことならす、りうせんのなみた、みねよりもふくあらしに、まのゝいりゑのなみたち、うきからさきのいそかれす、あとのみやこのこいしきに、おもかけのこすかゝみやま、おうつかいつのうらにつき、さよのなかやまうちすきて、ゑちせんのくにつるかにつきたまい……（イ本）

ここにもまた西近江路が出てくる。ところで、右の道行の中に「かいたうは人めもしけかりなんとおほしめし、にしあふみにかゝり」とある句について、有川美亀男氏は群馬大学蔵本の解説において、

この「かい道」は何をさしているのかはっきりしない。おそらく「海道記」の海道と同じく東海道をさし、それも伏見から西近江へ抜ける際にどうしても通らなければならない逢坂の関近辺の東海道を言ったものであろう。「東海道は人目につきやすいので、避けるようにしてそこを通りすぎて西近江にさしかかり」という意味にとりたい。ただし中世末葉から琵琶湖東側に北国へ通ずる表街道が発達し、西近江から愛発山越えをするコースが衰えたという事実があるので（「日本交通史論」前編所収、藤田明氏「愛発関趾」の説による）、万一作者がそれを

念頭に置いていたとすると、この作品の成立した時代が暗示されることにもなろうかと思う。

と、興味ある説を述べられている。私はこの「かいたう」は、有川氏の挙げられた二つの見方の中の後者、すなわち表街道としての東近江路をさすとする方が、右の道行文の文脈からして自然であろうと考える。前述の今津が近江国のそれを言っているものとすれば、この物語の成立は、今津が前田家の所領となった文禄二年以後となり、東近江路が発達した時期とも符合する。それはさておいて、この物語の地理的記述は、右の如くに西近江路に関するもので占められていると言うことが出来る。このことは、西近江路の旅を実際に経験していた人が、この物語の成立に参与していたとする想像が、あながちに附会とばかりは言えないことを証し得るのではなかろうか。

前述の如く、この物語の成立を文禄二年以後と推定すると、(イ)本は物語の成立時期に極めて近い頃の書写と思われるが、この本は装幀も粗末で、筆蹟も正統の書風ではない。また本文にも誤脱が多く、特に「かせつく」(かしづく)「おそあひもの」(おさあいもの)といった訛言かと考えられる語が見出される。このことによって、この本が旅の語部ともいうべき者の口語りの詞章をその儘伝えているとする如きは早計であろうが、前記の想像と矛盾はしない。但し(ロ)(ハ)の二本は体裁も御伽草子的形態をもっており、特に(ロ)本は前掲例文のように、知識的な文飾が施されている。そこで、この物語の原態は、地方の人々を対象とした、観音信仰宣布のために利用された口語りの物語であったとしても、それは再び娯楽的な読物として、「しぐれ」の類と同じ草子文学に仕立てられたものと考えられる。

「千手女」あるいは「せつたい」と題する作品の内容上の特徴と伝本の性質に即して、右のような想像をめぐらしてみた。これは文字通りの仮説に過ぎないが、「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」あるいは「扇流し」の諸篇と読み較べてみる時、この作品により庶民的な臭いの感じられることは事実であろう。鎌倉期擬古物語の改作と

して成立した一類型の作品群の中に、「くるま僧」と並んで「千手女」の如き作品の派生が見られることは、室町物語の展開の相を具体的に探る上において極めて興味深い現象である。